多賀城市文化財調査報告書第111集

多賀城市内の遺跡2

—平成24年度ほか発掘調査報告書—

新田遺跡　市川橋遺跡
山王遺跡　高崎遺跡
桜井館跡　安楽寺遺跡
大日南遺跡

平成25年3月

多賀城市教育委員会

多賀城市文化財調査報告書第111集

多賀城市内の遺跡2

—平成24年度ほか発掘調査報告書—

新田遺跡　市川橋遺跡
山王遺跡　高崎遺跡
桜井館跡　安楽寺遺跡
大日南遺跡

平成25年3月

多賀城市教育委員会

序　　文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡や多くの埋蔵文化財包蔵地があり、それらは市域の約4分の1にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であります。このことから当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用することはもとより歴史の解明に資する調査に努めているところです。

本書は、平成23年度と24年度に国庫補助事業として実施した19件の発掘調査の成果を収録したものです。特に山王遺跡の各調査では、古代のまち並みの根幹となった東西大路の北側で並行する東西道路跡の発見が相次ぎ、これまでの道路のあり方や年代観を再確認することができました。さらに、漆工人の居宅を区画する材木塀が発見されるなど、当時のまち並みの一端を垣間見ることができました。

いずれの調査も、規模としては大きなものではありませんが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の具体的な歴史像の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成25年3月

多賀城市教育委員会
教育長　菊地　昭吾

例　言

1　本書は、国庫補助事業による平成23年度の発掘調査7件と、平成24年度の発掘調査12件の成果をまとめたものである。
2　遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
3　測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系Ⅹ」を用いている。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いている。震災以前の調査成果に関しては、座標値を整合させるために、再測量の成果に基づき東に約3m、南に約1mの補正をかけている。
4　挿図中の高さは、標高値を示している。
5　土色は、『新版標準土色帖』(小山・竹原：1996)を参考にした。
6　調査一覧で●印の付いた調査については、文化庁通知「東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて（23庁財第61号）」に基づき緩和措置が取られることになったものである。
7　本書の執筆担当は下記のとおりで、編集は小原が行った。図版作成等は各執筆担当者と畠山未津留・高橋純平・板垣泰之が行い、遺物の写真撮影は四家・板垣が担当した。
　Ⅴ・Ⅹ：石川俊英
　Ⅲ・Ⅷ：島田　敬
　Ⅱ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅻ・ⅩⅢ・ⅩⅤ・ⅩⅦ：相澤清利
　Ⅰ・Ⅳ・Ⅹ・ⅩⅠ・ⅩⅡ・ⅩⅩ：小原一成
　ⅩⅠ：四家礼乃
8　山王遺跡第118次調査の報告に際し、村田晃一氏（宮城県教育庁文化財保護課）からご教示を賜った。
9　調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　次

Ⅰ　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 1
Ⅱ　新田遺跡第82次調査 …… 3
Ⅲ　新田遺跡第83次調査 …… 5
Ⅳ　山王遺跡第94次調査 …… 6
Ⅴ　山王遺跡第95次調査 …… 18
Ⅵ　山王遺跡第96次調査 …… 26
Ⅶ　高崎遺跡第91次調査 …… 28
Ⅷ　安楽寺遺跡第1次調査 …… 29
Ⅸ　新田遺跡第88次調査 …… 30
Ⅹ　市川橋遺跡第84次調査 …… 34
ⅩⅠ　市川橋遺跡第86次調査 …… 46
ⅩⅡ　山王遺跡第104次調査 …… 57
ⅩⅢ　山王遺跡第100次調査 …… 68
ⅩⅤ　山王遺跡第111次調査 …… 74
ⅩⅦ　山王遺跡第117次調査 …… 84
ⅩⅠ　山王遺跡第118次調査 …… 96
ⅩⅢ　山王遺跡第120次調査 …… 112
ⅩⅢ　高崎遺跡第93次調査 …… 133
ⅩⅩ　桜井館跡第2次調査 …… 137
ⅩⅩ　大日南遺跡第11次調査 …… 145

調査要項

1　調査主体　多賀城市教育委員会　　教育長　菊地昭吾
2　調査担当　多賀城市埋蔵文化財調査センター　　所　長　鈴木典男
3　調査担当者　多賀城市埋蔵文化財調査センター
　研究員　石川俊英　島田　敬　相澤清利　技　師　小原一成
　調査員　鈴木琢郎　四家礼乃　畠山未津留　高橋純平　板垣泰之

4　調査協力者　阿部公雄　大西康裕　柏葉真治　川邉伸晃　菅野知大　草刈則夫　小関精一　佐藤欣一
佐々木政仁　佐々木育代　沢木フミ子　西田洋平　早坂さい子　早坂雅子　伏見秀一
南部のぶ　松澤卓　山本重穂　油井賢
青葉建設株式会社　株式会社ウンノハウス　株式会社感動ハウス　株式会社ジーエスコンサルタント　株式会社西洋ハウジング　株式会社大成ハウジング　株式会社大雄産業
株式会社日沼工務店　株式会社ユニホー　澤木工務店　住友林業株式会社　スモリ工業
株式会社　造研工房・北　タクトホーム株式会社　東北ミサワホーム株式会社　三井ホーム株式会社　有限会社草刈商事

5　調査従事者　赤間幸佑　渥美静香　阿部純一　阿部孝子　阿部信夫　石井眞六　市川菖暁　伊藤竜子
稲井田盛　上村　博　浮田修三　大江かおり　大山邦夫　小川勝彦　小野玉乃
片倉　忠　加藤義宏　川村善蔵　河内建吉　菊地清喜　倉　宏三　輿　清志　小松美樹
紺野恵美　西條金三　齋藤勝彦　酒井玲子　佐々木一郎　佐藤有佳利　佐藤　正
佐藤良雄　重泉昌志　清水　亮　高橋正行　千葉美恵子　中島　弘　根本　清
橋沼茂二　濱田茂樹　平塚孝志　平塚武慶　藤田恵子　星　彰　山田理　横尾光男
若生要一

6　整理従事者　遠藤睦美　菅野良子　佐々木清子　千葉郁美　宮城ひとみ　村上和恵

調査一覧

平成23年度

№	遺跡名	所　在　地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	●新田遺跡第82次	新田字後93-6	平成24年1月12日	30㎡	相澤・畠山
2	●新田遺跡第83次	新田字新後2-2	平成24年2月8日	12㎡	島田・鈴木
3	●山王遺跡第94次	山王字中山王42-7、42-8、42-1の一部	平成24年1月19日～2月9日	95㎡	小原・高橋
4	●山王遺跡第95次	南宮字町70	平成24年1月17日～2月1日	51㎡	石川・四家
5	●山王遺跡第96次	山王字西町浦34-15	平成24年2月3日～2月4日	37㎡	相澤・畠山
6	●高崎遺跡第91次	留ヶ谷1丁目22-18	平成24年1月25日	20㎡	相澤・畠山
7	●安楽寺遺跡第1次	新田字上43-1、44-1、45-1	平成24年1月13日	14㎡	島田・鈴木

平成24年度

1	新田遺跡第88次	新田字新後3-1	7月11日～7月21日	72㎡	相澤・板垣
2	市川橋遺跡第84次	城南1丁目10の6の一部	4月11日～4月27日	100㎡	小原
3	市川橋遺跡第86次	城南1丁目2-12	5月30日～7月2日	90㎡	小原・四家
4	山王遺跡第100次	南宮字町41-1	4月17日～4月28日	60㎡	相澤・板垣
5	山王遺跡第104次	山王字山王四区6、7	5月30日～6月15日	98㎡	相澤・板垣
6	山王遺跡第111次	南宮字町41-6の一部	9月4日～10月6日	49㎡	相澤・板垣
7	山王遺跡第117次	南宮字町41-6の一部	10月18日～12月12日	61㎡	相澤・四家板垣
8	山王遺跡第118次	南宮字町41-9	10月19日～11月27日	43㎡	相澤・板垣
9	山王遺跡第120次	山王字中山王42-16	11月15日～平成25年1月12日	42㎡	小原・高橋
10	高崎遺跡第93次	高崎二丁目125-1の一部	9月6日～9月14日	36㎡	小原・四家
11	桜井館跡第2次	中央一丁目104-1	11月2日～平成25年1月31日	440㎡	石川
12	大日南遺跡第11次	高橋4丁目17-1、17-2、17-17、17-29	5月15日～5月19日	70㎡	小原

凡　例

1　本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

ＳＡ：柱列跡　　ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＤ：溝跡　　ＳＫ：土壙　　Pit：柱穴及び小穴

ＳＸ：その他の遺構

2　奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ」（多賀城市教育委員会　2003）に従った。詳細は下記のとおりである。

（1）　土師器杯

Ａ類：ロクロ調整を行わないもの

Ｂ類：ロクロ調整を行ったもの

ＢⅠ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

ＢⅡ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

ＢⅢ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

ＢⅣ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

ＢⅤ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

ＢⅠ・ＢⅡ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをａ、静止糸切りによるものをｂ、回転糸切り（糸切り）によるものをｃとして細分する

（2）　土師器甕

Ａ類：ロクロ調整を行わないもの

Ｂ類：ロクロ調整を行ったもの

（3）　須恵器杯

Ⅰ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

Ⅱ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

Ⅲ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

Ⅳ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

Ⅴ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

Ⅰ・Ⅱ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをａ、静止糸切りによるものをｂ、回転糸切り（糸切り）によるものをｃとして細分する。

3　瓦の分類は「多賀城跡　政庁跡　図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1980）、「多賀城跡　政庁跡　本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1982）の分類基準に従った。

4　本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線Ｃ期存続中に降灰し、承平4年（934年）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998）と、『扶桑略記』延喜15年（915年）7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10Ｃ頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。当市教育委員会では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

Ⅰ　遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70ｍの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高5～6ｍの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城や付属寺院の多賀城廃寺と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

以下、今年度に実施した発掘調査のうち、主な遺跡の概略について述べる。

新田遺跡は、標高5～6ｍの微高地に立地し、その範囲は東西約0.8㎞、南北約1.6㎞の広さを有する。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画されて屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

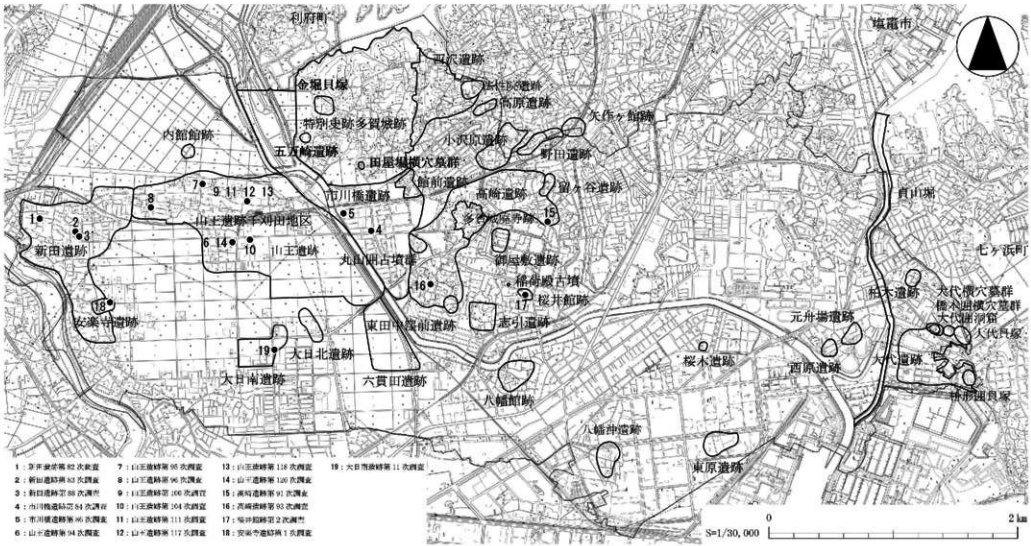
山王遺跡は、標高3～4ｍの微高地に立地し、その範囲は東西約2㎞、南北約1㎞の広さを有する。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいなどを構成する建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

市川橋遺跡は、標高2～3ｍの沖積地に立地し、その範囲は東西約1.4㎞、南北約1.6㎞の広さを有する。多賀城跡南面に広く占地し、山王遺跡と同様に古代の方格地割に基づくまち並みが形成されている。

高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約1.3㎞、南北約1㎞の広さを有する。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、多賀城廃寺跡の西側で約80軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括廃棄された状況で検出され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

安楽寺遺跡は、自然堤防上に立地し、古代末～中世の寺院跡であった可能性が想定されている。これまでの調査経歴はないため詳細は不明である。

大日南遺跡は、標高3ｍほどの沖積地に立地している。これまでの調査では、15・16世紀を中心とする武士の屋敷跡が発見されており、新田遺跡と同様に留守氏との関連が示唆される。



1：茅井貴塚第82次調査
2：新田遺跡第83次調査
3：新田遺跡第88次調査
4：市川橋遺跡第84次調査
5：市川橋遺跡第86次調査
6：山王遺跡第94次調査
7：山王遺跡第95次調査
8：山王遺跡第96次調査
9：山王遺跡第100次調査
10：山王遺跡第104次調査
11：山王遺跡第111次調査
12：山王遺跡第117次調査
13：山王遺跡第118次調査
14：山王遺跡第120次調査
15：高崎遺跡第91次調査
16：高崎遺跡第93次調査
17：桜井館跡第2次調査
18：安楽寺遺跡第1次調査
19：大日南遺跡第11次調査

図1　調査地位置図

Ⅱ　新田遺跡第82次調査

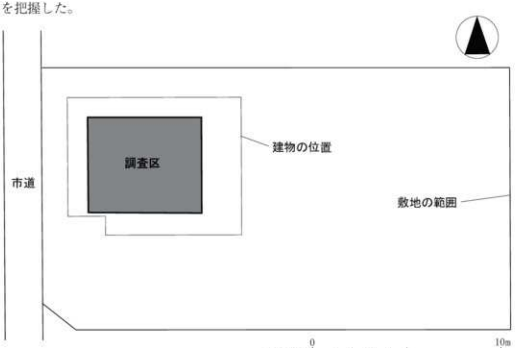
1　調査に至る経緯と経過と調査成果

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成23年11月9日に地権者より当該地区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に直径50cm、長さ5.7mの杭を33本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行なったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、平成23年12月27日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

なお、本件は東日本大震災に関連した被災家屋の建替えに起因するものである。

第1図　調査区位置図

調査は1月12日に実施した。調査区は建物建築部分の中央部に設定した。重機を使用して表土(盛土)の除去を行ったところ、約1m下で中世の遺構が発見される暗褐色土を検出した。上面を精査したが、遺構・遺物とも発見されなかった。また、この下層では水平に堆積するシルト層が続いており、安定した地盤が形成されていることを把握した。



第2図　調査区配置図

調査区全景（東より）

調査地近景（南西より）

調査区全景（東より）

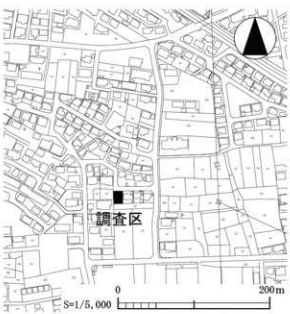
調査区東壁土層断面（西より）

調査区全景（南東より）

Ⅲ　新田遺跡第83次調査

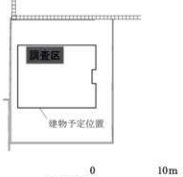
1　調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は、新田字新後地内（新田遺跡）における個人住宅建設に伴うものである。平成24年1月7日に地権者より住宅建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、建物基礎工事の際に直径20㎝、長さ8ｍの杭を26本打ちこむことから、地下に遺構があった場合の影響が懸念された。当該地の遺構の有無については、近接する寿福寺地区及び後地区での調査において、古墳時代から中世にかけての遺構が数多く発見されていることから、このような遺構の分布が広がってきていることが予想された。一方で、当該地が古墳時代以前は河川の流路にあたっていたという推定も、多賀城市内の微地形分類図から導き出せた。これらのことから、地権者に対し発掘調査が必要である旨を回答し、合わせて本件が東日本大震災に関連するものであるため、復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱規定により、調査を実施した場合は確認段階でとどめることを説明した。そして、地権者から調査実施の承諾が得られたことから、平成24年1月26日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、平成24年2月8日に現地調査を実施した。



第1図　調査区位置図

調査は、23ｍ×5ｍの大きさの調査区を設定して、重機により掘り下げを行った。そして、現地表面から約1.3ｍ下の黒色粘土層の上面で遺構検出作業を行った。その結果、遺構・遺物は発見されなかった。なお、本調査で確認した当該地の土層堆積状況は、上から黄褐色砂等（現代の盛土　厚さ約1.3ｍ）、しまりの弱い黒色粘土層（厚さ15～20㎝）、ややグライ化した暗灰色粘土層（厚さ10㎝以上）である。



第2図　調査区配置図

掘り下げ状況（東より）

Ⅳ　山王遺跡第94次調査

1　調査に至る経緯と経過

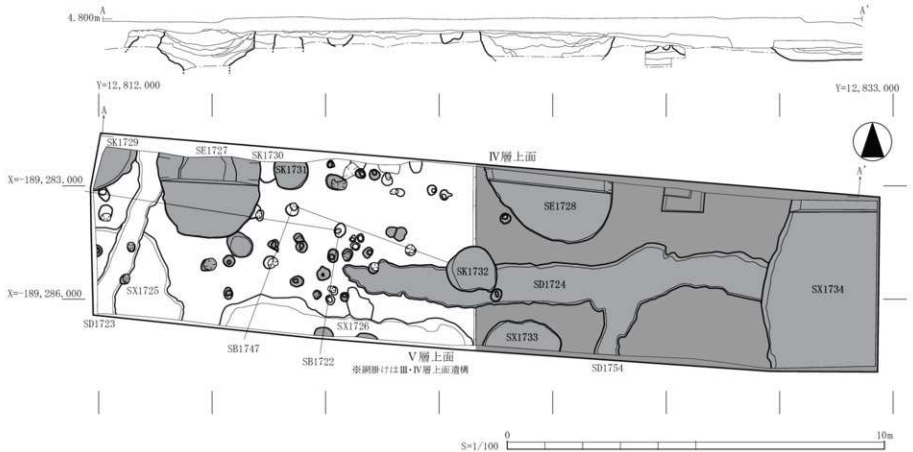
本調査は、宅地造成工事に伴う確認調査である。平成23年12月2日に地権者より当該地における宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、宅地を6区画造成し、側溝を伴う幅4.5m、長さ26.85mの東西の道路を新たに設置し、給排水管の埋設では、道路部分で最深1.35m、宅地部分で最深0.8mの掘削を行うものであった。周辺の調査成果から、遺構面までは現地表から約1mと想定したことから、宅地部分に関しては埋蔵文化財への影響がないと考えられたため、道路部分のみ発掘調査を行うこととなった。

なお、本件は東日本大震災に関連するものであるため、復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱規定により、原則第一面の確認調査で留めた。

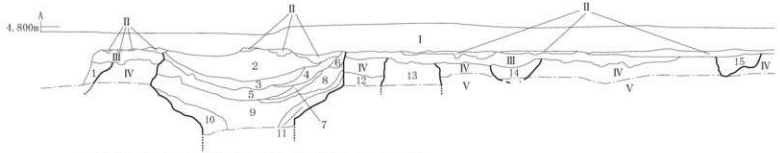
1月19日に掘削を開始し、表土（Ⅰ層）を除去したところ、暗褐色砂質土層（Ⅱ層）を確認した。この上面で遺構が検出されないことを確認し、再び重機により掘削を行い、東半部では黒褐色土層（Ⅳ層）、西半部では褐色砂質土層（Ⅴ層）上面で遺構を検出した。1月20日から遺構検出作業を開始し、1月28日に検出状況の写真撮影を行った。その後、一部遺構の精査と図面の作成をし、2月9日に重機で埋め戻しを行って調査を終了した。

第1図　調査区位置図

第2図　調査範囲図


4.800m
A
A'
Y=12,812.000
Y=12,833.000
X=-189,283.000
X=-189,286.000
SK1729
SE1727
SK1730
SK1731
Ⅳ層上面
SE1728
SK1732
SD1724
SX1734
SX1725
SD1723
SX1726
SX1733
SB1747
SB1722
Ⅴ層上面
※網掛けはⅢ・Ⅳ層上面遺構
SD1754
S=1/100
0
10m

第3図　検出遺構平面図



1：SK1729　2～11：SE1727　12：SK1730　13：SK1731　14・15：柱穴

16～22:SE1728　23～25：柱穴　26～28：SX1734

S=1/50　0　3m

第4図　調査区北壁断面図

2　調査成果

（1）　層　序

今回の調査で確認した層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：既存建物解体後の整地層で、厚さは19 ～ 40cmである。

Ⅱ層：均質な暗褐色砂質土層で、厚さは3 ～ 29cmである。東ほど厚く堆積している。近世から近代の堆積層である。

Ⅲ層：調査区西半分に堆積する褐色土をブロック状に含む均質な黒褐色粘質土層である。厚さは10 ～ 18cmである。中世以降の遺構検出面である。

Ⅳ層：調査区のほぼ全体に堆積する褐色や灰褐色土がブロック状に混入する黒褐色土層で、厚さは27cm以上である。古代～中世の遺構検出面であり、調査区東半部ではこの層上面で遺構を検出した。

Ⅴ層：調査区全体に堆積する暗褐色や黄褐色土がブロック状に多量に混入する褐色の砂質土層で、厚さは17cmである。古代の遺構検出面であり調査区西半部ではこの層上面で遺構を検出した。

Ⅵ層：調査区東寄りの深掘り箇所で確認した均質な褐色砂質土で、厚さは17cmである。

Ⅶ層：調査区東寄りの深掘り箇所で確認した均質な褐色砂質土で、厚さは15cmである。

Ⅷ層：調査区東寄りの深掘り箇所で確認した黒褐色粘質土で、厚さは6cm以上である。水田層と考えられる。

（2）　発見遺構と遺物

東半部ではⅣ層上面で溝跡、井戸跡、土壙を、西半部ではⅤ層上面で掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、土壙を発見した。西半部の遺構については、埋土が黒褐色を呈するものと、褐色もしくは暗褐色を呈するものの2者が確認でき、前者はⅣ層検出、後者はⅤ層検出である。

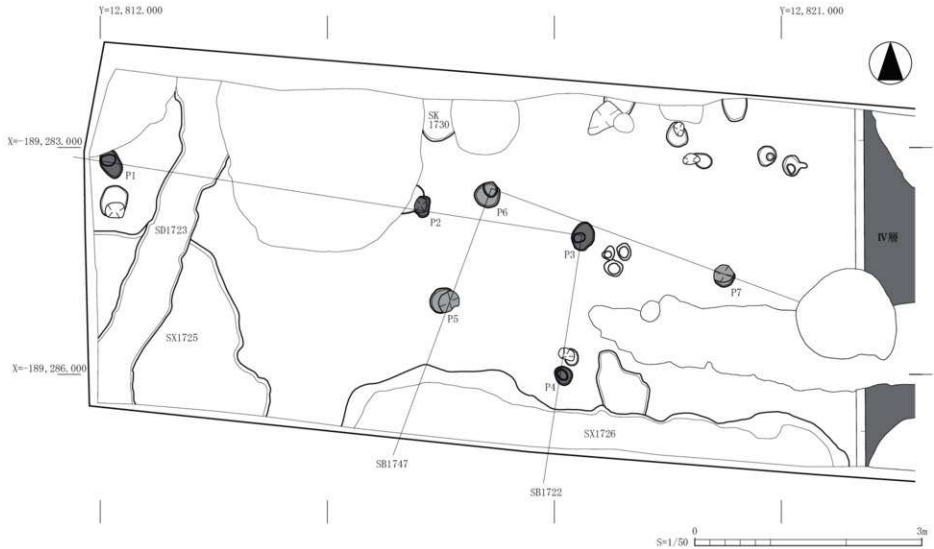
【Ⅴ層上面検出遺構】

ＳＢ1722掘立柱建物跡（第5図）

調査区西端で発見した東西3間以上、南北2間以上の建物跡である。調査区外に延びているため、全容は不明である。4基の柱穴を検出しており、東側柱列の2基と北側柱列西より1間目柱穴で柱痕跡、それ以外の柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、東側柱列で測ると北で9度5分東に偏している。規模は、北側柱列で総長約8.4ｍ以上、東側柱列で約2.8ｍ以上であり、柱間は北側柱列で西より約4.2ｍ（2間分）、約2.1ｍ、東側柱列で1.84ｍである。柱穴は円形もしくは楕円形であり、規模は径25cm～ 40cmである。埋土は褐色や暗褐色土が主体である。柱痕跡は直径約10cmの円形であり、埋土は暗褐色や黒褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＢ1747掘立柱建物跡（第5図）

調査区西側で発見した東西、南北ともに2間以上の建物跡である。西側柱列は調査区外に延びているため、全容は不明である。3基の柱穴を検出しており、北西隅柱穴で柱痕跡、それ以外の柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、西側柱列で測ると北で約20度東に偏している。規模は、西側柱列で総長3.4以上、北側柱列で約4.3ｍ以上であり、柱間は西側柱列で約1.6ｍ、北側柱列で約3.3ｍである。柱穴は円形であり、規模は径27cm～ 40cmである。埋土は褐色や暗褐色土が主体である。柱痕跡は直径20cmの円形であり、埋土は暗褐色土である。遺物は出土していない。



第5図　Ⅴ層上面検出遺構平面図（調査区西半部）

ＳＤ1723溝跡（第5・8図）

調査区西端で発見した南北溝跡である。調査区外に延びているため、全容は不明である。ＳＸ1725と重複し、それよりも新しい。方向は北で約24度東に偏しており、規模は、長さ3.8ｍ以上、幅83㎝である。埋土は暗褐色土が主体であり、灰白色火山灰をブロック状に含む。

遺物は、検出面から第8図1･2に示した土師器杯のほか、土師器杯（ＢＶ類・Ｂ類）・土師器甕（Ａ類・Ｂ類）、須恵器杯（Ｖ類）・長頸瓶、平瓦の破片が出土している。

ＳＫ1730土壙（第5図）

調査区北西側で発見した。北側は調査区外に延びており、また遺構との重複のため、全容は不明である。規模は、南北で65㎝以上、深さ20㎝以上である。埋土は、Ⅵ層由来の褐色砂質土を含む暗褐色砂質土である。遺物は出土していない。

ＳＸ1725（第5図）

調査区南西端で発見した性格不明の遺構である。西側と南側が調査区外に延びているため、全容は不明である。ＳＤ1723溝跡と重複し、それよりも古い。平面は不整形であり、規模は東西2.2ｍ以上、南北2.3ｍ以上である。埋土は暗褐色土である。

遺物は、検出面から須恵器杯（Ｉａ類）・甕の破片が出土している。

ＳＸ1726（第5図）

調査区南西側で発見した性格不明の遺構である。南側が調査区外に延びているため、全容は不明である。平面は不整形であり、規模は東西6.8ｍ以上、南北1ｍ以上である。

遺物は、検出面から土師器甕（Ｂ類）と須恵器の高台付杯の破片が出土している。

【Ⅳ層上面検出遺構】

ＳＤ1724・1754溝跡（第6・7図）

ＳＤ1724は、調査区中央から東側に延びる東西溝跡である。西端より約6.5ｍの位置でＳＤ1754と接続する。ＳＫ1732・1734土壙、ＳＸ1734と重複し、いずれよりも古い。方向は、ＳＤ1724は溝の東西で測ると東で約2度北に偏しており、ＳＤ1754は、溝の南北で測ると北で約32度東に偏している。規模は、ＳＤ1724は長さ約11.1ｍ以上、幅1～1.4ｍ、ＳＤ1754は長さ1.4ｍ以上、幅50～90㎝である。埋土は、白色粒を多く含む黒褐色土を主体とし、西側では、Ⅴ層を由来とする褐色砂質土をブロック状に含む。

遺物は、検出面から土師器杯（Ａ類）・甕、須恵器杯（Ｉ類）・甕・瓶の破片が出土している。

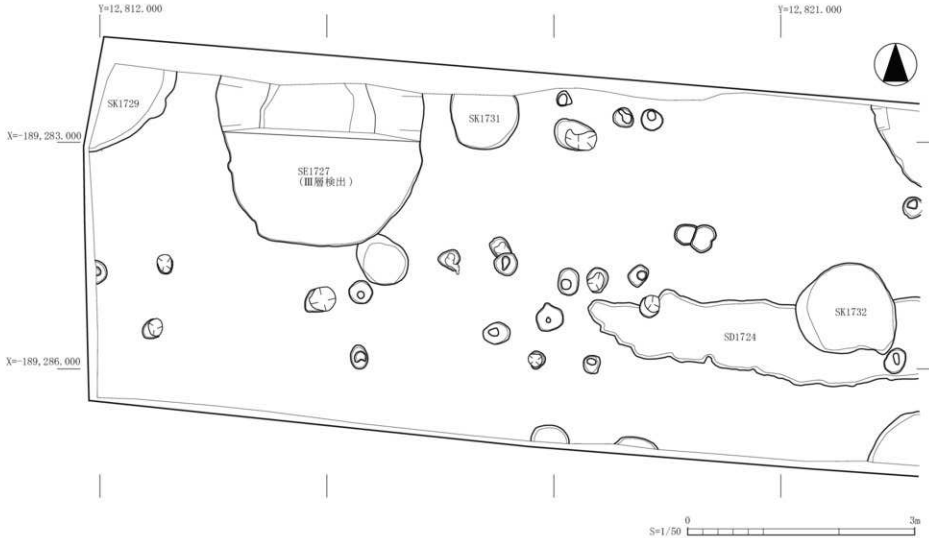
ＳＥ1728井戸跡（第7図）

調査区中央北側で発見した素掘りの井戸である。北側は調査区外に延びているため、全容は不明であるが、不整円形と考えられる。規模は、東西約3.4ｍ、深さ60㎝以上である。壁はわずかに内湾しながらゆるやかに立ち上がる。埋土は、1層は黒褐色土、2･3層は黒褐色粘質土、4層は黒褐色粘質土、5層は黒色粘質土、6層は黒色の植物遺存体層、7･8層は黒褐色粘質土である。

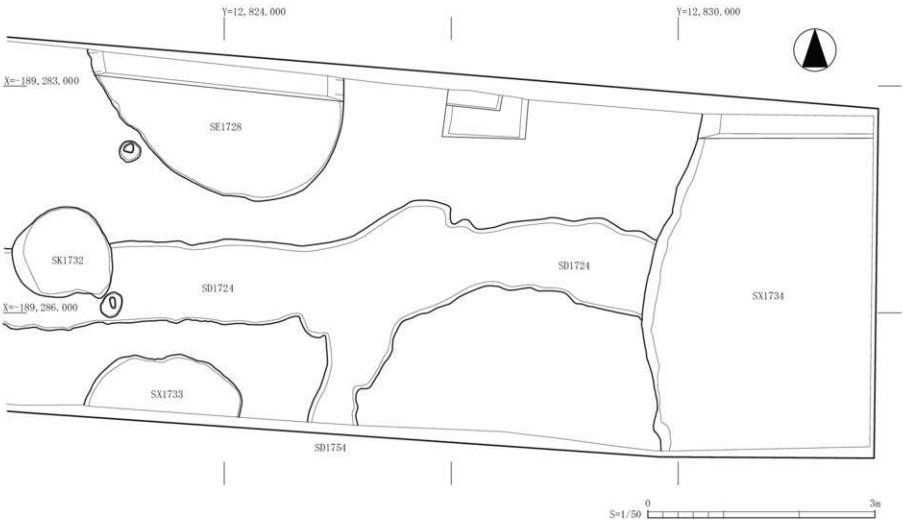
遺物は、検出面から土師器杯（Ａ類）・甕（Ａ類）、須恵器杯・甕、須恵系土器の破片が出土している。

ＳＫ1729土壙（第6・8図）

調査区北西隅で発見した。北側と西側が調査区外に延びているため全容は不明であるが、確認できる限りでは円形もしくは楕円形と推測する。規模は、東西、南北ともに1.2ｍ以上、深さ30㎝以上である。埋土は、



第6図　Ⅲ・Ⅳ層上面検出遺構平面図（調査区西半部）



第7図　Ⅳ層上面検出遺構平面図（東半部）

暗褐色土である。

遺物は、検出面から第8図3に示した土師器杯のほか、土師器杯（A類・BV類）・甕（B類）、須恵器甕の破片が出土している。

SK1731土壙（第6図）

調査区北西側で発見した。北側は調査区外に延びるため、全容は不明である。平面は隅丸方形状であり、規模は東西で直径90cm、深さは30cm以上である。埋土は、Ⅵ層由来の褐色砂質土を含む黒褐色土である。

遺物は、検出面から土師器甕、須恵器杯・甕の破片が出土している。

SK1732土壙（第6図）

調査区中央で発見した。SD1724溝跡と重複し、それよりも新しい。平面は不整円形であり、規模は直径1.3mである。埋土は、Ⅵ層由来の褐色砂質土を含む黒褐色土である。

遺物は、検出面から土師器杯（BV類）・甕（A・B類）、須恵器杯・瓶の破片が出土している。

SX1733（第7図）

調査区中央南側で発見した性格不明の遺構である。南側が調査区外に延びるため、全容は不明である。規模は、東西で約2.1m、南北で0.8m以上である。埋土は、Ⅵ層由来の褐色砂質土を含む黒褐色土である。

遺物は、検出面から土師器杯（A・B類）・甕、須恵器杯（I類）・甕・瓶の破片が出土している。

SX1734（第7・8図）

調査区東端で発見した性格不明の遺構である。西辺のみの検出であり、全容は不明である。SD1724溝跡と重複し、それよりも新しい。規模は、東西約3m以上、南北約4.4m以上、深さ36cmである。壁面はゆるやかに外傾して立ち上がる。埋土は、1層は灰黄褐色粘質土、2層は炭化物を含む黒褐色粘質土、3層は灰黄褐色砂質土である。

遺物は、検出面から第8図4に示した土人形のほか、須恵器甕の破片を用いた土器片製円板が出土している。

【Ⅲ層上面検出遺構】

SE1727井戸跡（第6図）

調査区北西側で発見した素掘りの井戸である。北側は調査区外に延びているため、全容は不明である。平面は不整円形もしくは不整楕円形である。壁面は、検出面から約90cmの深さまでは内湾しながらゆるやかに立ち上がっており、それ以下ではほぼ直立する。規模は、開口部で直径2.7m、深さ90cmの段状の部分で直径1.3m、深さ1m以上である。埋土は、1層は黒褐色粘質土、2層はオリーブ黒色粘質土、3層は黒褐色砂質土、4層は黒褐色土、5層は黒色の植物遺存体層、6層は黒褐色を主体として黄褐色や赤褐色、褐色土をブロック状に非常に多く含む土、7層は黒色の植物遺存体層と暗褐色土が互層になる層、8層は暗褐色を主体として黒褐色、黄褐色、赤褐色土をブロック状に非常に多く含む土、9層は黒褐色粘質土である。

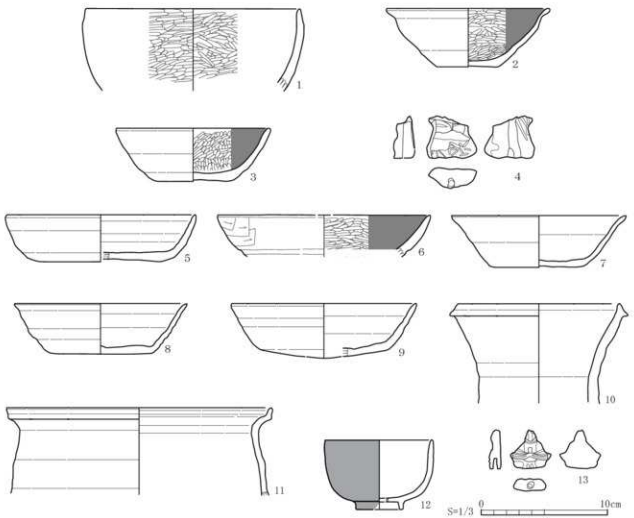
遺物は、検出面から土師器杯・甕（B類）、須恵器杯（I類）・甕、須恵系土器、平瓦、鉄鎌（写真図版1-1）、刀子、古銭の破片が出土している。

堆積層その他出土遺物（第8図）

Ⅱ層からは、近世の陶器椀、土人形のほか、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、磁器椀・花瓶、軟質施釉陶器、

砥石の破片が出土している。Ⅳ層からは土師器杯（A類、BⅠ類、BⅤ類）・甕（B類）、須恵器杯（Ⅰc類、Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅴ類）・高台付杯・甕・長頸瓶、丸瓦・平瓦、砥石の破片が出土している。また、西半部にてⅤ層上面の遺構を検出する際に、土師器杯（BⅠc類・BⅡc類・BⅤ類）、須恵器杯（Ⅰ類・Ⅱ類）・高台付杯・須恵器甕・瓶の破片が出土している。

※まとめは隣接地の調査である「ⅩⅦ　山王遺跡第120次調査」にておこなう。



単位(cm)

番号	遺構 層位	種類	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
1	SD1723 検出面	土師器 杯	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(16.8) 3/24	–	–		R1	
2	SD1723 検出面	土師器 杯	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ，黒色処理	(13.0) 5/24	(4.8) 9/24	4.6		R2	BV類
3	SK1729 検出面	土師器 杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ヘラミガキ，黒色処理	(12.0) 2/24	(5.8) 9/24	4.2		R3	BIII類
4	SX1734 検出面	土製品 土人形	–	–	–	–	–	1-2	R4	
5	V層 遺構検出時	須恵器 杯	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(14.8) 6/24	(9.6) 10/24	3.7		R5	I類
6	IV層	土師器 杯	ヘラケズリ	ヘラミガキ，黒色処理	(16.8) 3/24	–	–		R6	AIa類
7	IV層	須恵器 杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.8) 4/24	(7.2) 12/24	4.1		R7	III類
8	IV層	須恵器 杯	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(13.6) 3/24	(7.2) 7/24	4.1		R8	I類
9	IV層	須恵器 杯	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(14.6) 4/24	(10.2) 4/24	–		R9	II類
10	IV層	須恵器 長頸瓶	ロクロナデ	ロクロナデ	(12.8) 4/24	–	–		R10	
11	IV層	土師器 甕	ロクロナデ	ロクロナデ	(20.8) 4/24	–	–		R11	
12	II層	陶器 椀	–	–	(8.6) 11/24	(3.6) 12/24	5.5		R12	
13	II層	土製品 土人形	–	–	–	–	–	1-3	R13	天神？

第8図　ＳＤ1723溝跡、ＳＫ1729・ＳＫ1734土壙及び堆積層出土遺物

遺構検出状況（西より）

鉄鏃（S E 1727）

土人形（S X 1734・Ⅱ層）

写真図版

Ⅴ　山王遺跡第95次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅新築工事に伴うものである。平成24年1月6日に地権者より当該地における個人住宅新築工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、建物基礎工事の際に直径60cm、長さ7.75ｍの柱状改良杭が35本施工され、給排水布設工事では宅外で最深2.5ｍの掘削、宅内で最深70cmの掘削を伴うものであった。周辺の調査における現地表面から遺構面までの深さは、西側の第74次調査で1.8 ～ 2.3ｍであることから埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により遺構等の保存が図れないか協議を行ったが、申請どおりの工法で着手することに決定した。その後、地権者より発掘調査の依頼・承諾書の提出を受け、調査の実施に至ったものである。なお、本件は、東日本大震災を原因とするものであるため、復興事業に伴う埋蔵文化財取扱規定により、原則として第1面での確認調査にとどめている。

第1図　調査区位置図

調査は1月17日より重機を使って堆積土（第Ⅰ～Ⅳ層）を除去した。掘削土は調査時の安全面と調査面積確保のため、全て場外に搬出した。翌日より作業員を動員し器材搬入など調査に係る諸準備を行うとともに、排水と下層遺構の確認のため、調査区東壁及び西壁に沿って側溝を設けた。これらの作業が終了した19日より遺構検出作業を開始した。その結果、調査区北側でＳＢ1750掘立柱建物跡、中央部でＳＥ1753・1754井戸跡、ＳＤ1749・1751・1752・1755溝跡を発見した。このうち、ＳＤ1749については、位置関係などから古代の道路網のうち、北2東西道路跡の南側溝であることが明らかとなった。これらの遺構については、重複関係を確認後に一部遺構の埋土を掘り下げた。20日に図面作成のための基準点を設定し、遺構埋土の掘り下げが終了した25日には調査区の全景写真撮影を行った。その後、各遺構の平面図と断面図、西・東壁の断面図作成を行った。28日、土層の註記等の補足的な調査を行った後に、使用した器材を搬出した。2月1日、重機による埋め戻しを行って、現地調査の一切を終了した。

2　調査成果

（1）　層　序

今回の調査区で確認できた層序は以下のとおりである。

Ⅰ　層：現代の盛土（砂質土）で、厚さは20 ～ 45cmである。

Ⅱ　層：調査区全域に堆積している粘性のある暗褐色土と黒褐色土である。厚さは43 ～ 56cmである。

Ⅲ　層：調査区の北西側に堆積している粘性のある黒褐色土で、厚さは9 ～ 16cmである。

Ⅳ　層：調査区全域に堆積している褐色の砂質土を含む黒褐色土で、厚さは10 ～ 20cmである。

Ⅴ　層：調査区北側に堆積している黒褐色土を斑状に含む褐色の砂質土で、厚さは2 ～ 8cmである。
今回の調査で発見された遺構検出面である。

Ⅵ　層：調査区北側に堆積している粘性のある褐色の砂層で、厚さは2 ～ 8cmである。

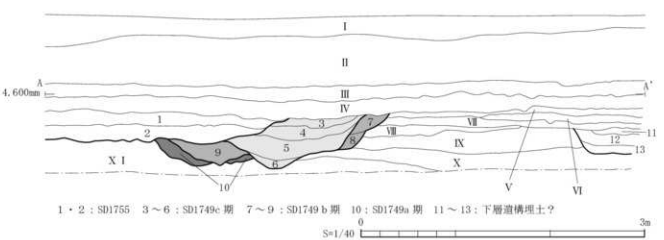
Ⅶ　層：調査区北側に堆積している灰黄褐色の砂質土で、厚さは6 ～ 11cmである。

Ⅷ　層：調査区中央部に堆積しているにぶい黄褐色土で、厚さは2 ～ 10cmである。

Ⅸ　層：調査区北半部に堆積している粘性としまりがある褐色の砂質土で、厚さは12 ～ 25cmである。
下層の遺構検出面の可能性がある。

Ⅹ　層：調査区北半部に堆積している黒褐色粘土を斑状に含む灰黄褐色土で、厚さは11cm以上である。

ⅩⅠ層：暗灰黄色土の砂質土で、今回の調査区で確認した最下層である。



第2図　調査区西壁土層堆積状況

（2）　発見遺構と遺物

ＳＸ1748北2東西道路跡（第2・3図）

調査区中央部で発見した東西方向の道路跡である。東西大路の北側約190ｍに位置しており多賀城外に施工された道路網のうち北2東西道路跡に相当する。本調査区ではＳＤ1749南側溝を東西約7.7ｍ検出したが、路面及び路面堆積土は確認できなかった。ＳＢ1750掘立柱建物跡、ＳＤ1751・1752・1755溝跡、ＳＥ1753・1754井戸跡と重複し、ＳＤ1751・1752より新しく、ＳＤ1755・ＳＥ1753・1754より古い。ＳＢ1750との関係は不明である。道路跡の方向は東で約2°北に偏している。南側溝で3時期（ａ～ｃ期）の変

遷を確認しており、以下この変遷について記載する（註）。

A期：南側溝（ＳＤ1749ａ）を調査区西壁の断面で確認した。ＳＤ1755溝跡とｂ・ｃ期によって遺構の大部分が破壊されており、わずかに側溝の底部を残すのみであった。確認できた規模は上幅約1.1ｍ、下幅15cm、深さは18cm以上である。断面形は船底形で、壁は底面より緩やかに立ち上がる。埋土は暗灰黄色土砂をブロック状に含む黒褐色粘質土である（9層）。遺物は出土していない。

B期：南側溝（ＳＤ1749ｂ）はａ期よりわずかに北側に移動して造り替えられている。確認できた規模は上幅2.3ｍ以上、下幅10cmである。深さは53cmである。断面形は船底形で、壁は底面より緩やかに立ち上がっている。埋土は3層に分けられる。上層（6・7層）は粘性としまりのある灰黄褐色砂質土、下層（8層）は褐灰色粘土である。遺物は出土していない。

C期：南側溝（ＳＤ1749ｃ）はｂ期よりやや南側に移動して造り替えられている。確認できた規模は上幅1.2ｍ以上、下幅25cmである。深さは55cmである。断面形は船底形で、壁は底面より緩やかに立ち上がっている。埋土は4層に分けられる。上層（2・3層）は粘性としまりのある黒色土、下層（4・5層）は黒褐色粘質土層で、4層には灰白色火山灰を斑状に含んでいる。遺物は出土していない。

ＳＢ1750掘立柱建物跡（第3図）

調査区北西側で発見した建物跡である。東西2間、南北は2間分確認した。柱穴を5基（Ｐ1～5）検出し、内4基（Ｐ1・2・4・5）で柱抜取り穴を確認した。方向は南側柱列で、西で約8°北に偏している。建物の規模は南側柱列で総長約3.7ｍ、柱間は東より約1.9ｍ、約1.8ｍであり、東側柱列の柱間は約1.9ｍ、西側柱列の柱間は約1.6ｍである。柱穴は方形もしくは円形で、規模は28～49cmである。埋土は褐色の砂質土を含む黒褐土である。柱痕跡は径12cmの円形である。遺物は出土していない。

ＳＤ1751溝跡（第3図）

調査区北半部で発見した南北溝跡である。ＳＤ1749溝跡と重複し、これより古い。溝の北側は調査区外に延び、南側はＳＤ1749によって失われている。方向は北で約7°東に偏している。規模は長さ2.7ｍ以上、上幅20～30cmであり、埋土は砂質土を主体とした褐色土である。遺物は出土していない。

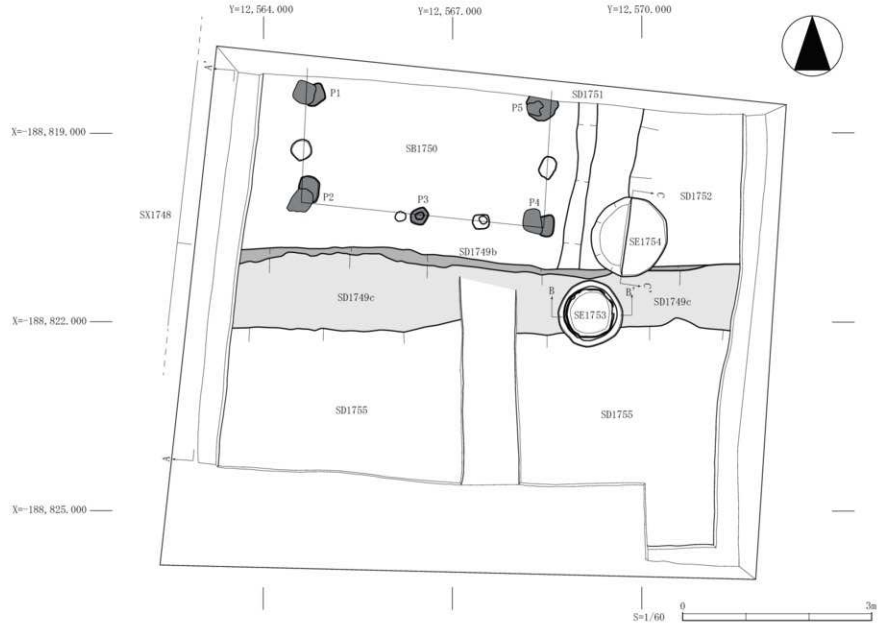
ＳＤ1752溝跡（第3図）

調査区東半部で発見した南北溝跡である。ＳＤ1749溝跡、ＳＥ1752井戸跡と重複し、これらより古い。溝の北と東側は調査区外に延びている。確認できた規模は長さ2.4ｍ以上、上幅1.9ｍ以上である。埋土は灰黄褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＤ1755溝跡（第2・3図）

調査区南半部で発見した東西溝跡である。ＳＤ1749溝跡、ＳＥ1753井戸跡と重複し、ＳＥ1753より古く、ＳＤ1749より新しい。溝の両端は調査区外に延びている。確認できた規模は長さ7.7ｍ以上、上幅2.1ｍ以上、下幅1.9ｍ以上で、深さは35cmである。底面は幾分凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に分けられる。上層（1層）は暗褐色粘土、下層（2層）は黒褐色粘土である。遺物は出土していない。

（註）ＳＤ1749については、西壁断面の観察により、第2図6・7層と8層を異なる時期と捉え、4時期の変遷として把握することも可能である。しかし今回は、確認調査にとどめているため面的な検出に至っていないことから、隣接する県道の調査成果（宮城県教育委員会　1998）に基づき、3時期の変遷として報告する。


Y=12,564.000
Y=12,567.000
Y=12,570.000
X=-188,819.000
X=-188,822.000
X=-188,825.000
P1
P2
P3
P4
P5
SB1750
SD1751
SD1752
SX1748
SE1754
SD1749b
SD1749c
SD1749c
SE1753
SD1755
SD1755
A
A'
B
B'
C
C'
S=1/60
0
2m

第3図　検出遺構平面図

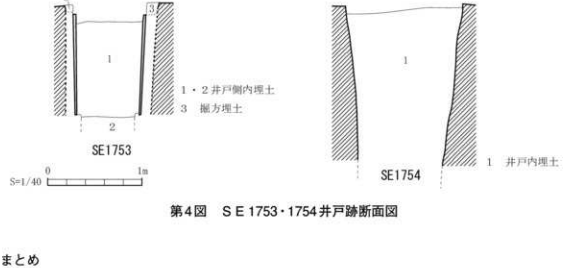
ＳＥ1753井戸跡（第3・4図）

調査区中央部のＳＤ1749溝跡埋土の上面で発見した井戸跡である。ＳＤ1755溝跡と重複し、これより新しい。平面形は円形で、直径は約1.1ｍである。井戸側は、横12㎝、縦約1ｍの板材を円形に巡らせており、直径は75㎝である。板材のさらに下方まで井戸側内埋土が認められたことから約1.2ｍまで掘り下げたが底面を確認することはできなかった。井戸側内の埋土は、上層（1層）は黒褐色の粘質土、下層（2層）は黒褐色粘質土と砂質土がブロック状に混じっている。掘方埋土（3層）は砂質土が混入する黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＥ1754井戸跡（第3・4図）

調査区中央部東側で発見した素掘りの井戸跡である。ＳＸ1748道路跡、ＳＤ1752溝跡と重複し、これらより新しい。平面形は円形で、直径は約1.3ｍである。検出面から深さ1.7ｍまで掘り下げたが底面は確認していない。埋土はにぶい黄褐色砂質土と黒褐色土が混じっており、人為的に埋め戻されている。

遺物は土師器杯（Ａⅲ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ｂⅲ類）・甕、灰釉陶器碗、素焼きの土人形・犬（写真図版右下）が出土している。



第4図　ＳＥ1753・1754井戸跡断面図

4　まとめ

今回の調査では東西道路跡1条と掘立柱建物跡1棟、溝跡3条、井戸跡2基、柱穴等を発見した。

ＳＸ1748北2東西道路跡については、ＳＤ1749南側溝の変遷より（ａ→ｃ期）であることが明らかである。このうちｃ期南側溝埋土の最下層には10世紀前葉に降下した灰白色火山灰粒子が斑状に認められることから、ｃ期はその前後の年代と考えられる。また、これより古いａ・ｂ期の年代については10世紀前葉以前となる。

ところで、北2道路については、西側に隣接する県道の調査（宮城県教育委員会1998）においても発見されており、道路跡（ＳＸ3106）とこれに伴う南北両側溝が確認されている。これらの成果と本調査の成果を対比させると表のとおりである。ＳＸ3106では3時期（Ａ→Ｃ期）の変遷が確認されており、このうち最も新しいＣ期側溝に灰白色火山灰が混入している。年代はＣ期が10世紀前半代、Ａ・Ｂ期が9世紀後半代とされている。したがって、本調査でも同様の年代を考えておきたい。

ＳＤ1751・1752溝跡は、重複関係から道路跡より古いことが判明しており、それ以前の時期となる。

ＳＤ1755溝跡は、西側に隣接する県道の調査で発見されたＳＤ3072溝跡に相当するものと見られ、年代は近世とされていることから、本調査でも同様の年代としておきたい。

ＳＢ1750建物跡は道路路面と推定される範囲に構築されたものであるが、路面及び路面堆積土が認められないことから、道路との直接的な新旧関係は不明である。一方西側に隣接する県道の調査では、古代及び近世の掘立柱建物跡が多数発見されており、柱穴の規模を見ると古代のものは0.6～1ｍの方形または40～70㎝の隅丸方形を主体としているのに対し、近世では30～60㎝の円形もしくは隅丸方形を主体とする傾向が伺える。本遺構の柱穴の規模は28～49㎝の円形もしくは方形である。規模や形態は近世の柱穴と近似していることから、年代は近世頃と推定しておきたい。

ＳＥ1753はＳＤ1755より新しいことから近世以降のものである。本遺構は板材を円形に巡らした井戸側を有しており、18～19世紀頃とされている仙台城二の丸第17地点で発見された2号井戸（東北大学埋蔵文化財調査研究センター2005）と近似している。一方、ＳＥ1754はＳＥ1753の北側に隣接する素掘りの井戸であり、埋土から土人形・犬が出土している。高さ4.2㎝、長さは約5㎝であり、仙台城二の丸第9地点の15号土壙や北方武家屋敷（東北大学埋蔵文化財調査研究センター1997・2000）で出土したものに類似している。年代は前者については18世紀後葉～19世紀初頭と考えられていることから、本遺構についても同様の年代と想定したい。

	ＳＸ3106（町地区調査）		ＳＸ1748（第95次）
	北側溝（3時期）	南側溝（3時期）	南側溝（3時期）
灰白色火山灰降下以前	ＳＸ3106 a ＳＸ3106 b	ＳＸ3106 a ＳＸ3106 b	ＳＤ1749 a ＳＤ1749 b
灰白色火山灰を含む	ＳＸ3106 c	ＳＸ3106 c	ＳＤ1749 c

表　北2東西道路跡側溝時期別対比表

参考文献

白鳥良一　「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所　1980

白鳥良一　「多賀城跡　政庁跡本文編　第Ⅶ章　考察（2）」宮城県多賀城跡調査研究所　1982

宮城県多賀城跡調査研究所「第60・61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』　1992

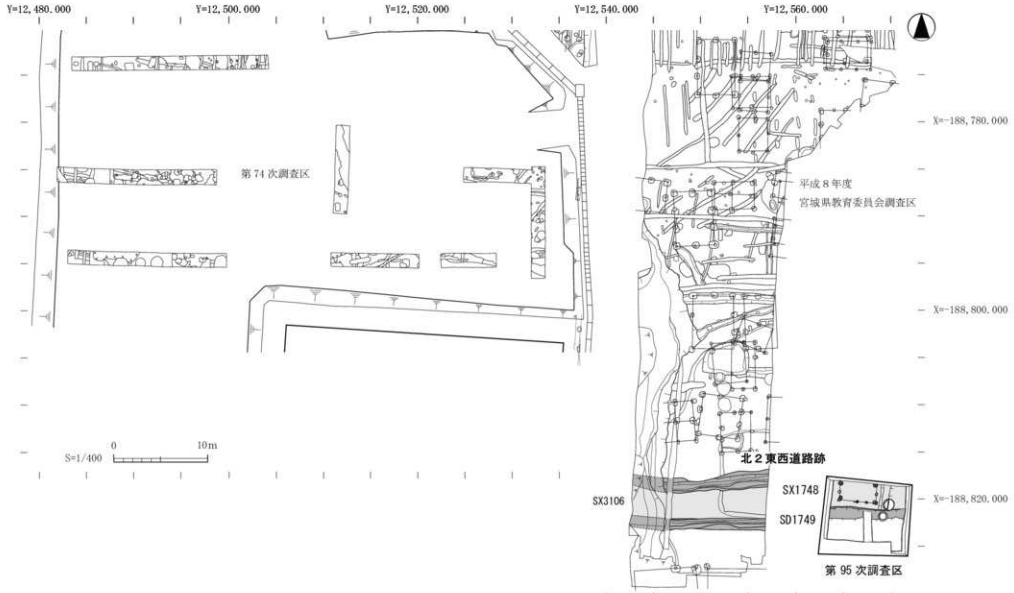
東北大学埋蔵文化財調査研究センター「東北大学埋蔵文化財調査報告8―仙台城二の丸跡第9地点の調査―」1997

宮城県教育委員会・宮城県土木部『山王遺跡町地区の調査―県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅱ―』宮城県文化財調査報告書第175集　1998

東北大学埋蔵文化財調査研究センター「東北大学埋蔵文化財調査報告13―仙台城二の丸北方武家屋敷跡第4地点の調査―」2000

多賀城市教育委員会『市川橋遺跡―城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅲ―』多賀城市文化財調査報告書第75集　2004

東北大学埋蔵文化財調査研究センター「東北大学埋蔵文化財調査報告18―仙台城二の丸跡第17地点の調査―」2005



第5図　本調査区及び周辺の調査区

遺構検出状況（南西より）

遺構検出状況（西より）

SE1753井戸側検出状況（南より）

土人形（ＳＥ1754）

Ⅵ　山王遺跡第96次調査

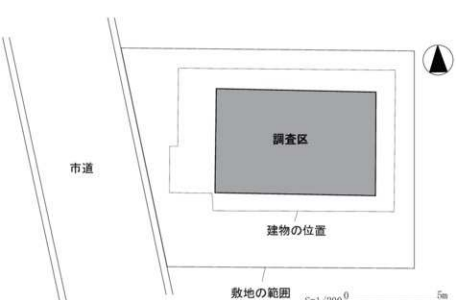
1　調査に至る経緯と経過と調査成果

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成23年12月20日に地権者より当該地区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に直径40㎝、長さ7ｍの杭を33本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行なったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、平成24年1月18日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

なお、本件は東日本大震災に関連した被災家屋の建替えに起因するものであるため、復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱規定により、調査は遺構検出第一面での確認調査にとどめることとした。

第1図　調査区位置図

調査は2月3～4日に実施した。調査区は建物建築部分の中央部に設定した。重機を使用して表土(盛土)の除去を行ったところ、約1～1.2ｍ下で地山面(基盤層)を検出した。精査の結果、遺構・遺物とも発見されなかった。



第2図　調査区配置図

調査地近景（北西より）

調査区全景（西より）

調査区東壁土層断面（西より）

写真図版

Ⅶ　高崎遺跡第91次調査

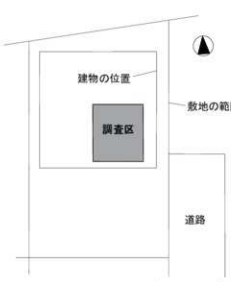
1　調査に至る経緯と経過と調査成果

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成23年12月19日に地権者より当該地区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に直径60cm、長さ3mの杭を35本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行なったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、平成24年1月20日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

第1図　調査区位置図

なお、本件は東日本大震災に関連した被災家屋の建替えに起因するものであるため、復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱規定により、調査は遺構検出第一面での確認調査にとどめることとした。

調査は1月25日に実施した。調査区は建物建築部分の南東部に設定した。重機を使用して表土（盛土）の除去を行ったところ、約1m下で基盤層（岩盤）に到達した。精査の結果、遺構・遺物とも発見されなかった。



第2図　調査区配置図

調査区全景（北より）

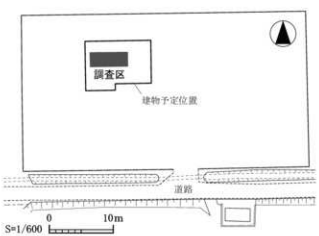
Ⅷ　安楽寺遺跡第1次調査

1　調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は、新田字上地内（安楽寺遺跡）における個人住宅建設に伴うものである。平成23年11月10日に地権者より住宅建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、建物基礎工事の際に直径60cm、長さ6.25mの杭を37本打ちこむことから、地下に遺構があった場合の影響が懸念された。このため、地権者に対し発掘調査が必要である旨を回答し、合わせて、本件が東日本大震災に関連した被災家屋の建替えに起因するものであるため、復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱規定により、調査を実施した場合は確認段階でとどめることを説明した。なお、本遺跡は昭和40年代に実施した分布調査で、土塁状の高まりが観察できたことから遺跡として登録されたものであるが、現在はその高まりは確認できない。調査については、地権者から調査実施の承諾が得られたことから、平成23年12月15日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、平成24年1月13日に現地調査を実施した。

第1図　調査区位置図

調査は、2.3m×6mの大きさの調査区を設定して、重機により掘り下げを行った。そして、現地表面から約1.7m下のしまりのある灰黄色粘質土層の上面で遺構検出作業を行った。その結果、遺構・遺物は発見されなかった。なお、本調査で確認した当該地の土層堆積状況は、上から暗灰黄色砂（現代の盛土　厚さ約60cm）、黄灰色砂層（厚さ30～35cm）、暗灰黄色砂層（厚さ約20cm）、黄灰色粘質土層（厚さ35～40cm）、灰色粘土層（厚さ15～20cm）、上面で遺構検出作業を行った灰黄色粘質土層（厚さ25～30cm）、黄褐色砂層（厚さ10cm以上）である。



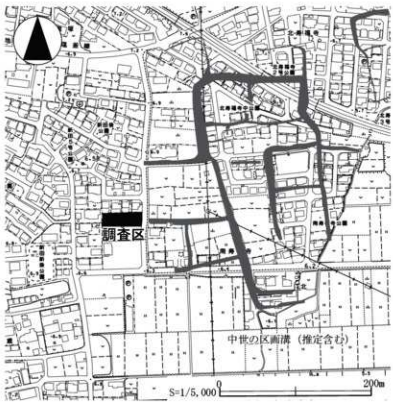
第2図　調査区配置図

掘り下げ状況（東より）

Ⅸ　新田遺跡第88次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、専用住宅新築工事計画に伴う発掘調査である。平成24年6月、地権者より当該区における専用住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は造成面積が約971㎡と広範囲であり、最大約20㎝の盛土を行うものであった。対象地区内は、すでに約1ｍの盛土がなされており、工事における掘削は盛土内に収まることから、埋蔵文化財への影響は軽微と考えられたが、遺構の分布状況や構成を把握するため確認調査を実施することにした。その後、6月29日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。



第1図　調査区位置図

調査は7月11日より開始した。調査区は対象区域のほぼ中央付近に東西に長いトレンチを設定した。はじめに、重機を使用して盛土、現代の水田耕作土の除去を行ったところ、現地表面から1～1.2ｍの深さで遺構検出面（基盤層）に到達した。同日から作業員を動員して遺構検出作業を行い、東端付近ではピットの纏まりと南北方向の溝跡2条を発見した。西半では東西方向の溝跡1条を確認した。検出作業の終了した遺構から随時、平面図の作成を行い、全景写真は18日に撮影した。19日、補足調査と器材の撤収。21日には埋め戻しを行って、現地調査の一切を終了した。

2　調査成果

発見遺構と遺物

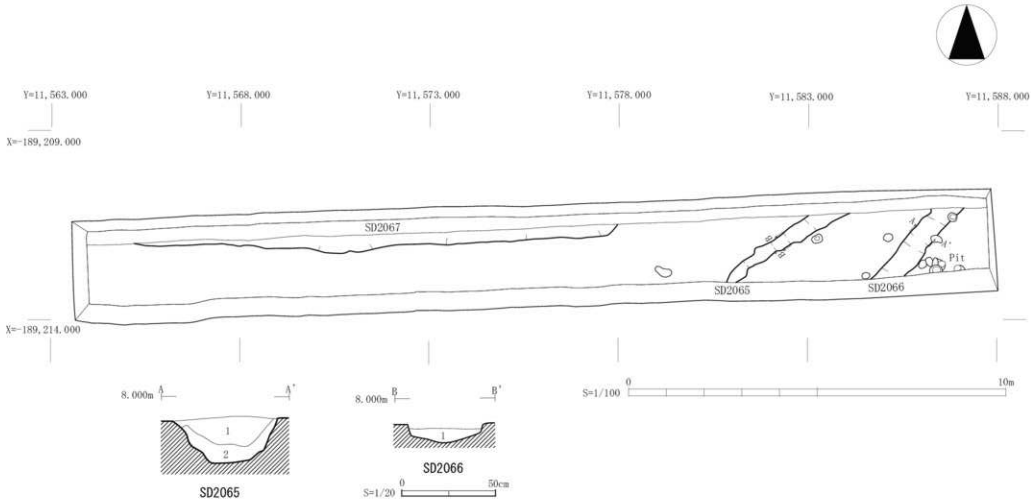
ＳＤ2065溝跡

調査区東端部で発見した南北溝跡である。方向は北で東に約59度偏している。規模は長さ2.5ｍ以上、上幅0.6ｍ前後、深さ24㎝である。埋土は2層に分けられ、1層が均質な褐灰色粘質土、2層が褐灰色粘土の小ブロックを含む黄灰色土である。

遺物は出土していない。

ＳＤ2066溝跡

調査区東半部で発見した南北溝跡である。ピットと重複しており、それよりも古い。方向は北で東に約



第2図　検出遺構平面・断面図

41度偏している。規模は長さ3.5m以上、上幅0.25～0.45m、深さ10cmである。埋土は褐灰色粘土粒を含む緑灰色土である。

遺物は出土していない。

ＳＤ2067溝跡

調査区西半部で発見した東西溝跡である。方向は東で北に約2度偏している。規模は長さ12.8m以上、幅0.5m以上、深さ5cmである。埋土は褐灰色粘質土である。

遺物は須恵器杯の小片が出土している。

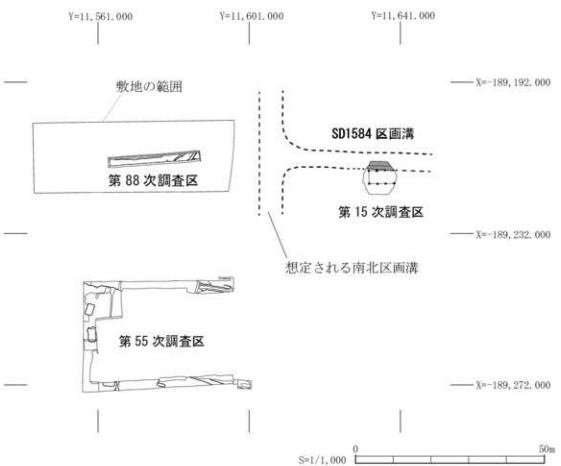
その他の遺構

調査区東端部付近で小ピットが纏まって発見された。ＳＤ2066溝跡と重複しており、それよりも新しい。

3　まとめ

今回の調査では溝跡3条とピットが纏まって発見されたが、遺構の分布状況は希薄であった。これらの年代については、出土遺物も微量であるため、詳細は不明であるが、埋土の特徴やピットの規模からみて中世以降の時期と推定される。

なお、本調査区の東側に位置する第15次調査区では、中世の屋敷を区画する東西方向の溝跡（ＳＤ1584）が発見されていた。この溝跡は本調査区では検出されなかったので、現市道付近で西辺を区画する南北方向の溝に接続していたと考えられる。



第3図　第88次調査区と周辺の調査区位置図

対象地区全景（南東より）

調査東半部　溝跡、ピット検出状況
（南西より）

調査区全景（東より）

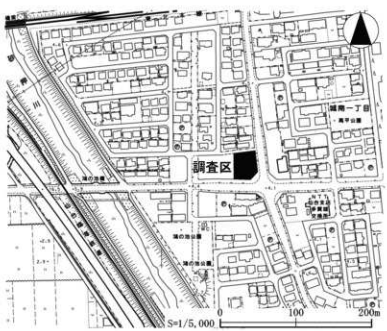
調査区全景（西より）

写真図版

X　市川橋遺跡第84次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、診療所新築工事に伴う確認調査である。平成24年1月18日に地権者より当該地における診療所新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、建物基礎工事で最深28cm、給排水管布設工事で最深81cm、外構工事で最深28cmの掘削を行うこととなっていた。周辺の調査成果では、現地表から遺構面までの深さが1.4 ～ 2.1 mであることから、工事による掘削は遺構まで及ばないが、計画面積が約1,000㎡と広大であることから、確認調査を実施することとなった。平成24年4月4日に依頼書と承諾書の提出を受けて、発掘調査の実施に至った。



第1図　調査区位置図

4月10日に掘削を開始し、土地区画整理時の盛土（Ⅰ層）とそれ以前の水田層（Ⅱ層）を除去し、古代の遺物を含む暗オリーブ灰色土層（Ⅲ層）を確認した。この層上面で遺構がないことを確認し、さらに掘削を行い、にぶい黄褐色土層（Ⅳ層）上面で遺構を発見した。4月13日から精査を開始し、4月21日に遺構検出状況写真を撮影した。その後、図面を作成し、4月27日に重機で埋め戻しをして調査を終了した。

2　調査成果

（1）　層　序

今回の調査で確認した層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：土地区画整理時の盛土で、厚さは80 ～ 140cmである。

Ⅱ層：土地区画整理前の耕作土で、厚さは20 ～ 50cmである。

Ⅲ層：暗オリーブ灰色の粘質土で、厚さは8 ～ 14cmである。

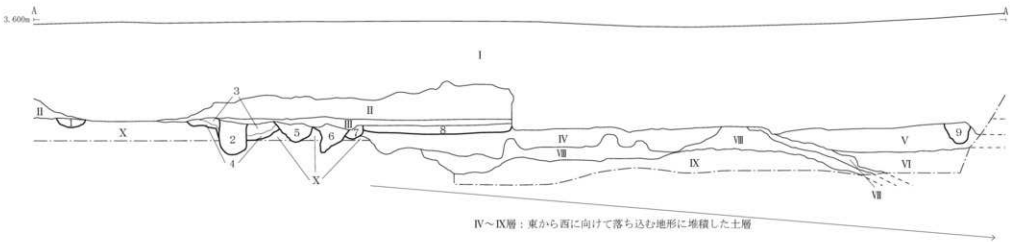
Ⅳ層：にぶい黄褐色砂質土と黒褐色粘質土が互層に堆積する。厚さは10 ～ 30cmである。調査区西側を中心に堆積し、古代の遺構検出面である。

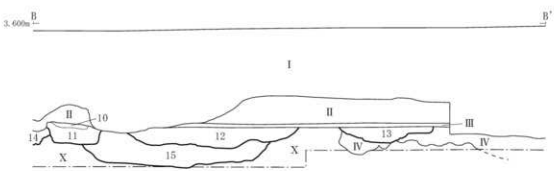
Ⅴ層：にぶい黄褐色砂質土層で、厚さは30 ～ 33cmである。

Ⅵ層：にぶい黄橙色粘質土で、厚さは28cm以上である。

Ⅶ層：灰褐色砂質土の火山灰層で、厚さは9cmである。

Ⅷ層：にぶい黄褐色砂質土で、厚さは7 ～ 29cmである。





1：SD3517　1層
2：柱穴
3：SD3515　1層
4：SD3515　2層
5～7：柱穴
8：SD3516
9：柱穴（灰白色火山灰ブロック混入）
10：SD3517　1層
11：SD3517　2層
12：SD3515　1層
13：SD3516
14・15：SX3520

S=1/50　0　3m

第2図　1・2区南壁断面図

Ⅸ層：灰黄褐色粘質土で、厚さは27cm以上である。

Ⅹ層：にぶい黄褐色土層で、厚さは26cm以上である。調査区東側を中心に確認することができ、Ⅳ層が堆積していない箇所では、この層が古代の遺構検出面である。

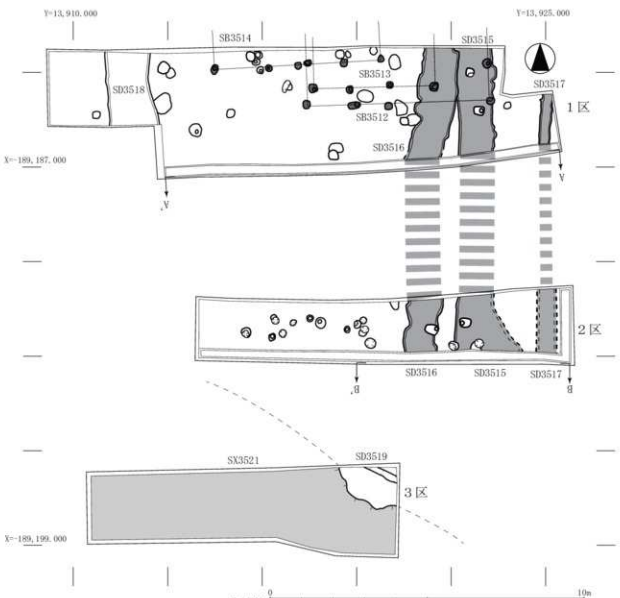
なお、第2図に示した範囲のⅣ層～Ⅸ層は、東から西に向けて落ち込む地形に堆積している。

（2） 発見遺構と遺物

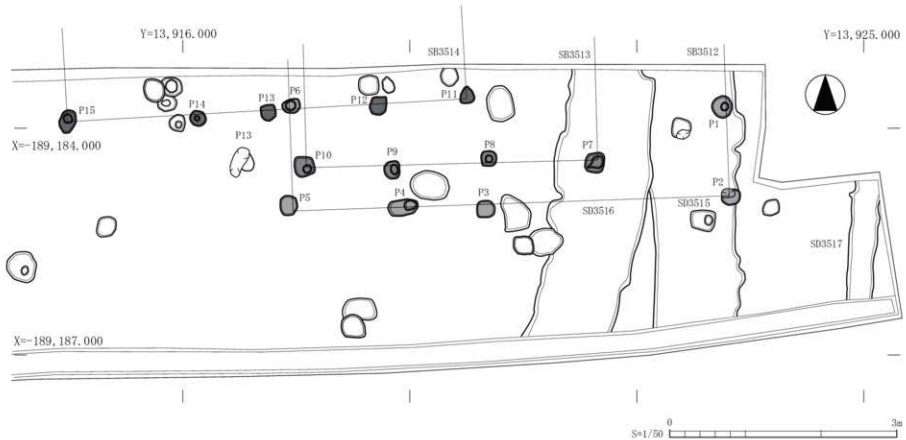
掘立柱建物跡3棟、溝跡5条、性格不明遺構1基、旧河川跡1箇所を発見した。

ＳＢ3512掘立柱建物跡（第4図）

1区北東側で発見した東西3間以上、南北1間以上の建物跡である。北側が調査区外に延びているため、全容は不明である。6基の柱穴を検出しており、東側柱列北より1間目柱穴と南側柱列西より2間目柱穴と西側柱列北より1間目柱穴で柱痕跡、南東隅柱穴で柱抜取り穴を確認した。ＳＤ3515・3516溝跡と重複し、



第3図　調査区位置と遺構配置図



第4図　1区検出遺構平面図

ＳＤ3516より古く、ＳＤ3515より新しい。方向は、南側柱列で測ると東で約2度北に偏している。規模は、東側柱列で総長約1.2ｍ以上、南側柱列で総長約5.8ｍ、西側柱列で総長約1.8ｍ以上である。柱間は、東側柱列で約1.5ｍ、南側柱列で東より約4.0ｍ（2間分）、約1.2ｍ、約1.9ｍ、西側柱列で約1.7ｍである。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形であり、規模は径25㎝～ 40㎝である。埋土は、灰白色火山灰と黄褐色土がブロック状に混入する灰黄褐色砂質土である。柱痕跡は直径15 ～ 20㎝の円形であり、埋土は灰白色火山灰をブロック状に含む黄褐色土である。

遺物は、検出面から土師器杯（ＢＶ類）・甕が出土している。

ＳＢ3513掘立柱建物跡（第4図）

1区北側で発見した東西3間、南北1間以上の建物跡である。南側に展開する柱穴が発見されなかったことから北側に展開すると考えられるが、全容は不明である。4基の柱穴を検出しており、全てで柱痕跡を確認した。ＳＤ3516溝跡と重複し、それよりも新しい。方向は東で約1度30分北に偏している。規模は南側柱列で総長3.85ｍであり、柱間は南側柱列で東より1.44ｍ、1.26ｍ、1.15ｍである。柱穴の平面形は隅丸方形であり、規模は一辺20㎝～ 28㎝である。埋土は、灰白色火山灰と黄褐色土をブロック状に混入する灰黄褐色砂質土である。柱痕跡は直径10㎝～ 15㎝の円形であり、埋土は灰白色火山灰をブロック状に含む黄褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＢ3514掘立柱建物跡（第4図）

1区北側で発見した東西4間、南北1間以上の建物跡である。南側に展開する柱穴が発見されなかったことから北側に展開すると考えられるが、全容は不明である。5基の柱穴を検出しており、柱列西寄りの3基で柱痕跡を確認した。方向は東で約3度北に偏している。規模は南側柱列で総長約5.3ｍであり、柱間は南側柱列で東より約1.2ｍ、約1.4ｍ、約0.9ｍ、約1.7ｍである。柱穴の平面形は円形または不整円形であり、規模は径20㎝～ 30㎝である。埋土は、灰白色火山灰と黄褐色土をブロック状に混入する灰黄褐色砂質土である。柱痕跡は直径10㎝の円形であり、埋土は暗褐色もしくは黒褐色の砂質土である。

遺物は、検出面から須恵系土器の破片が出土している。

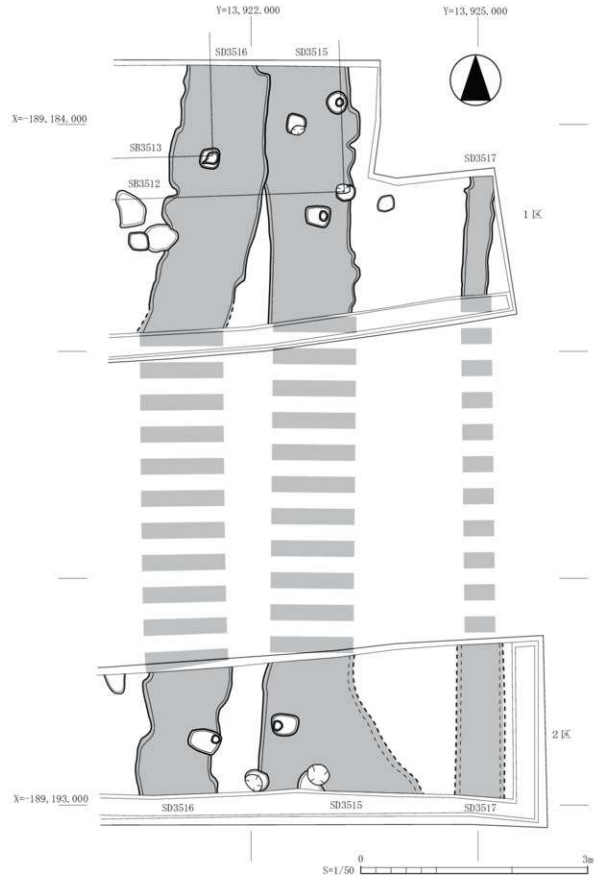
ＳＤ3515溝跡（第5・8図）

1区と2区の東側で発見した南北溝跡である。2区では断面のみの確認である。北側と南側は調査区外に延びているため、全容は不明である。ＳＢ3512掘立柱建物跡、ＳＤ3516溝跡、ＳＸ3521と重複し、ＳＢ3512、ＳＤ3516より古く、ＳＸ3521より新しい。方向は北で約1度東に偏しており、規模は長さ9.5ｍ以上、幅1.1ｍ、深さ30㎝である。壁はゆるやかに立ち上がっている。埋土は、1層は暗褐色粘質土、2層は灰褐色土である。

遺物は、第8図1に示した須恵器杯（Ｖ類）のほか、検出面から土師器杯（ＢＶ類）・甕、須恵器杯（Ｉ類）・甕・瓶の破片が出土している。

ＳＤ3516溝跡（第5・8図）

1区と2区の東側で発見した南北溝跡である。2区では断面のみの確認である。北側と南側は調査区外に延びているため、全容は不明である。ＳＢ3512・3513掘立柱建物跡、ＳＤ3515溝跡、ＳＸ3521と重複し、ＳＢ3513より古く、ＳＢ3512、ＳＤ3515、ＳＸ3521より新しい。方向は、北で約9度東に偏している。規模は、長さ9.6ｍ以上、幅0.9 ～ 1.3ｍ、深さ20㎝である。壁はゆるやかに立ち上がっている。埋土は暗褐色砂質土である。



第5図　ＳＤ3515・3516・3517溝跡平面図

遺物は、第8図2に示した須恵器杯(V類)、第8図3に示した重圏文軒丸瓦のほか、検出面から土師器杯(BⅠ類・BV類)・甕(B類)、須恵器杯(Ⅰ類・Ⅱ類)・甕・瓶、須恵系土器、丸瓦・平瓦、砥石の破片が出土している。

SD3517溝跡(第5図)

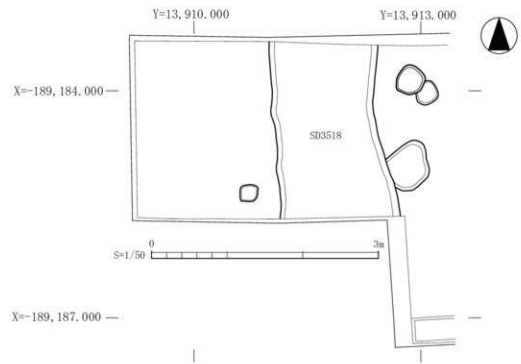
1区と2区の東端で発見した南北溝跡である。2区では断面のみの確認である。北側と南側は調査区外に延びているため、全容は不明である。SX3521と重複し、それより新しい。方向は、北で約4度東に偏している。規模は、長さ8.2m以上、幅40cm、深さ30cmである。壁はゆるやかに立ち上がっている。埋土は1層が黒褐色粘質土、2層が暗褐色土である。

遺物は検出面から土師器杯(BV類)・甕、須恵器杯(Ⅱc類)、須恵系土器の破片が出土している。

SD3518溝跡(第6図)

1区西側で発見した南北溝跡である。北側と南側は調査区外に延びているため、全容は不明である。方向は、北で約3度西に偏している。規模は、長さ2.3m以上、幅1.4mである。埋土は暗褐色砂質土である。

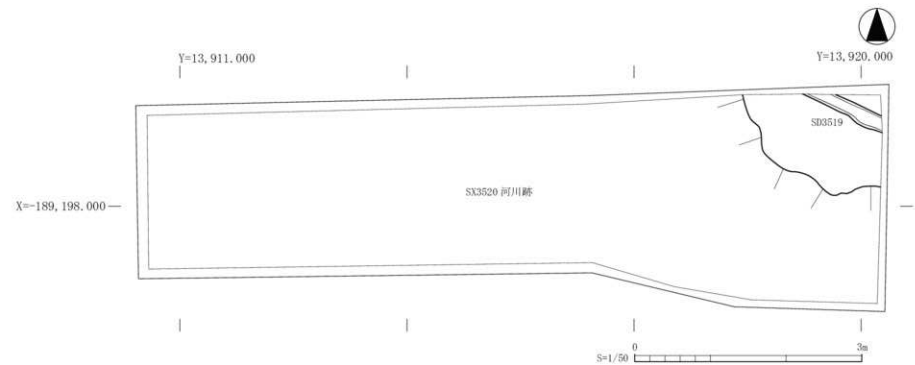
遺物は検出面から土師器杯(BV類)・甕、須恵器杯(Ⅰ類)・甕・瓶、須恵系土器、平瓦の破片が出土している。



第6図　SD3518溝跡平面図

SD3519溝跡(第7図)

3区の北東端で発見した東西溝跡である。調査区外に延びているため、全容は不明である。方向は、西で約20度北に偏している。規模は、長さ1.2m以上、幅0.2mである。埋土は暗褐色砂質土である。遺物は出土していない。



第7図　3区検出遺構平面図

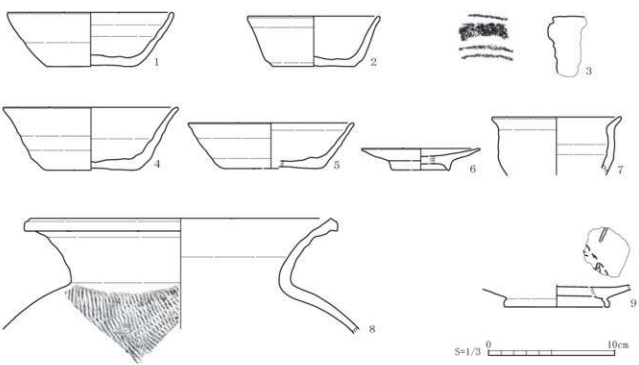
ＳＸ3520河川跡（第7図）

3区のほぼ全域で発見した河川跡である。埋土は暗褐色土と砂質土が互層に堆積している。

遺物は検出面から土師器杯・甕、須恵器杯（Ⅱ類）・甕・瓶の破片が出土している。

ＳＸ3521（第2図）

2区東側の南壁断面で発見した性格不明の遺構である。2区の断面のみで確認した。溝の可能性もあるが、詳細は不明である。埋土は褐色粘質土と黒褐色粘質土が斑状に混入する。壁はゆるやかに立ち上がっている。遺物は出土していない。



単位（cm）

番号	遺構 層位	種類	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
1	ＳＤ3515検出面 Ⅲ層	須恵器 杯	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(13.2) 1/24	7.0 24/24	4.3		R3	Ⅰ類
2	ＳＤ3516検出面 Ⅲ層	須恵器 杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(10.4) 1/24	(6.4) 12/24	4.0		R14	Ⅲ類
3	ＳＤ3516 検出面	瓦 軒丸瓦	－	－	－	－	－	1-2	R15	重圏文軒丸瓦
4	Ⅲ層	須恵器 杯	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(13.6) 1/24	(7.0) 12/24	5.0		R2	Ⅱ類
5	Ⅲ層	須恵器 杯	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(13.0) 8/24	(7.8) 12/24	3.6		R1	Ⅰ類
6	旧層上面 遺構検出時	須恵系土器 高台付皿	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(9.2) 10/24	(4.4) 6/24	2.7		R4	
7	旧層上面 遺構検出時	土師器 小型壺	ロクロナデ	ロクロナデ	(10.2) 3/24	－	－		R7	
8	Ⅲ層	須恵器 甕	平行タタキ	同心円タタキ	(23.8) 3/24	－	－		R12	
9	Ⅲ層	緑釉陶器 高台付皿	ロクロナデ	彩花文	－	－	－	1-1	R11	

第8図　ＳＤ3515・3516溝跡及び堆積層出土遺物

出土遺物

Ⅲ層から土師器杯（ＡＩａ類・ＢＩｃ類・ＢⅡ類・ＢⅣ類・ＢⅤ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅰ類・Ⅰｃ類・Ⅱ類・Ⅱａ類・Ⅱｃ類・Ⅲ類・Ⅴ類）・蓋・甕・瓶、須恵系土器、丸瓦・平瓦、緑釉陶器椀、土器片製円板の破片が出土した。また、Ⅳ層上面で遺構を検出する際に土師器杯・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅱａ類・Ⅲ類）・高台付杯・甕の破片が出土した。

3　まとめ

（1）　ＳＢ3512・3513・3514掘立柱建物跡に関しては、掘方埋土に灰白色火山灰が混入していることから、10世紀前葉以降のものと考えられる。ＳＤ3515溝跡に関しては、ＳＢ3512掘立柱建物跡よりも古いことから、それ以前に構築された可能性がある。ＳＤ3516溝跡に関しては、重複関係からＳＢ3512→ＳＤ3516→ＳＢ3513という変遷が認められることから、10世紀前葉以降の時期と言える。

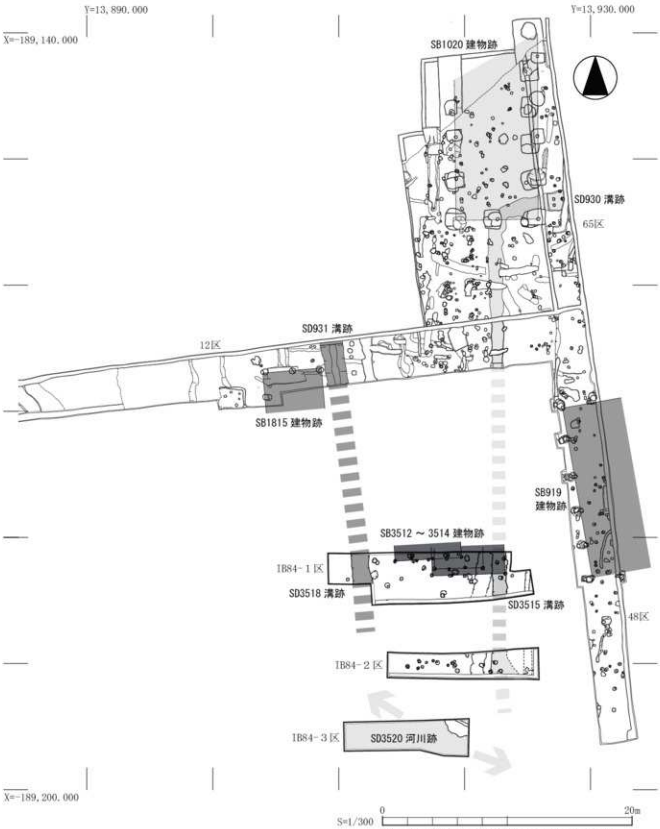
（2）　ＳＤ3515溝跡とＳＤ3518溝跡に関しては、方向と位置関係から、それぞれ城南土地区画整理事業に伴う調査の際に発見したＳＤ930・931溝跡の延長である可能性が高い（第9図）。なお、ＳＤ931溝跡の埋土5層には、灰白色火山灰がブロック状に混入していることから（多賀城市教育委員会2004）、ＳＤ3518溝跡は、10世紀前葉以降に埋没したものと考えられる。

（3）　10世紀前葉以降の年代が考えられるＳＢ3512～3514、ＳＤ3518は、方向が北で約1～3度西に偏している。周辺の調査で発見された10世紀前葉以降の年代であるＳＢ919・1815掘立柱建物跡も方向が北で約2～10度西に偏しており、時期的な特徴の可能性がある。

（4）　ＳＸ3520河川跡は、第9図に示した本調査次の2区と城南土地区画整理事業に伴う調査の48区では発見されていないことから、それぞれ北西と南東の方向に蛇行していたと考えられる。

参考文献

多賀城市教育委員会　『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅲ－』多賀城市文化財調査報告書第75集　2004



第9図　第84次調査区と周辺の調査区

1区遺構検出状況（南西より）

2区遺構検出状況（西より）

3区遺構検出状況（西より）

緑釉陶器（Ⅲ層）

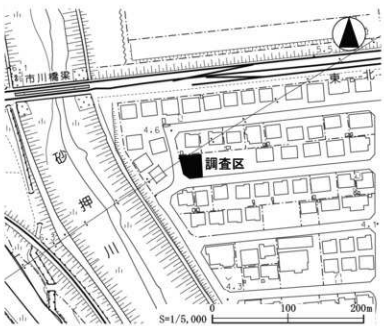
重圏文軒丸瓦（ＳＤ3516）

写真図版

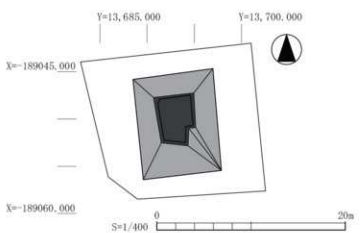
XI　市川橋遺跡第86次調査

1　調査の経緯

本調査は、個人住宅新築工事に伴う発掘調査である。平成24年3月31日に地権者より当該地における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、建物基礎工事の際に太さ20cm、長さ7mの杭を39本打ち込み、給排水布設工事では最深1.4m、外構工事では最深40cmの掘削を行うこととなっていた。周辺の調査成果では、現地表から遺構面までの深さが1.4～1.5mであることから、建物部分の工事の際に埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、発掘調査が必要である旨を地権者に対し説明し、実施についての了解を得た。平成24年5月22日に依頼書と承諾書の提出を受けて、発掘調査を開始した。

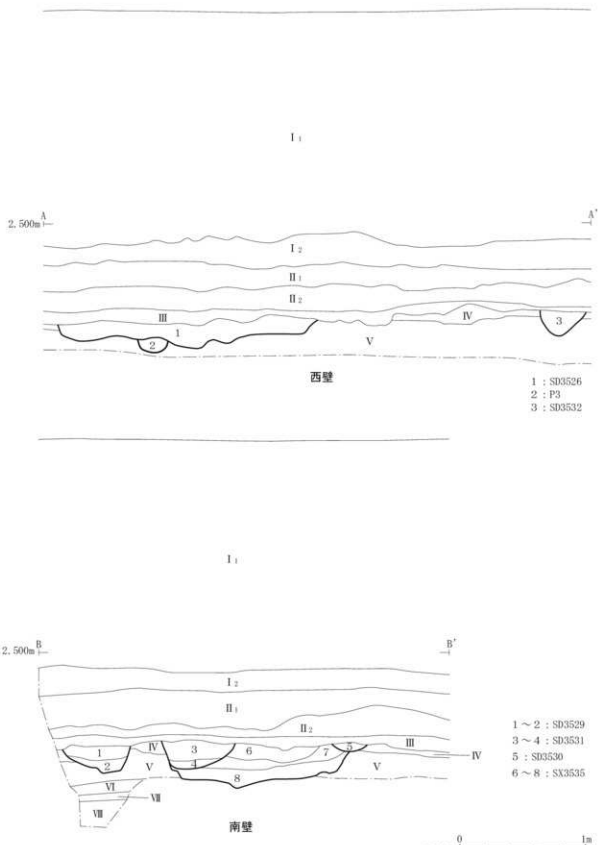


第1図　調査区位置図



第2図　調査範囲図

5月31日に重機により掘削を開始し、土地区画整理時の盛土と旧水田層（Ⅰ層）を除去し、暗褐色と黒褐色土層（Ⅱ層）を確認した。この層上面で遺構がないことを確認し、さらに掘り下げ、遺物を含む黒褐色土層（Ⅲ層）を確認した。この層上面で遺構がないことを確認し、その下層であるにぶい黄褐色粘土層（Ⅳ層）上面で柱穴や溝などの遺構を確認した。6月5日より遺構の精査を開始し、6月8日に遺構検出状況の写真撮影を行い、検出状況の平面図を作成した。その後、遺構の掘り下げと記録を進め、6月23日に遺構完掘状況の写真撮影を行い、図面を作成したのち、7月2日に重機により埋め戻しを行い、調査を終了した。



I 1
2.500m
A
A'
I 2
II 1
II 2
III
IV
1
2
3
V
西壁
1 : SD3526
2 : P3
3 : SD3532
I 1
2.500m
B
B'
I 2
II 1
II 2
III
IV
1
2
3
4
5
6
7
8
V
VI
VII
VIII
南壁
1 ～ 2 : SD3529
3 ～ 4 : SD3531
5 : SD3530
6 ～ 8 : SX3535
0
1m
S=1/30

第3図　調査区断面図

2　調査成果

（1）　層　序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである（第3図）。このうちⅥ層以下については、下層の調査のために掘り下げた南東部で確認したものである。

Ⅰ1層：現代の盛土で、厚さは約2mである。

Ⅰ2層：黒褐色土で、厚さは13～25cmである。現代の水田耕作土である。

Ⅱ1層：暗褐色土で、厚さは7～30cmである。調査区の南ほど厚く堆積する。

Ⅱ2層：Ⅱ1層より粒が細かい黒褐色粘質土で、厚さは5～30cmである。

Ⅲ層：黒褐色土で、Ⅳ層由来のブロックが混入する。厚さは5～10cmで、調査区南西側では層状に堆積するが、北東側では一部しか確認できない。遺物を若干含む。今回の調査で発見された遺構を覆う層であり、この層を掘り込む遺構はない。

Ⅳ層：にぶい黄褐色粘質土で、黒褐色粘質土がブロック状に混入する。一部で砂質土の箇所もある。厚さは3～15cmである。古代の遺構検出面であり、本調査区における基盤層である。

Ⅴ層：均質な灰色砂質土で、厚さは7～25cmである。

Ⅵ層：にぶい黄褐色粘質土で、灰色砂質土が若干混入する。厚さは約10cmである。

Ⅶ層：にぶい黄褐色粘質土で、黒褐色粘質土が薄く帯状に堆積する。厚さは約5cmである。

Ⅷ層：にぶい黄褐色粘質土で、厚さは20cm以上である。

（2）　発見遺構と遺物

ＳＢ3523掘立柱建物跡（第4・5図）

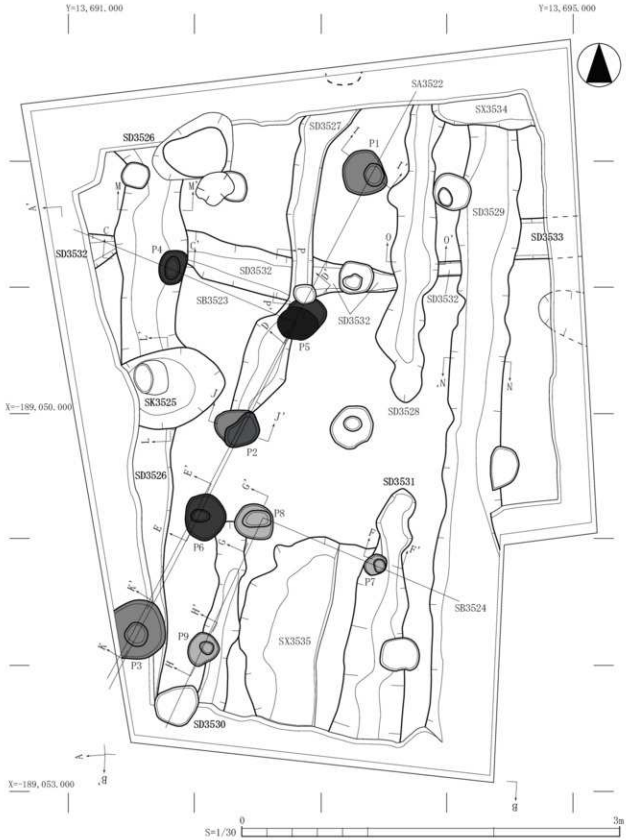
調査区西側で検出した東西1間以上、南北1間以上の掘立柱建物跡である。重複関係から、ＳＤ3526溝跡よりも古く、ＳＤ3527・ＳＤ3530溝跡よりも新しい。柱穴は3基確認しており、2基で柱痕跡（Ｐ4・6）、1基で柱抜取り穴（Ｐ5）を確認した。方向は、東側柱列でみると北で22度58分東に偏している。柱間は、東側柱列で1.04m、北側柱列で1.67mである。掘方の平面形は楕円形で、規模は長辺27～37cm、短辺20～32cm、深さ25～39cmである。埋土は、掘方は炭化物粒と黒褐色砂質土がブロック状に混入する暗灰黄色砂質土である。柱痕跡と柱抜取り穴は黒褐色砂質土である。

遺物は、検出面から土師器杯（Ｂ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯・甕の破片、掘方からは土師器甕（Ｂ類）の破片が出土し、柱痕跡からは土師器杯（Ｂ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ｖ類）が出土している。

ＳＢ3524掘立柱建物跡（第4・5図）

調査区南側で検出した東西1間以上、南北1間以上の掘立柱建物跡である。ＳＤ3530・ＳＤ3531溝跡、ＳＸ3535と重複し、それらよりも新しい。柱穴は3基確認しており、すべてで柱痕跡を確認した。方向は、西側柱列でみると北で21度35分東に偏している。柱間は西側柱列で1.03m、北側柱列で1.13mである。掘方の平面形は楕円形で、規模は、長辺19～30cm、短辺15～28cm、深さ8～29cmである。埋土は、掘方は暗灰黄色砂質土をブロック状に含む黒褐色砂質土である。柱痕跡は暗灰黄色土または炭化物粒を斑状に含む黒褐色砂質土である。

遺物は、検出面から土師器甕（Ｂ類）、須恵器甕、埋土から土師器甕（Ｂ類）の破片が出土している。

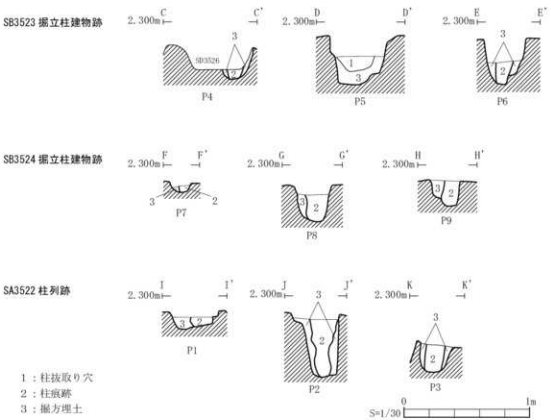

Y=13,691.000
Y=13,695.000
X=-189,050.000
X=-189,053.000
SA3522
SX3534
SD3526
SD3527
P1
SD3529
SD3533
SD3532
P4
SD3532
SB3523
SD3532
SD3532
P5
SK3525
SD3528
P2
SD3526
SD3531
P8
P6
P7
SB3524
SX3535
P9
P3
SD3530
0
3m
S=1/30

第4図　検出遺構平面図

ＳＡ3522柱列跡（第4・5図）

調査区中央～西側で検出した南北2間以上の柱列跡である。重複関係から、ＳＤ3526溝跡よりも古く、ＳＤ3527溝跡よりも新しい。柱穴は3基確認しており、すべてで柱痕跡を確認した。方向は北で25度56分東に偏している。規模は長さ4.15ｍ以上、柱間は北から、2.32ｍ、1.83ｍである。掘方の平面形は円形または隅丸方形で、規模は長辺30 ～ 46cm、短辺30 ～ 33cm、深さ15 ～ 50cmである。埋土は、掘方は暗灰黄色砂質土がブロック状に混入する黒褐色砂である。柱痕跡は粘性の強い黒褐色砂質土である。

遺物は、検出面からは土師器杯（ＢⅡ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯・甕が出土している。柱痕跡からは、土師器杯（Ｂ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯・甕の破片が出土している。



第5図　ＳＢ3523・3524掘立柱建物跡・ＳＡ3522柱列跡　柱穴断面図

ＳＤ3526溝跡（第3・4・6図）

調査区西部で検出した南北溝跡である。重複関係から、ＳＫ3525土壙よりも古く、ＳＢ3523掘立柱建物跡、ＳＡ3522柱列跡、ＳＤ3532溝跡よりも新しい。規模は、長さ4.4ｍ以上、上幅45 ～ 55cm、下幅16 ～ 25cm、深さ13 ～ 18cmである。方向は北で約3度東に偏している。壁は比較的急に立ち上がる。底面は凹凸がある。埋土は2層であり、1層は黒褐色砂質土で、暗灰黄色砂質土が斑状に混入する。2層は暗灰黄色砂質土で、黒褐色砂質土をブロック状に含む。

遺物は、土師器甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ｖ類）の破片が出土している。

ＳＤ3527溝跡（第4図）

調査区中央で検出した南北方向の蛇行する溝跡である。重複関係から、ＳＢ3523掘立柱建物跡、ＳＡ3522柱列跡よりも古く、ＳＤ3532溝跡よりも新しい。規模は長さ2.1ｍ以上、上幅15～40㎝、下幅5～30㎝、深さ5～15㎝である。方向は北半部は北で約11度東に偏し、南半部は北で約25度東に偏している。壁は東側は比較的急に立ち上がり、西側はゆるやかに立ち上がる。底面は平坦である。埋土は炭化物粒と黄褐色粒を若干含む黒褐色土で、底部には鉄分が沈着している。遺物は出土していない。

ＳＤ3528溝跡（第4・6図）

調査区東側で検出した南北溝跡である。重複関係から、ＳＸ3534よりも古く、ＳＤ3532溝跡よりも新しい。規模は長さ2.3ｍ以上、上幅20～35㎝、下幅8～20㎝、深さ5～8㎝である。方向は北で約4度東に偏している。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は平坦である。埋土は2層に分けることができる。1層は黒褐色粘質土で、粘性はやや強く、しまりがある。黄褐色粘質土をブロック状に多量に含む。2層はオリーブ黒色砂質土で、粘性は弱く、しまりも弱い。Ⅳ層の砂によく似ているが、黒褐色土小ブロックをやや含み、鉄分が多量に沈着する。

遺物は、土師器甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅲ類）、平瓦（Ⅱｂ類）の破片が出土している。

ＳＤ3529溝跡（第3・4・6図）

調査区東側で検出した南北溝跡である。重複関係から、ＳＸ3534よりも古く、ＳＤ3533・3532溝跡よりも新しい。規模は長さ5.0ｍ以上、上幅38～50㎝、下幅13～35㎝、深さ15～23㎝である。方向は北で約3度東に偏している。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は凹凸がある。埋土は2層に分けることができる。1層は黒褐色シルトで、暗灰黄色砂質土がブロック状に混入している。2層は暗灰黄色砂質土で、同色の粘質土ブロックと、黒褐色土が斑状に混入している。遺物は出土していない。

ＳＤ3530溝跡（第3・4・6図）

調査区南東部で検出した南北溝跡である。ＳＢ3523・3524掘立柱建物跡と重複し、それらよりも古い。規模は、長さ1.4ｍ以上、上幅15～28㎝、下幅5～10㎝、深さ7㎝で、方向は北で約7度東に偏している。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びてくぼんでいる。埋土は灰黄褐色砂質土で、黒褐色粘質土がブロック状に混入しており、ＳＸ3535の埋土1層とよく似ている。遺物は出土していない。

ＳＤ3531溝跡（第3・4・7図）

調査区南側で検出した南北溝跡である。重複関係から、ＳＢ3524掘立柱建物跡よりも古く、ＳＸ3535よりも新しい。規模は長さ2.0ｍ以上、上幅20～60㎝、下幅10～18㎝、深さ20～23㎝である。方向は北で約10度東に偏している。壁は東側は比較的急に立ち上がり、西側はゆるやかに立ち上がる。底面は平坦である。埋土は2層に分けられる。1層は黒褐色砂質土で、Ⅳ層由来のブロックが含まれる。2層は暗灰黄色砂質土で、黒褐色砂粒が混入する。

遺物は、土師器甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅱ類）の破片が出土している。

ＳＤ3532溝跡（第3・4・6図）

調査区北部で検出した東西方向の蛇行する溝跡である。ＳＤ3526・3527・3528・3529溝跡と重複し、それらよりも古い。規模は長さ2.9ｍ以上、上幅14～35㎝、下幅10～16㎝、深さ10～20㎝である。方向は東で約3度南に偏している。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は平坦である。埋土は黒褐色砂質土で、Ⅳ層由来のブロックがやや多く混入する。

遺物は、土師器甕（B類）が出土している。

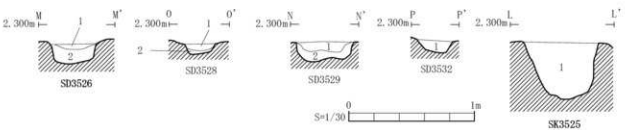
ＳＤ3533溝跡（第4図）

調査区東部で検出した東西溝跡である。ＳＤ3529溝跡と重複し、それよりも古い。平面形は不明である。規模は東西30cm、南北20cm以上、深さ約7cmである。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は平坦である。埋土はⅣ層由来の砂で、黒褐色粘質土のブロックが多量に混入する。遺物は出土していない。

ＳＫ3525土壙（第4・6図）

調査区西部で検出した。ＳＤ3526溝跡と重複し、それよりも新しい。西側の一部は調査区外におよんでいるが、平面形は楕円形であると考えられる。規模は長軸70cm以上、短軸62cm、深さ30cmである。壁は比較的急に立ち上がり、底面の北西部に円形のくぼみがある。埋土は粘性の強い黒色砂質土で、暗灰黄色土が斑状に若干混入する。

遺物は、土師器甕（B類）、須恵器杯の破片が出土している。



第6図　ＳＤ3526・ＳＤ3528・ＳＤ3529・ＳＤ3532溝跡、ＳＫ3525土壙　断面図

ＳＸ3534（第4図）

調査区北部で検出した。ＳＤ3528・3529溝跡と重複し、それらより新しい。平面形は不明である。規模は東西76cm以上、南北28cm以上、深さ約10cmである。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は平坦である。埋土は黒褐色土で、Ⅳ層由来のブロックが若干混入する。また、炭化物粒を若干含む。遺物は出土していない。

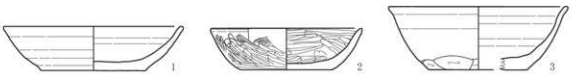
ＳＸ3535（第3・4図）

調査区南部で検出した。ＳＢ3524掘立柱建物跡・ＳＤ3531溝跡と重複しており、それらよりも古い。東部がＳＤ3531溝跡で壊されているが、平面形は楕円形と考えられる。規模は東西約1.3m、南北1.5m以上、深さ25～35cmである。壁は比較的急に立ち上がり、底面は中央が若干くぼむがほぼ平坦である。埋土は3層に分けられる。1層は灰黄褐色砂質土で、にぶい黄褐色砂質土の小ブロックと、黒褐色粘質土ブロックが若干混入する。2層は褐灰色砂質土がブロック状に若干混入するにぶい黄褐色砂質土で、Ⅳ層の土によく似る。3層は2層の砂質土より粒が粗いにぶい黄褐色砂質土で、底部には径3～5mm程度の小礫を大量に含む。

遺物は、須恵器杯（Ⅲ類）の破片が出土している。

堆積層出土の遺物（第7図）

Ⅲ層から、土師器杯（ＡⅠａ類、ＢⅡ類、ＢⅤ類）・甕（B類）、須恵器杯（Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ類）・甕・高台付杯、平瓦の破片が出土している。



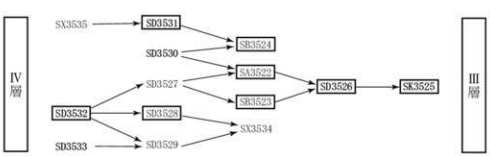
単位(cm)

番号	種類	遺構層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	備考
1	須恵器 杯	Ⅲ層	口縁部・体部：ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(14.2) 1/24	(8.2) 9/24	3.5	R1	被熱している
2	須恵器 杯	Ⅲ層	口縁部・体部：ロクロナデ、ヘラミガキ 底部：回転糸切り後ヘラミガキ	ロクロナデ、ヘラミガキ	(12.0) 4/24	(7.2) 12/24	3.3	R2	
3	須恵器 杯	SD3531 1層	口縁部・体部：ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(14.2) 4/24	(7.8) 9/24	5.0	R3	

第7図　ＳＤ3531溝跡その他出土遺物

3　まとめ

今回の調査では、Ⅳ層上面で掘立柱建物跡、柱列跡、溝跡、土壙を発見した。これらの遺構の年代について検討する。まず、遺構のなかで最も古いＳＤ3532溝跡出土遺物と、最も新しいＳＫ3525土壙出土遺物からは、8世紀後葉以降に出現するとされる土師器杯・甕Ｂ類のみが出土している点と、10世紀以降に出現するとされる須恵系土器が全く出土していない点が指摘できる。よって、遺構の上限年代は8世紀後葉頃で下限年代は10世紀前葉と推定される。



※枠で囲った遺構からは、土師器杯・甕Ｂ類が出土している

第8図　遺構変遷模式図

つぎに、Ⅳ層上面検出遺構を覆うⅢ層の年代について検討する。本遺跡の城南地区では、灰白色火山灰降下以前の9世紀中葉頃に堆積したと考えられる「黒褐色土層」（多賀城市教育委員会2004のⅣ層）が広範囲で確認されている。「黒褐色土層」は古代の遺構検出面である基礎層の直上に堆積しており、本調査区におけるⅢ層・Ⅳ層の堆積状況と類似している。また、Ⅲ層の出土遺物は、土師器杯はＡⅠａ類が1点、Ｂ類が24点でＢ類が主体であること、須恵器杯はⅠｂ類が1点(7%)、Ⅱ類が2点(14%)、Ⅲ類が9点(65%)、Ⅴ類が2点(14%)で、Ⅲ類が多くⅠ・Ⅱ・Ⅴ類を少数含むこと（註）、器形が分かる須恵器杯の底径／口径比は、Ｒ1が0.58でＲ2が0.60であること（第7図）、須恵系土器は出土していないことなどの特徴が挙げられる。これらは、9世紀第2四半期頃の年代とされる多賀城跡大畑ＳＥ2101ＢⅢ層出土土器の特徴に類似

（註）遺物の点数については、土師器杯は破片数、須恵器杯は底部で算出した個体数であり、サンプルの基準が異なるが、多賀城跡大畑ＳＥ2101ＢⅢ層出土土器の特徴に類似する傾向が認められる点は同様である。

する。したがって、土層の堆積状況と出土遺物の年代から、本調査区のⅢ層と「黒褐色土層」は同一層であると考えられる。

以上のことから、Ⅳ層上面検出遺構の年代は、8世紀後葉以降9世紀中葉以前の時期と考えられる。

なお、Ⅳ層上面検出遺構は、溝跡→掘立柱建物跡という変遷が認められる。本調査区西側に位置する市川橋遺跡第27次調査A81区V層上面検出遺構でも、同様に小溝群（SX1663）→掘立柱建物跡（SB1660～1662）という変遷を確認しており、この周辺の土地利用の特徴であると考えられる（第9図）。

参考文献

多賀城市教育委員会　「Ⅳ　市川橋遺跡第15次調査」『山王遺跡・市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第38集　1995

多賀城市教育委員会　『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』多賀城市文化財調査報告書第70集　2003

多賀城市教育委員会　『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅲ－』多賀城市文化財調査報告書第75集　2004

多賀城市教育委員会　「Ⅸ．市川橋遺跡第50次調査」『多賀城市内の遺跡2－平成16年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第78集　2005

多賀城市教育委員会　「Ⅲ．市川橋遺跡第54次調査」『多賀城市内の遺跡2－平成17年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第83集　2006

多賀城市教育委員会　「Ⅶ．市川橋遺跡第60次調査」『多賀城市内の遺跡2－平成18年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第87集　2007

多賀城市教育委員会　「Ⅹ　市川橋遺跡第71次調査」「ⅩⅠ　市川橋遺跡第72次調査」「ⅩⅡ　市川橋遺跡第73次調査」『多賀城市内の遺跡2－平成20年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第95集　2009

宮城県多賀城跡調査研究所　『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』　1993

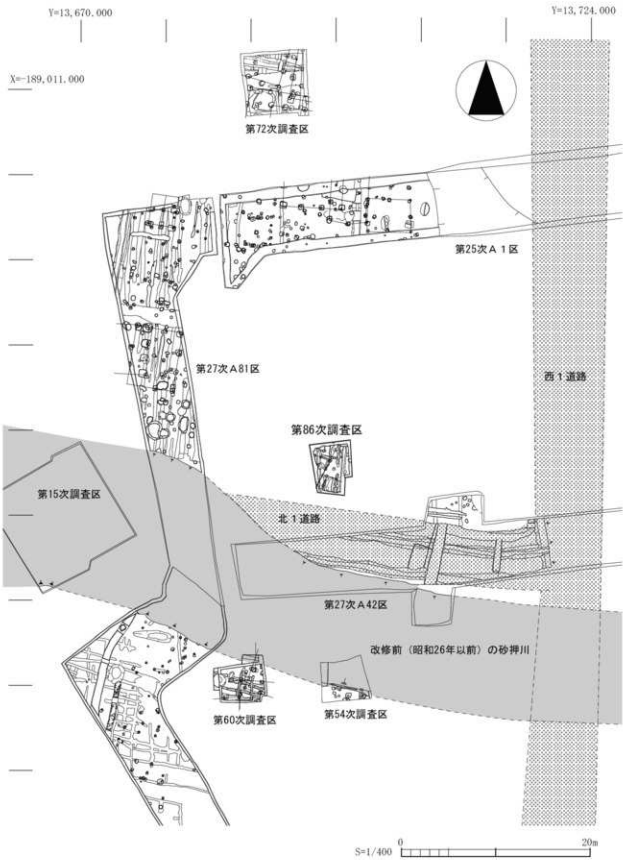
宮城県多賀城跡調査研究所　『宮城県多賀城跡調査研究所年報1994』　1995

白鳥良一　「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』　1980

鈴木孝行　「多賀城外の方格地割」『第32回古代城柵官衙遺跡検討会－資料集－』　2006

武田健市　「多賀城廃寺と多賀城南面の様子」『第36回古代城柵官衙遺跡検討会－資料集－』　2010

村松稔　「多賀城城外における災害痕跡について」『第39回古代城柵官衙遺跡検討会－資料集－』　2013



第9図　これまでの調査区と第86次調査区の位置

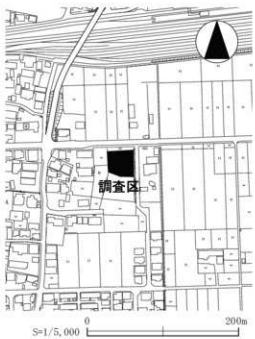
遺構検出状況（南西より）

遺構完掘状況（南西より）

XII　山王遺跡第104次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、農地整備工事計画に伴う発掘調査である。平成24年3月、地権者より当該区における農地整備と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は造成面積が約900㎡と広範囲であり、最大約1ｍの盛土を行うものであった。掘削が伴わないことから、埋蔵文化財への影響は軽微と考えられたが、遺構の分布状況や構成を把握するため確認調査を実施することにした。その後、5月18日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。



第1図　調査区位置図

調査は5月30日より開始した。調査区は対象区域の西・南端に設定し、南北方向をⅠ区、東西方向をⅡ区とした。はじめに、重機を使用して現代の水田耕作土の除去を行ったところ、現地表面から10～30㎝の深さで遺構検出面（基盤層）に到達した。31日から作業員を動員して遺構検出作業を行い、Ⅰ区北半では古代の土壙、中央付近では柱穴が纏まって発見された。南半では溝跡と性格不明の落ち込みを確認した。Ⅱ区では東端で中世の南北溝と東西溝を検出し、西半部を中心にそれらより古い古代の小溝群も発見した。

検出作業の終了した区域から随時、写真撮影と平面図の作成を行った（～6月8日）。これと並行して7日よりⅠ区東壁、Ⅱ区南壁際にサブトレンチを入れて土層堆積状況の観察後、断面図作成と写真撮影を行った。これらの作業が終了したのは14日である。15日には埋め戻しを行って、現地調査の一切を終了した。

2　調査成果

（1）　層　序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

Ⅰ層：現代の水田耕作土層で、厚さは10～30cmである。

Ⅱ1層：Ⅱ区西半に分布する褐灰色土で、厚さは20cm未満である。上面に灰白色火山灰の小ブロックを包含する。古代の小溝群を直接覆いかつ中世の遺構検出面でもある。

Ⅱ2層：Ⅱ区東半に分布する褐灰色土で、厚さは30cm未満である。古代の小溝群を直接覆いかつ中世の遺構検出面でもある。

Ⅲ層：Ⅱ区東半に分布する灰黄色土で、厚さは6cm未満である。古代の遺構検出面である。

Ⅳ層：Ⅱ区東半に分布する褐灰色粘質土で、厚さは10cm未満である。古代の遺構検出面である。

Ⅴ層：淡黄色土で、厚さは30cm以上である。本地区周辺での基盤層である。

（2） 発見遺構と遺物

今回の調査は確認調査であるため、原則として遺構の掘り込みは行っていない。遺物は遺構検出時に出土したものである。遺構の規模や埋土の状況は下記のとおりである。

溝跡

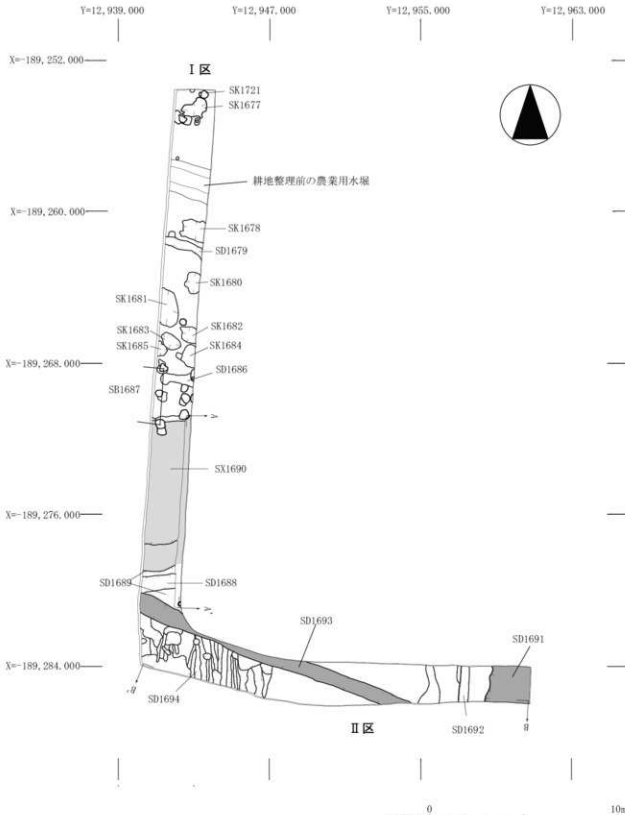
遺構名	位置・検出面	重複関係	方　向	規　模	埋土の特徴	出土遺物
SD1689	Ⅰ区南半・Ⅴ	SD1689→SD1688	東西方向	幅2.3m、深さ55cm	SD1688（1層）、2層：灰黄褐色土、3層：灰白色火山灰粒混じりの灰黄褐色土、4層：砂粒ブロック混じりの褐灰色土（東壁断面）	なし
SD1688	Ⅰ区南端	SD1689→SD1688	東西方向	幅80cm、深さ40cm	黒褐色土	なし
SD1679	Ⅰ区中央・Ⅴ	ピット→SD1679	東西方向	幅40cm	炭化物混じりの暗赤灰色土	土師器杯・甕（B類）、須恵器甕
SD1686	Ⅰ区中央・Ⅴ	SD1686→柱穴	東西方向	幅40～70cm	黒色土ブロック混じりのオリーブ黄色土	なし
SD1691	Ⅱ区東端・Ⅱ2	SD1679→SD1691	南北方向	幅2.4m以上、深さ90cm	1層：黒褐色粘土、2層：褐灰色砂質土、3層：褐灰色砂質土、4層：黒色粘土、5層：褐灰色粘土	土師器杯（BⅤ類）・高台付杯、甕（B類）、須恵器杯（Ⅴ類）・甕、須恵系土器杯、灰釉陶器椀
SD1692	Ⅱ区東端・Ⅳ	土壙？→SD1692	南北方向	上場幅50cm、下場幅30～40cm、深さ30cm	浅黄橙粘土（人為的埋土）	なし
SD1694（小溝群）	Ⅱ区西半・Ⅴ	SD1694→ピット、土壙？	南北方向	幅20～40cm、深さ10～25cm	a群：地山土と褐灰色土が混じりあう b群：地山粒を少々含む褐灰色土	なし
SD1693	Ⅱ区・Ⅱ2	SD1694、柱穴→SD1693	E－21°－S	長さ15.4m以上、幅70～80cm、深さ20cm	黒褐色土混じりの暗赤褐色土	なし

土壙ほか

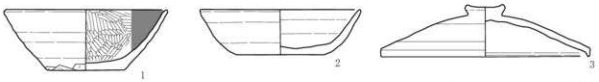
遺構名	位置・検出面	重複関係	平面形	規　模	埋土の特徴	出土遺物
SK1684	Ⅰ区中央・Ⅴ	ピット→SK-1684	隅丸方形？	南北1.15m、東西65cm以上	炭化物、褐灰色土混じりの黒色粘質土	土師器甕（B類）、須恵器甕
SK1680	Ⅰ区中央・Ⅴ	なし	不整形？	南北1.15m、東西60cm	黒色土ブロック混じりの灰褐色土	土師器杯（BⅤ類）
SK1677	Ⅰ区北端・Ⅴ	SK-1677→ピット	不整形	長軸1.25m、短軸65cm	黄色地山ブロック混じりの褐灰色土	土師器杯（B類）
SK1678	Ⅰ区北半・Ⅴ	なし	不整方形？	長軸1.2m以上、短軸1m	炭化物、灰白色火山灰粒混じりの赤灰色土	土師器甕（B類）、須恵器杯
SK1682	Ⅰ区中央・Ⅴ	なし	不整形？	南北80cm、東西85cm以上	暗灰色土	なし
SK1685	Ⅰ区中央・Ⅴ	SK1685→SK1683	不整形？	長軸65cm、短軸50cm以上	地山ブロック、炭化物混じりの灰黄褐色土	なし
SK1683	Ⅰ区中央・Ⅴ	SK1685→SK1683	不整形	長軸1.2m、短軸70cm	炭化物、地山ブロック混じりの黒褐色土	土師器杯・甕（B類）
SK1681	Ⅰ区中央・Ⅴ	なし	不整形？	南北1.8m、東西90cm以上	地山、炭化物混じりの黒褐色土	土師器甕（B類）、須恵器甕
SK1721	Ⅰ区北端・Ⅴ	SK1621→ピット	不整方形	長軸50cm、短軸40cm	黒色土ブロック混じりの浅黄色土	土師器杯（BⅡc・BⅤ類）・甕（B類）、須恵器杯（Ⅴ類）
SX1690	Ⅰ区南半・Ⅴ	SX1690→SB1687	不明	南北8m、東西2m以上、深さ50cm	7・8層：炭化物、土器片を含むにぶい黄橙色～褐灰色土、9層：褐灰色土、10層：黒色粘土（東壁断面）	土師器杯（BⅡ・BⅤ類）・甕（B類）、須恵器杯（Ⅴ類）、紡石

掘立柱建物跡

遺構名	位置・検出面	重複関係	規　模	方　向	柱穴の規模と平面形	抜取り穴	出土遺物
SB1687	Ⅰ区中央・Ⅴ	SX1690、SD1686→SB1687	南北2間、総長2.9m、柱間北より1.3m、1.6m	N－4°－E	一辺約50cmの隅丸方形	2個で確認	土師器杯・甕（B類）、須恵器（Ⅰa類）


Y=12,939.000
Y=12,947.000
Y=12,955.000
Y=12,963.000
X=-189,252.000
X=-189,260.000
X=-189,268.000
X=-189,276.000
X=-189,284.000
Ⅰ区
Ⅱ区
SK1721
SK1677
耕地整理前の農業用水堀
SK1678
SD1679
SK1680
SK1681
SK1683
SK1685
SK1682
SK1684
SD1686
SB1687
SX1690
SD1689
SD1688
SD1693
SD1691
SD1694
SD1692
S=1/200
0
10m

第2図　検出遺構平面図



単位(cm)

番号	種類	層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・杯	SK1721検出面	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	(13.7) 6/24	6.2 14/24	4.8		R1	
2	土師器・杯	Ⅱ1層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(12.7) 3/24	(7.2) 13/24	3.6		R2	
3	須恵器・蓋	Ⅱ1層	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(16.4) 3/24	–	4.1		R3	つまみ径2.9

第3図　出土遺物

Ⅱ区Ⅱ1層出土の遺物

遺物は土師器杯（ＢⅤ類）・高台付杯・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅲ・Ⅴ類）・蓋・長頸瓶・甕、平瓦（ⅡＣ類）、土器片製円板、炉底滓、磨痕のある礫が出土している。

3　まとめ

今回の調査では、古代から中世にかけての遺構が発見された。中世の遺物は発見されなかったが、遺構の重複関係や埋土の状況及び周辺の調査区で検出された中世遺構の位置関係から、Ⅱ区で発見されたＳＤ1691溝跡とＳＤ1693溝跡は中世の時期と推定される。

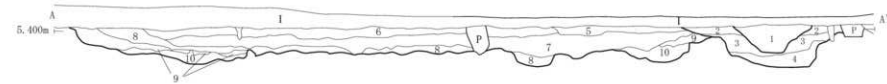
第52・54次調査区では、ＳＤ1144南北溝跡とＳＤ1145東西溝跡で構成される16世紀頃の区画溝が検出されている。ＳＤ1693溝跡とＳＤ1145溝跡はほぼ同じ傾きの方向をとっており、その間の距離は約56mである（第7図）。本遺跡の西側に隣接する新田遺跡では、武士の屋敷を区画する溝跡が発見されており、その区画の規模は約55ｍ四方とされている。この近似する数値から見て、ＳＤ1693・1144・1145溝跡で構成される区画は、新田遺跡と同様な規模を持つ屋敷地の可能性がある。

また、ＳＤ1691南北溝跡は、第52次調査区で発見された12～14世紀ごろとされたＳＤ1180南北溝跡と位置、方向、埋土の状況からみて、同一の溝跡と考えられる（第8図）。ＳＤ1180溝跡の南端には土橋があり、ＳＤ1184溝跡がさらに南へと延びている。ＳＤ1691南北溝跡も屋敷を区画する溝跡の一部と考えられる。

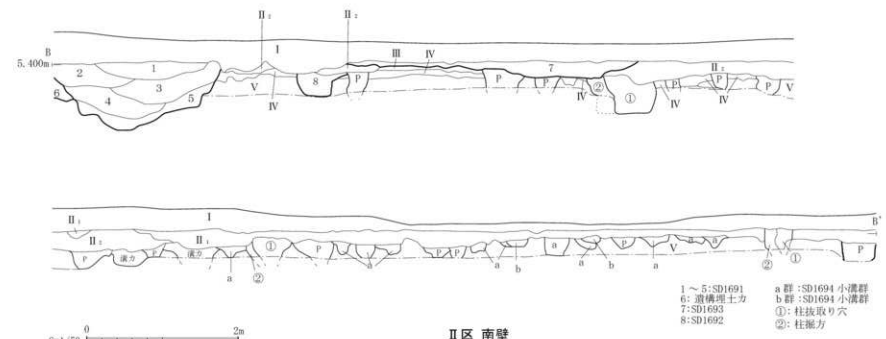
古代の遺構は、Ⅰ区中央付近で土壙が纏まって発見された。柱穴（ＳＢ1687）は、その南側に集中して分布していた。南端付近では、東西方向の溝跡（ＳＤ1688・1689）が確認された。さらにその南側のⅡ区西半部は、南北方向の小溝群（ＳＤ1694）が複数時期にわたって検出されたことから、生産域として継続的に利用されていたことが判明した。これらの年代については、出土遺物が僅少であるため不明な部分が多いが、灰白色火山灰との関係や出土遺物に土師器杯（ＢⅡ・ＢⅤ類）、甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅴ類）を含んでいることから、ここでは大きく8世紀末葉～10世前葉ごろまでと幅を持って考えておきたい。

引用文献

多賀城市教育委員会　『山王遺跡－第51・54・57次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第81集　2006
多賀城市教育委員会　『多賀城市内の遺跡2－平成17年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第83集　2006

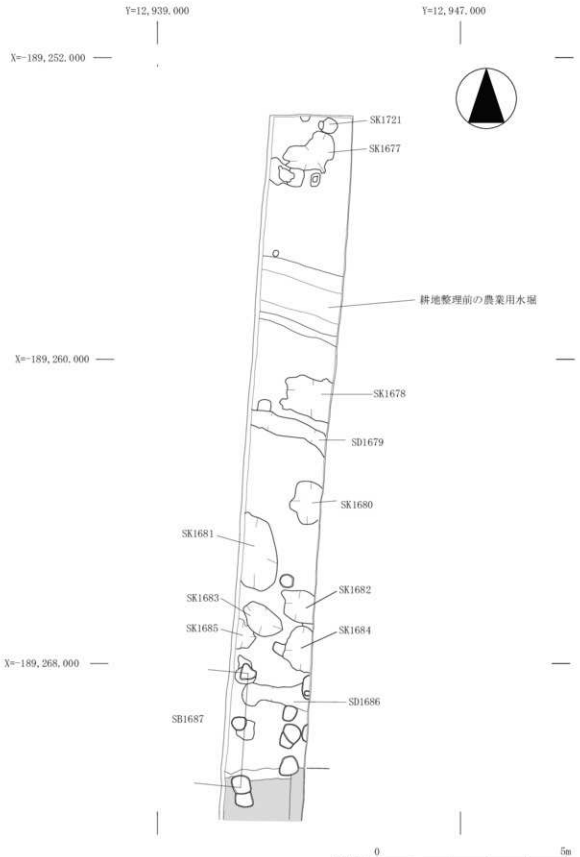


Ⅰ区 東壁

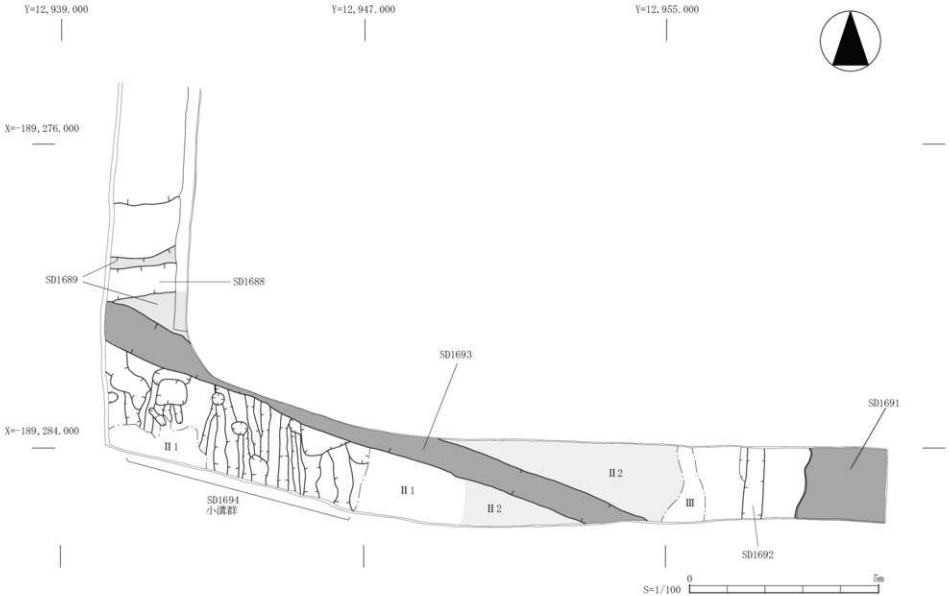


Ⅱ区 南壁

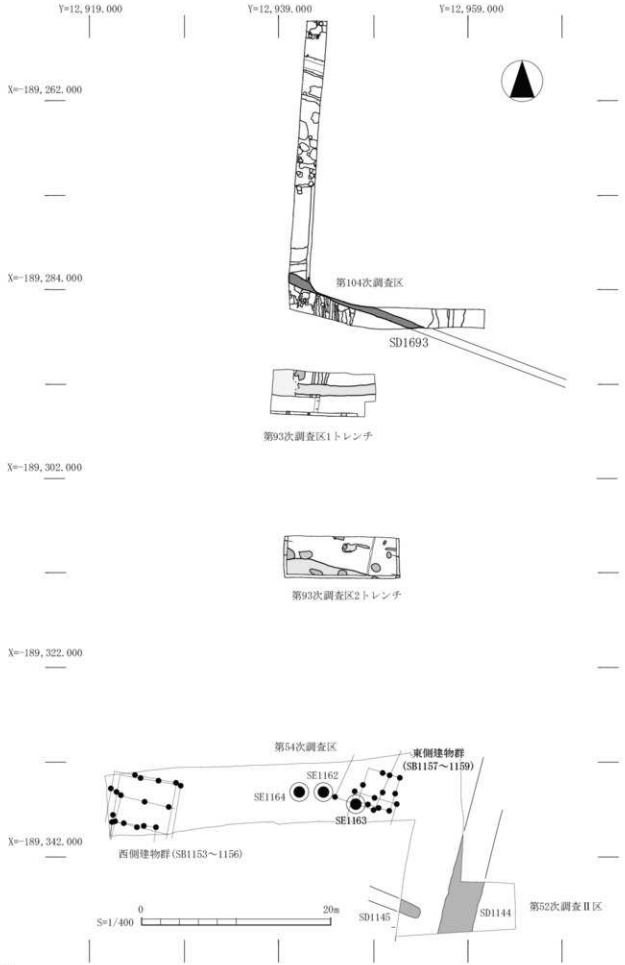
第4図　調査区壁面断面図



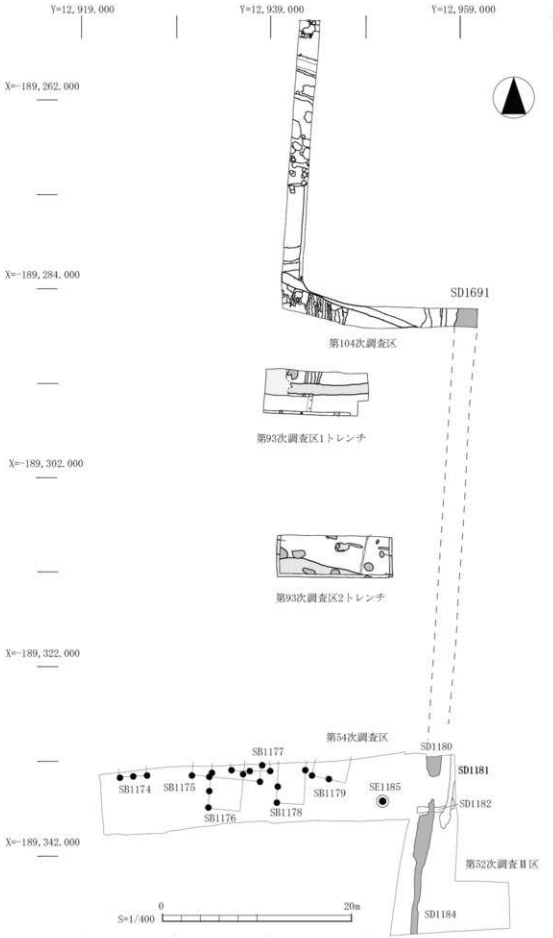
第5図　Ⅰ区　検出遺構平面図



第6図　Ⅱ区　検出遺構平面図



第7図　第104次調査区と周辺の調査区位置図(1)



第8図　第104次調査区と周辺の調査区位置図(2)

Ⅰ区　調査区全景（南より）

Ⅰ区　土壙、掘立柱建物跡（南より）

Ⅱ区　調査区全景（東より）

Ⅱ区　調査区全景（西より）

Ⅰ区　ＳＤ1693・1688・1689溝跡
検出状況　（東より）

Ⅱ区　ＳＤ1694小溝群検出状況
（南東より）

Ⅱ区　ＳＤ1692溝跡検出状況
（南東より）

XIII　山王遺跡第100次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、宅地造成に伴う発掘調査である。平成23年2月3日に地権者より当該地区における宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では開発対象面積が約1,300㎡と広範囲に及ぶことから、埋蔵文化財への影響も懸念された。このため、事前に遺構検出面の深さやその分布状況を知る目的で確認調査を実施することとなった。3月30日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

第1図　調査区位置図

調査は4月17日より開始し、重機を使用して現代の盛土、表土の除去を行ったところ、現地表面から約80㎝の深さで遺構検出面（第Ⅳ層）に到達した。調査区の中央付近では北1東西道路跡、南端付近では柱穴、土壙を発見した。19日には遺構の平面プランの精査と写真撮影を行った。20日からは平面・断面図の作成を開始し、26日に終了した。28日に器材の撤収と埋戻しを行って、現地調査の一切を終了した。

2　調査成果

（1）　層　序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

Ⅰ1層：現代の表土・盛土層で、厚さは20㎝～ 70㎝である。

Ⅰ2～Ⅰ5層：近・現代の耕作土層とみられ、厚さは50㎝である。

Ⅱ層：褐灰色土で、厚さは20㎝未満である。調査区北半では古代の遺構を直接覆う土層である。

Ⅲ1～Ⅲ2層：褐灰色土で、厚さは30㎝未満である。調査区南端付近のみで確認され、2層に細分された。下層の方が砂質が強い。

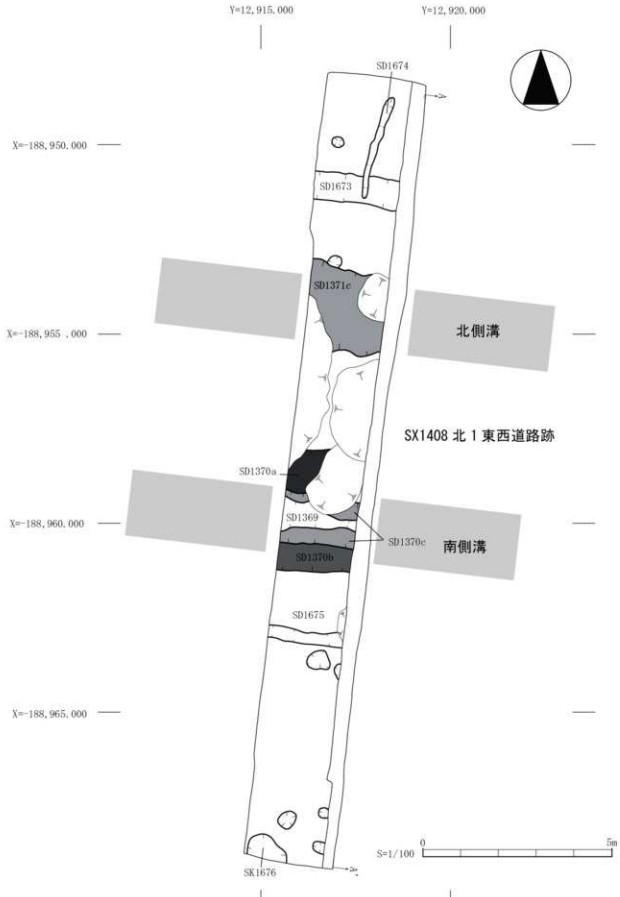
Ⅳ層：褐灰色土で、厚さは4～ 30㎝ である。炭化物と土器片を含む。古代の遺構検出面。

Ⅴ層：にぶい黄橙色土で、厚さは60㎝以上である。本地区周辺での基盤層であり、古墳時代前期末～中期初頭の河川跡埋土でもある。

（2）　発見遺構と遺物

S X 1408北1東西道路跡

調査区中央部、Ⅳ層上面で発見した東西道路跡である。小ビットよりも新しい。東西大路から約110ｍ北に位置しており、域外の方格地割のうち、北1東西道路に相当する。長さ約2ｍまで検出し、東西とも調


Y=12,915.000
Y=12,920.000
X=-188,950.000
X=-188,955 .000
X=-188,960.000
X=-188,965.000
SD1674
SD1673
SD1371c
北側溝
SX1408 北 1 東西道路跡
SD1370a
SD1369
SD1370c
南側溝
SD1370b
SD1675
SK1676
S=1/100
0
5m

第2図　検出遺構平面図

査区外に延びている。南北両側に素掘りの側溝（南側溝：ＳＤ1370、北側溝：ＳＤ1371）を伴っており、これらの新旧関係から3時期の変遷（Ａ～Ｃ期）があることを確認した。

Ａ期：南側溝（ＳＤ1370a）、北側溝（ＳＤ1371a）を確認した。南側溝はＣ期の北側に位置しているが、攪乱に壊されているため残存状況は悪い。また、北側溝はＣ期とほぼ同位置のため平面プランでは確認していない。規模は南側溝で上幅1.15ｍ以上、深さ約50㎝である。底面はほぼ平坦で、壁は内湾しながら立ち上がる。埋土は4層に分けられ、7層が均質な褐灰色土、8層がⅤ層由来の小ブロックを含む灰黄褐色土、9層が褐灰色土と灰白色土の混合土、10層が均質な褐灰色土である（以下土層の表記は東壁断面図参照）。北側溝は北壁の一部を断面で確認したに過ぎず、埋土（15層）はⅤ層由来の小ブロックを含む灰黄褐色土である。

遺物は出土していない。

Ｂ期：南側溝（ＳＤ1370b）と北側溝（ＳＤ1371b）を確認した。Ａ期と比較して路面の幅がやや拡大している。南側溝はＣ期に北半が壊されており、上幅0.7ｍ以上、下幅0.2ｍ、深さは75㎝である。埋土は2層に分けられ、5層は灰白色火山灰粒が混じる褐灰色砂質土で、6層は5層とⅤ層由来の砂質土が互層になる。北側溝もＣ期に壊されているため、底面付近を確認したにすぎない。下幅0.6ｍ、深さは50～70㎝である。埋土は南側溝と同じである。なお、13層は杭の痕跡の可能性がある。

遺物は土師器杯（Ｂ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅲ類）・甕が出土している。

Ｃ期：南側溝（ＳＤ1370c）、北側溝（ＳＤ1371c）を確認した。ＳＤ1370ｃはＳＤ1639溝跡と重複しておりそれよりも古い。路幅は側溝心々間で5.6ｍである。方向は南側溝でみると東で約6度南に偏している。規模は南側溝で上幅2.2ｍ、下幅0.5ｍ、深さ70㎝である。壁面の中位付近には段がつく。埋土は2層に分けられ、3層は均質な褐灰色粘質土で、4層はⅤ層由来の砂質土が縞状に堆積する。北側溝は上幅2～2.2ｍ、下幅0.5ｍ、深さ60㎝である。壁は直線的に開きながら立ち上がる。埋土は2層に分けられ、11層が均質な灰白色土で、12層が南側溝埋土3層に対応する。

遺物は土師器杯（ＢⅤ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯・瓶・甕、須恵系土器杯・高台付皿、丸瓦（ⅡＢ類）、平瓦（ⅡＡ類）が出土している。

ＳＤ1369溝跡

調査区中央付近のⅣ層上面で発見した東西溝跡である。ＳＤ1370溝跡と重複しておりそれよりも新しい。方向は道路側溝にほぼ並行する。長さ約2ｍまで検出し、上幅1.8ｍ前後、下幅0.8ｍ、深さ30㎝である。壁は途中に段を形成しながら緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられ、1層が均質な灰白色砂質土で、2層が粘土と砂質土が互層になるところもある黒色粘土主体の層である。

遺物は出土していない。

ＳＤ1673溝跡

調査区北端部のⅣ層上面で発見した東西溝跡である。ＳＤ1674溝跡と重複しておりそれよりも古い。方向は道路側溝にほぼ並行する。規模は長さ2ｍ以上、上幅0.7～0.8ｍ、下幅0.6ｍ、深さ50㎝である。底面は平坦で壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は3層に分けられ、16層が炭化物粒と土器片を含む褐灰色土で、17層が黄灰色土、18層がⅤ層由来のにぶい黄橙色土で17層が斑状に混じる。

遺物は土師器杯（Ｂ類）が出土している。

ＳＤ1674溝跡

調査区北端部のⅣ層上面で発見した南北溝跡である。ＳＤ1673溝跡と重複しておりそれよりも新しい。

規模は長さ2.76m、上幅0.14～0.24mである。埋土は炭化物粒を含む褐灰色土である。

遺物は出土していない。

ＳＤ1675溝跡

調査区南半部のⅣ層上面で発見した東西溝跡である。方向は道路側溝にほぼ並行する。規模は長さ2m以上、上幅0.3～0.4mである。埋土はⅤ層由来の小ブロックを含む褐灰色土である。

遺物は出土していない。

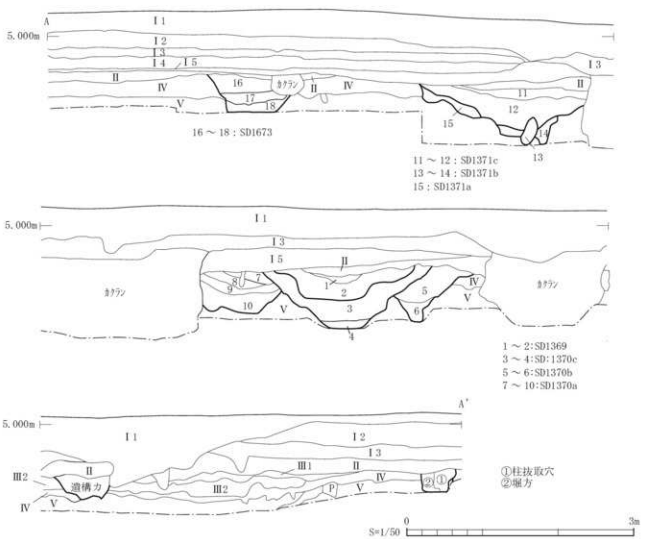
ＳＫ1676土壙

調査区南端部のⅣ層上面で発見した。平面形は不整形で、規模は南側が調査区外へと延びているため不明である。埋土は炭化物・焼土粒、土器片を含む褐灰色土である。

遺物は土師器甕（Ａ類）が出土している。

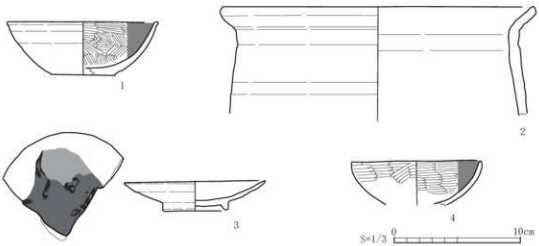
その他の遺構

調査区北端部と南半部のⅣ層上面でピットを6基発見した。中には柱抜取り穴を確認できるものもある。



第3図　調査区東壁断面図

※本章の考察については、山王遺跡第111次・117次調査と合わせて、「山王遺跡第118次調査」でまとめて行った。

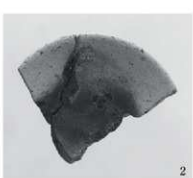


単位(cm)

番号	種類	層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・杯	SD1370c	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	12.0 24/24	5.0 8/24	4.2	1-1	R1	
2	土師器・甕	SD1370c	ロクロナデ	ロクロナデ	(24.4) 6/24	－	－		R2	
3	須恵系土器・高台付杯	SD1370c	ロクロナデ 底部：ナデ	ロクロナデ	(11.0) 8/24	5.1 10/24	2.3	1-2	R3	油煙状の付着物あり
4	土師器・杯	Ⅱ層	ロクロナデ、ヘラミガキ	ロクロナデ、ヘラミガキ、黒色処理	(10.0) 3/24	－	－		R4	

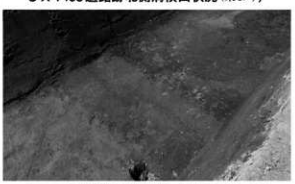
第4図　出土遺物

1・2：SD1370c



調査区全景（北より）

ＳＸ1408道路跡北側溝検出状況（東より）



ＳＸ1408道路跡南側溝検出状況（南東より）

ＳＸ1408道路跡側溝検出状況（南より）

XIV　山王遺跡第111次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。平成24年7月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画は、基礎工事の際に直径約20cm、長さ2.5mの鋼管杭60本を打ち込むものであった。本対象地区は、事前に確認調査を実施しており（第100次調査）、現表土下約80cmで古代の遺構が検出されていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、8月23日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

第1図　調査区位置図

調査は9月4日より開始し、重機を使用して現代の盛土、表土の除去を行ったところ、現地表面から約70cmの深さで遺構検出面（第Ⅲ層）に到達した。調査区の北端付近では北1東西道路跡の南側溝、中央付近では溝跡、土壙、南端付近では柱穴が纏まって発見された。12日には実測図作成用の基準点を設置し、以後、重複関係の新しい順に埋土を掘り下げながら各遺構の平面・断面図作成と写真撮影を行った。これらの作業が終了したのは26日である。27日には調査区の全景写真撮影、10月3・4日には調査区の北端と南端にサブトレンチを設けさらに掘り下げを行った。シルトと粗砂が互層になる状況が確認され、土師器の細片が数点出土した。5日に器材の撤収、6日には埋め戻しを行って、現地調査の一切を終了した。

2　調査成果

（1）層　序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

Ⅰ層：現代の表土・盛土層で、厚さは0.7mである。

Ⅱ層：にぶい赤褐色土で、厚さは16cm未満である。調査区北半に分布し、北1東西道路跡の南側溝を直接覆う土層である。

Ⅲ1～Ⅲ3層：Ⅲ層は3層に分層された。Ⅲ1～Ⅲ2層は炭化物と土器片を含む土色・土性とも近似するにぶい黄褐灰色土である。Ⅲ1層は調査区全域に分布するが、Ⅲ2層は部分的にしか確認できなかった。厚さはそれぞれ20cm未満である。Ⅲ3層は灰黄褐色土で、厚さは8～20cmである。調査区全域に分布し西に向かって傾斜する。Ⅲ1層上面が古代の遺構検出面。

Ⅳ層：浅黄橙色土で、厚さは38cm以上である。本地区周辺での基盤層であり、古墳時代前期末～中期初頭の河川跡埋土でもある。

（2） 発見遺構と遺物

【Ⅲ1層上面検出遺構】

ＳＸ1408北1東西道路跡

調査区中央部で発見したＳＸ1408東西道路跡の南側溝（ＳＤ1730）である。ＳＸ1698、ＳＤ1673と重複し、前者より新しく後者より古い。東西大路から約110ｍ北に位置しており、城外の方格地割のうち、北1東西道路に相当する。長さ約7ｍまで検出し、東西とも調査区外に延びている。本調査区では、南側溝ＳＤ1370の南半部を検出した。新旧関係から2時期の変遷（Ａ～Ｂ期）があることを確認した。

Ａ期：南側溝（ＳＤ1370a）を確認した。南壁の一部を確認したのみで、大半がＢ期に壊されている。規模は調査区西壁断面で見ると上幅1ｍ以上、下幅0.4ｍ以上、深さ約60㎝である。底面は凹凸があり、壁は中位付近で段を形成しながら立ち上がる。埋土は2層に分けられ（西壁断面）、4層は灰白色火山灰粒が混じる灰黄褐色土、5層がⅣ層由来の小ブロックを含む黄灰色粘質土である。

遺物は土師器杯（Ａ・Ｂ類）・高台付坏・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅰａ・Ⅴ類）・瓶・甕、須恵系土器杯、丸瓦（Ⅱ類）、磨痕のある礫が出土している。

Ｂ期：南側溝（ＳＤ1370b）の南半部を確認した。規模は上幅1.2ｍ以上、下幅0.6ｍ以上、深さは60㎝である。壁は直線的に開きながら立ち上がる。埋土は2層に分けられ、2層が灰黄色土、3層が褐灰色土である。

遺物は土師器杯（ＢⅠ・ＢⅡ・ＢⅤ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅰ・Ⅱａ・Ⅲ・Ⅴ類）・双耳杯・長頸瓶・甕・甑、丸瓦（ⅡＢ類）、平瓦（ⅡＣ類）、土器片製円板が出土している。

ＳＤ1369溝跡

調査区北端部で発見した東西溝跡である。ＳＤ1730溝跡と重複しておりそれよりも新しい。方向は道路側溝にほぼ並行する。規模は長さ7ｍ以上、上幅0.5ｍ以上、下幅0.1ｍ以上、深さ20㎝である。壁は下位付近に段が認められ緩やかに立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色土ブロックの混じる黄灰色土である（西壁断面1層）。

遺物は土師器杯（Ｂ類）・高台付杯・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ類）・甕、須恵系土器小型杯・高台付杯、平瓦（ⅡＣ類）が出土している。

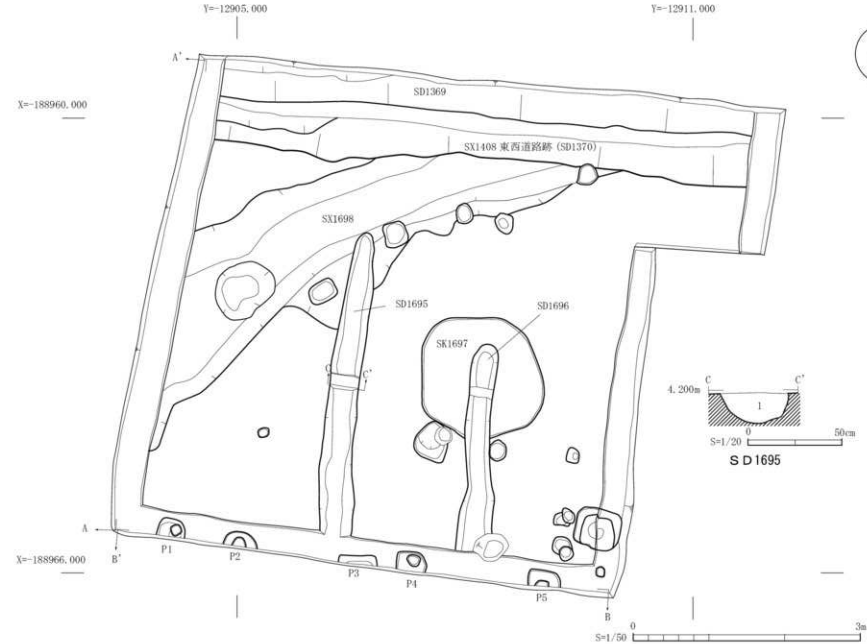
ＳＤ1695溝跡

調査区北端部で発見した南北溝跡である。ＳＸ1698、Ｐ3と重複しており、前者よりも新しく後者よりも古い。規模は4.3ｍ以上、上幅0.4ｍ前後、下幅0.2 ～ 0.25ｍ、深さ50㎝である。埋土は3層に分けられ（南壁断面）、4・5層が均質なにぶい～灰黄褐色土、6層がⅣ層由来の小ブロックを含む褐灰色土である。

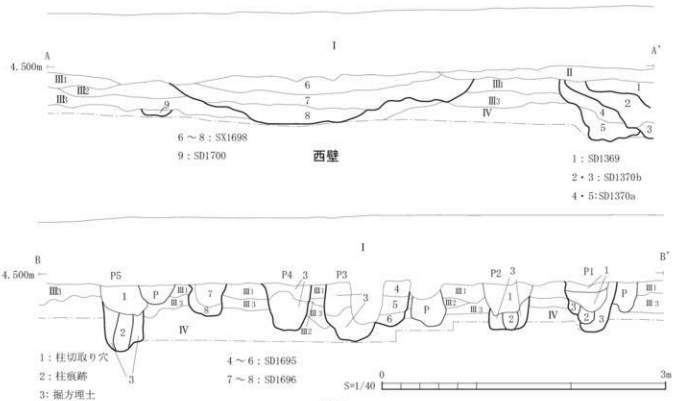
遺物は土師器杯（Ａ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅴ類）・瓶、土器片製円板が出土している。

ＳＤ1696溝跡

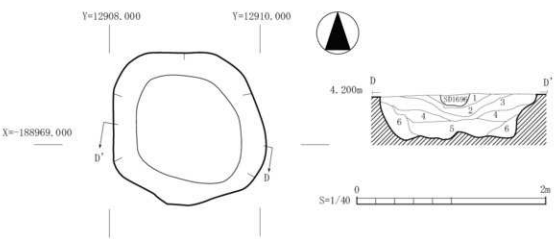
調査区北端部で発見した南北溝跡である。ＳＫ1697、Pit と重複しており、前者よりも新しく後者よりも古い。規模は3.1ｍ以上、上幅0.3 ～ 0.4ｍ、下幅0.2 ～ 0.28ｍ、深さ35㎝である。埋土は2層に分けられ（南壁断面）、7層が均質な灰黄褐色土、8層は褐灰色土とⅤ層粒が斑状に混じりあう。



第2図　検出遺構平面・断面図



第3図　調査区壁面断面図

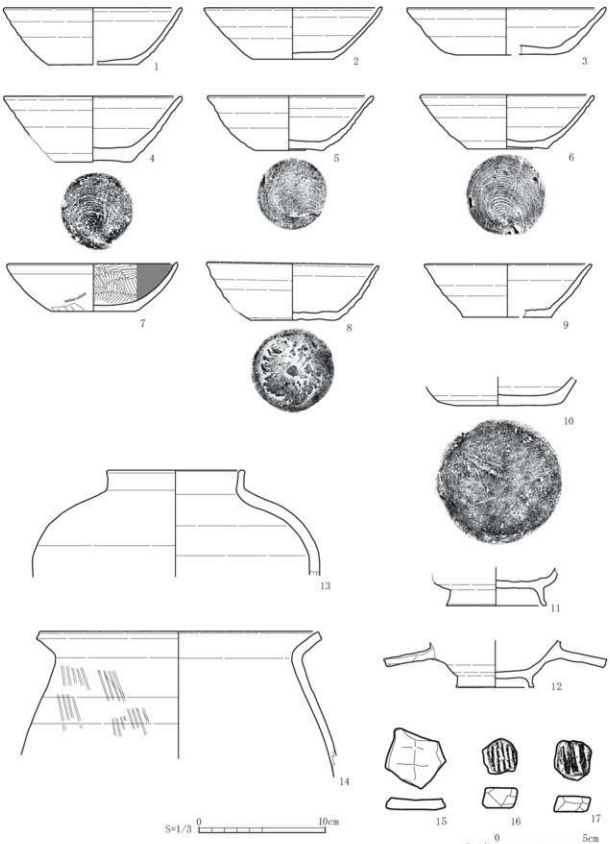


第4図　ＳＫ1697土壙平面・断面図

遺物は土師器杯（Ｂ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅲ類）・甕が出土している。

ＳＫ1697土壙

調査区ほぼ中央で発見した。ＳＤ1696溝跡と重複しておりそれよりも古い。平面形はやや崩れた隅丸方形で、規模は一辺約0.6ｍ、深さ50cmである。断面形は逆台形を呈する。埋土は6層に分けられるが大別すると4層である。1・2層は褐灰色土で下層がやや粘性が強く炭化物を含む。3・4層は均質な褐灰色土である。5層は黒褐色粘質土に薄い炭化物層が互層となる。焼土粒を多量に含む。6層はⅣ層由来のブロッ



第5図　出土遺物

単位（cm）

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	須恵器・杯	SD1369 検出面	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(14.0) 2/24	(7.1) 8/24	4.5		R1	
2	須恵器・杯	SD1370 b	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(13.8) 4/24	(6.3) 18/24	4.1		R2	
3	須恵器・杯	SD1370 b	ロクロナデ 底部：ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(15.5) 4/24	(9.5) 8/25	3.7	3-1	R3	
4	須恵器・杯	SD1370 b	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(14.0) 3/24	(6.0) 24/26	5.2		R4	
5	須恵器・杯	SD1370 a	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(13.9) 18/24	(5.4) 24/24	4.3	3-2	R5	
6	須恵器・杯	SD1370 a	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(13.5) 8/24	6.4 24/24	4.3	3-3	R6	
7	土師器・杯	SK1697 1－1	ロクロナデ 体部下端～底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(13.3) 9/24	6.6 24/24	3.8	3-4	R10	
8	須恵器・杯	SK1697 1－2	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.5) 12/24	6.6 24/24	4.5	3-5	R11	
9	須恵器・杯	Ⅱ層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.1) 3/24	(13.1) 3/24	4.2		R13	
10	須恵器・杯	Ⅱ層	ロクロナデ 体部下端～底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	－	(9.8) 24/24	－		R16	
11	須恵器 高台付杯	Ⅱ層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	8.0 24/24	－		R14	
12	須恵器 双耳杯	Ⅱ層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	(6.2) 8/24	－		R15	
13	須恵器 短頸壺	P1 掘土	ロクロナデ	ロクロナデ	(11.8) 9/24	－	－		R12	
14	土師器・甕	SX1698 1－2	平行タタキ→ロクロナデ	ロクロナデ	(22.0) 4/24	－	－	3-6	R17	
15	別書土器	SD1700 掘土	最大幅：31、最大厚：0.5　直角に交差する刺線		－	－	－	3-7	R9	土師器杯片「申」
16	土器片製円板	SD1379 b	最大幅：1.9、最大厚：1.1		－	－	－	3-8	R7	須恵器甕片転用
17	土器片製円板	SD1695 掘土	最大幅：20、最大厚：0.8		－	－	－	3-9	R8	須恵器甕片転用

第5図　出土遺物観察表

クが主体となる黄灰色土である。

遺物は土師器杯（Ⅱ類）・甕（B類）、須恵器杯（Ⅲ類）・甕、炉底滓が出土している。

SX1698溝状遺構

調査区北西部で発見した北東方向の溝状遺構である。SD1370・1695と重複しており、それらよりも古い。規模は長さ7.4m以上、上幅1.2～1.6m、下幅0.5～1m、深さ50cmである。南壁に平坦部を持ち、その部分に5基のピットが確認された。埋土は3層に分けられる（西壁断面）。いずれも均質な堆積をしており、6層がにぶい橙色土、7層がにぶい黄橙色土、8層がⅣ層由来の小ブロックを含む褐灰色土である。

遺物は土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器杯（Ⅱ類）が出土している。

その他の遺構

調査区南端部の壁際付近で柱穴5基を検出した。そのうち、切取り穴が3基、柱痕跡が4基で確認されたが、建物としての構成は不明である。

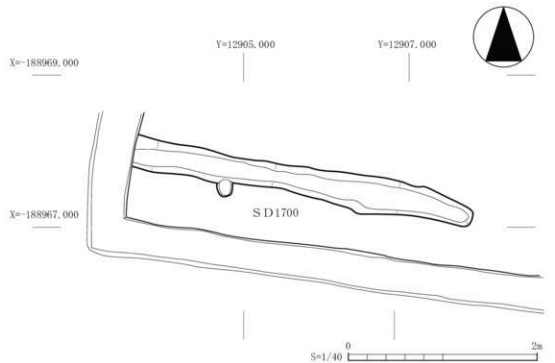
遺物は土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器短頸壺が出土している。

【Ⅳ層上面検出遺構】

SD1700溝跡

調査区南東隅付近で発見した東西溝跡である。規模は長さ4m以上、上幅0.27～0.4m、下幅0.12～0.26m、深さ6cmである。埋土はⅢ3層とⅣ層が混じり合うにぶい黄橙色土である。

遺物は出土していない。



第6図　ＳＤ1700溝跡平面図

Ⅲ層出土の遺物

土師器杯（Ａ・ＢⅠ類）・高台付杯・甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器杯（Ⅱａ・Ⅲ・Ⅴ類）・高台付椀・双耳杯・蓋・甕、丸瓦（ⅡＢ類）、平瓦（ⅡＢ類）、鉄滓が出土している。

※本章の考察については、山王遺跡第100次・117次調査と合わせて、「山王遺跡第118次調査」でまとめて行った。

対象地区近景（南より）

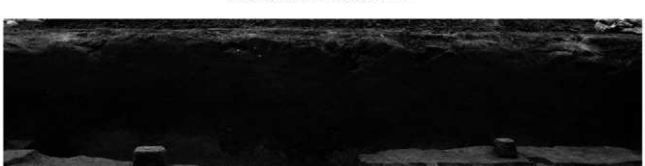
調査区全景（南東より）

調査区全景（北西より）

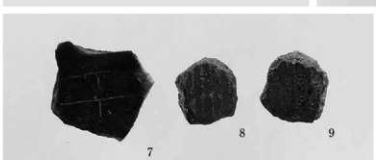
北１東西道路跡南側溝の完掘状況（東より）

ＳＸ1698完掘状況（東より）

調査区西壁土層堆積状況（東より）



調査区南壁土層堆積状況（北より）



1・8：SD1370b
2・3：SD1370a
4・5：SK1697
6：SX1698
7：SD1700
9：SD1695

写真図版3

XV　山王遺跡第117次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。平成24年8月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画は、基礎工事の際に直径約20cm、長さ2.5mの柱状改良杭52本を打ち込むものであった。本対象地区は、事前に確認調査を実施しており（第100次調査）、現表土下約80cmで古代の遺構が検出されていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、10月10日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

第1図　調査区位置図

調査は10月18日より開始し、はじめに重機を使用して現代の盛土、表土の除去を行った。第Ⅱ層上面で検出作業を行うが遺構は発見されず、東半部で大規模な攪乱が見られるだけであった。25日よりⅡ層の除去を開始し、11月1日には終了した。なお、この日2回目の土砂の搬出を実施した。2日からは第Ⅲ・Ⅳ層上面での検出作業を始める。東半部は攪乱が深く及んでいたためⅤ層が検出面となった。精査の結果、Ⅲ層は南端部に分布する堆積層で、基本的にはⅣ層上面で古代の遺構が確認されることとなった。遺構の分布状況は、西半部に大・小の柱穴、南西隅に土壙、南端部に溝跡、そして、東端付近で南北方向の材木塀が確認された。柱穴の規模が大きい建物跡は、材木塀と一定の間隔を持ちほぼ同じ方向をとっていた。また、材木塀は第101次調査区で発見していた塀の延長線上に位置していることも判明した。これらの遺構を重複関係の新しい順に埋土を掘り下げながら各遺構の平面・断面図作成と写真撮影を行っていった。調査区の全景写真撮影は11月28日に行った。これらの作業が終了したのは12月4日である。5・6日に調査区壁面断面図の作成。7日には補足調査と器材の撤収、12日に埋め戻しを行って、現地調査の一切を完了した。

2　調査成果

（1）　層　序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

Ⅰ1層：現代の表土・盛土層及び攪乱層で、厚さは0.15～1.1mである。

Ⅰ2層：近・現代の耕作土層で、厚さは0.1～0.3mである。

Ⅱ層：炭化物を含む暗褐色土で、厚さは20cm未満である。

Ⅲ層：灰白色火山灰粒を含む黒褐色土で、厚さは20cm未満である。調査区の南端付近にのみに分布する。

Ⅳ層：黒褐色土の小ブロックを含む暗褐色土で、厚さは5～28㎝である。古代の遺構検出面で土器片を含む。
Ⅴ1層：にぶい黄褐色土で、厚さは10～20㎝である。Ⅴ2層への漸移層である。古代の遺構検出面。
Ⅴ2層：にぶい黄褐色土。本地区周辺での基盤層で、古墳時代前期末～中期初頭の河川跡埋土でもある。

なお、調査区東半部と中央付近は、大規模な攪乱が入っており、古代の堆積層は滅失し、Ⅴ2層で検出された遺構（ＳＡ1703等）もある。

（2） 発見遺構と遺物

【Ⅲ層上面検出遺構】

ＳＤ1704溝跡

調査区南半部で発見した東西溝跡である。規模は長さ6.7ｍ以上、上幅0.25～0.45ｍ、下幅0.2～0.35ｍ、深さ20㎝である。断面形は浅い逆台形を呈する。埋土は炭化物を含む黒褐色土である。

遺物は出土していない。

【Ⅳ層上面検出遺構】

ＳＢ1701掘立柱建物跡

調査区西半部で発見した桁行3間、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。ＳＡ1702、ＳＤ1704・1705・1706、ＳＫ1710溝と重複しており、ＳＤ1705・1706よりも新しく、ＳＤ1704、ＳＫ1710よりも古い。ＳＡ1702との新旧関係は不明である。柱穴は10基すべて発見しており、柱抜取り穴は3基（Ｐ2・5・7）で、柱痕跡は4基（Ｐ1・3・4・10）で確認された。方向は東側柱列で測ると北で2度東に偏している。柱間は東側柱列で北より2.00ｍ、約2.1ｍ、約2.2ｍ、総長6.3ｍであり、北側の柱列では西より約2.3ｍ、約2.5ｍである。柱穴の平面形は隅丸方形で、規模は一辺65～100㎝、深さ40～90㎝である。埋土は灰黒褐色粘質土のブロックを含むにぶい黄褐色砂質土である。柱痕跡は、直径15～20㎝の円形ないし楕円形であり、埋土は黒褐色粘質土である。

遺物は土師器杯（Ａ・Ｂ類）・甕、須恵器杯（Ⅱ・Ⅲ類）・瓶・甕の破片が出土している。第6図1の土師器杯は畿内系である。

ＳＡ1702柱列跡

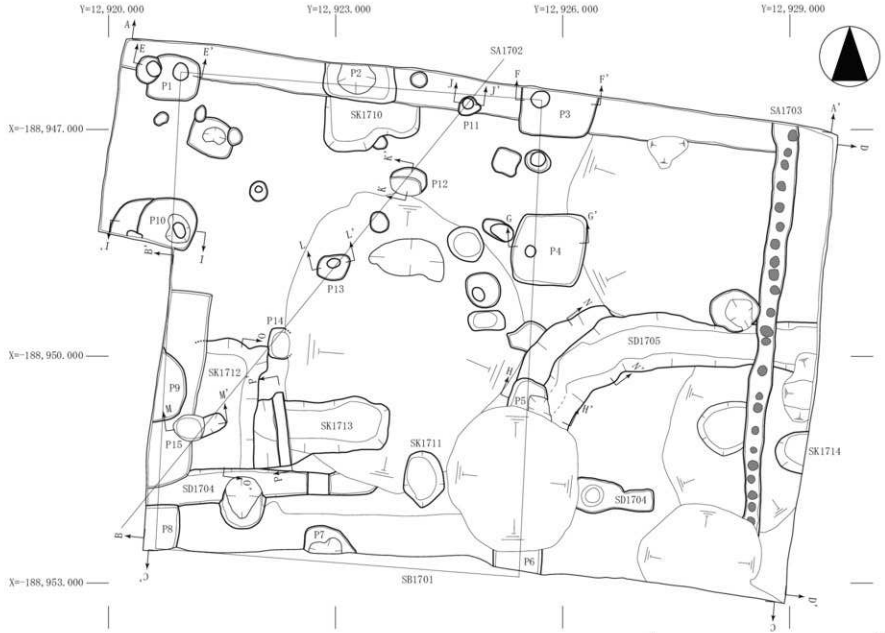
調査区西半部で発見した南北4間以上の柱列跡である。Ｐ12・15で柱抜取り穴、Ｐ11・13で柱痕跡を確認した。柱間は北から約1.35ｍ、約1.4ｍ、約1.25ｍ、約1.15ｍである。方向は北で約40度東に偏している。柱穴は一辺30～50㎝の不整形で、深さは25～50㎝である。掘方埋土は黒褐色粘質土ブロックを含むにぶい黄褐色土、柱痕跡は黒褐色粘質土である。

遺物は土師器杯（Ａ・Ｂ類）・甕（Ａ類）、須恵器杯（Ⅱａ・Ⅲ類）の破片が出土している。

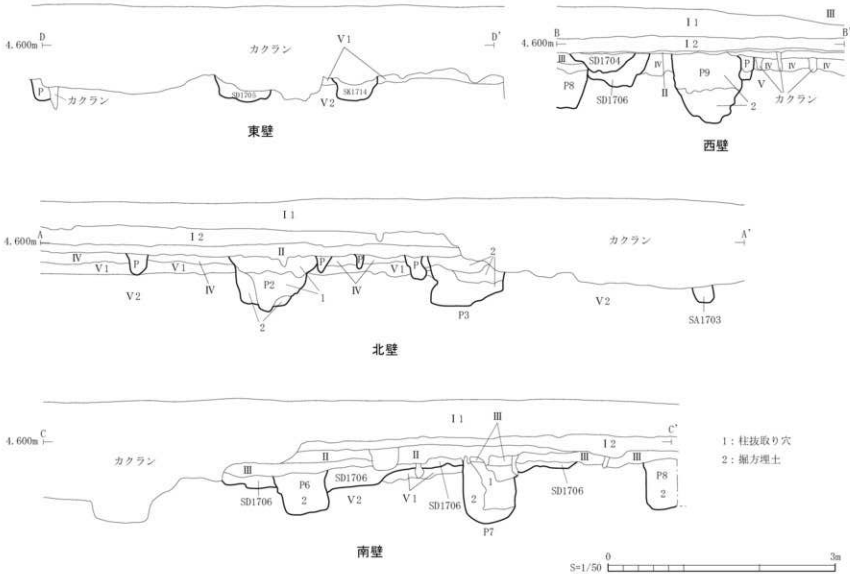
ＳＤ1705溝跡

調査区東半部で発見した屈曲する溝跡である。ＳＢ1701、ＳＡ1703、柱穴と重複しており、それらよりも古い。規模は長さ3.5ｍ以上、上幅0.5～1ｍ、下幅0.1～0.5ｍ、深さ30㎝である。底面は平坦で、壁は中位付近に平坦面を持つ。埋土は2層に分けられ、1層が黒褐色土、2層がＶ層ブロックを含む黒褐色砂質土である。

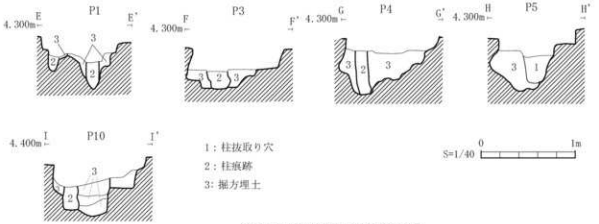
遺物はタタキ痕を残すスサ入り白色粘土が出土している（写真図版1-4）。


Y=12,920.000
Y=12,923.000
Y=12,926.000
Y=12,929.000
X=-188,947.000
X=-188,950.000
X=-188,953.000
SA1702
SA1703
SK1710
SK1712
SK1713
SK1711
SK1714
SD1705
SD1704
SD1704
SB1701
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
S=1/50
0
3m

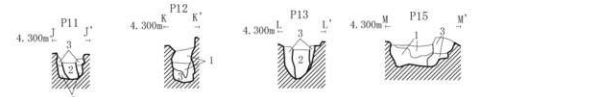
第2図　検出遺構平面図



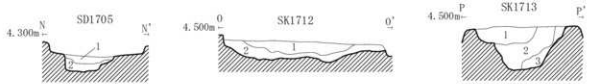
第3図　調査区各壁面断面図



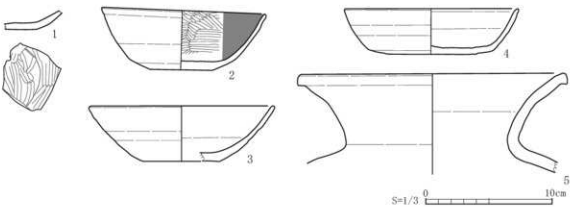
ＳＢ1701 掘立柱建物跡断面図



ＳＡ1702 柱列跡断面図



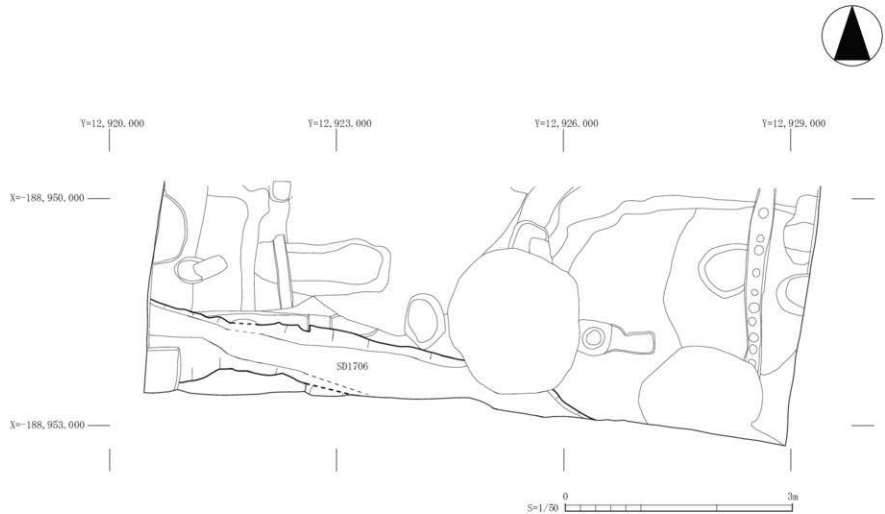
第４図　掘立柱建物跡、柱列跡、溝跡、土壙断面図



単位（cm）

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・杯	SB1701 掘方埋土	体部から底部にかけて粗い横方向のミガキ	ナデ？	－	－	－	1-1	R4	P10出土　磁内系
2	土師器・杯	SK1710 埋土	ロクロナデ 底部：箱減のため切り離し不明	ロクロナデ，黒色処理	(12.9) 4/24	(4.9) 24/24	4.7	1-2	R7	
3	須恵器・杯	IV層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.4) 3/24	(6.0) 3/24	4.4		R2	
4	須恵器・杯	SK1712 埋土	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(13.8) 3/24	(7.4) 12/25	3.6	1-3	R6	
5	須恵器・甕	SD1706 検出面	ロクロナデ	ロクロナデ	(20.8) 4/24	－	－		R1	

第５図　出土遺物



第6図　ＳＤ1706溝跡平面図

ＳＤ1706溝跡

調査区南端部で発見した東西溝跡である。方向や位置関係から第100次調査区で検出したＳＤ1673溝跡と同一とみられる。ＳＢ1701、ＳＫ1712、柱穴と重複しており、それらよりも古い。規模は長さ6ｍ以上、上幅0.6～1ｍ、下幅0.2～0.4ｍ、深さ20㎝である。底面は凹凸があり、断面形は皿形を呈する。埋土はにぶい黄褐色土粒を含む黒褐色土である。

遺物は土師器杯（Ｂ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯の破片が出土している。

ＳＫ1710土壙

調査区北端部で発見した。ＳＢ1701と重複しており、それよりも新しい。平面形は不整形で、規模は南北約0.7ｍ以上、東西1.25ｍ、深さ10㎝前後である。断面形は皿形を呈する。埋土は土器片を含む暗褐色土である。

遺物は土師器杯（ＢⅤ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯・甕の破片が出土している。

ＳＫ1711土壙

調査区北端部で発見した。平面形は不整形で、規模は長軸0.75ｍ、短軸0.54ｍ、深さ5～10㎝である。断面形は皿形を呈する。埋土は焼土・炭化物粒を多量に含む褐色土である。

遺物は出土していない。

ＳＫ1712土壙

調査区南西部で発見した。ＳＢ1701、ＳＡ1702、ＳＫ1713と重複しており、ＳＡ1702、ＳＫ1713よりも新しく、ＳＢ1701よりも古い。平面形は方形と推定され、規模は南北約2ｍ、東西1.4ｍ以上、深さ20～30㎝である。底面は凹凸があり、壁は内湾しながら立ち上がる。埋土は2層に分けられ、1層は炭化物粒を若干含む暗褐色砂質土、2層は暗褐色砂質土粒が斑状に混じるにぶい黄褐色砂である。

遺物は須恵器杯（Ⅱ類）が出土している。

ＳＫ1713土壙

調査区南西部で発見した。ＳＫ1712と重複しており、それよりも古い。平面形は東西に長い不整形で、規模は南北約0.9ｍ、東西1.3ｍ以上、深さ45㎝である。底面は凹凸があり、壁は内湾しながら立ち上がる。埋土は3層に分けられ、1層は暗褐色土、2層は炭化物粒を含む黒褐色粘質土、3層は褐色土粒を含むにぶい黄褐色砂質土である。

遺物は出土していない。

【Ⅴ1層上面検出遺構】

ＳＤ1707溝跡

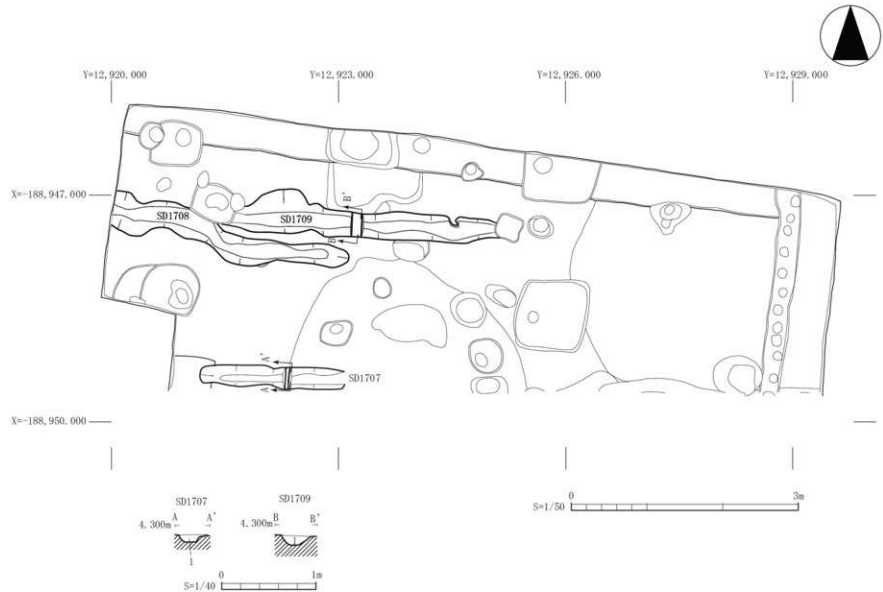
調査区西端部で発見した東西溝跡である。規模は長さ1.9ｍ以上、上幅0.2～0.3ｍ、下幅0.08～0.14ｍ、深さ8㎝である。断面形は皿形を呈する。埋土はⅤ層ブロック、炭化物粒を含む暗褐色土である。

遺物は出土していない。

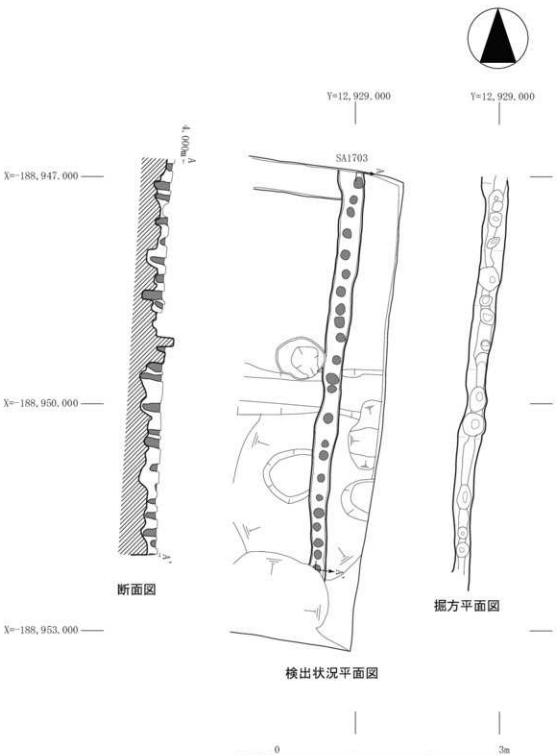
ＳＤ1708溝跡

調査区西端部で発見した蛇行ぎみの東西溝跡である。規模は長さ3.2ｍ以上、上幅0.2～0.5ｍ、下幅0.1～0.2ｍ、深さ15～35㎝である。断面形はＵ字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土ブロックを含むにぶい黄褐色砂である。

遺物は出土していない。



第7図　Ⅴ1層上面検出遺構平面・断面図



第8図　SA1703材木塀跡平面・断面図

ＳＤ1709溝跡

調査区西端部で発見した東西溝跡である。規模は長さ3.7ｍ以上、上幅0.2 ～ 0.6ｍ、下幅0.1 ～ 0.25ｍ、深さ10 ～ 20㎝である。底面は丸底気味で、壁はやや開きながら立ち上がる。埋土はＳＤ1707溝跡に近似する黒褐色粘質土ブロックを含むにぶい黄褐色砂である。

遺物は土師器甕（Ｂ類）、須恵器甕の破片が出土している。

【Ｖ2層上面検出遺構】

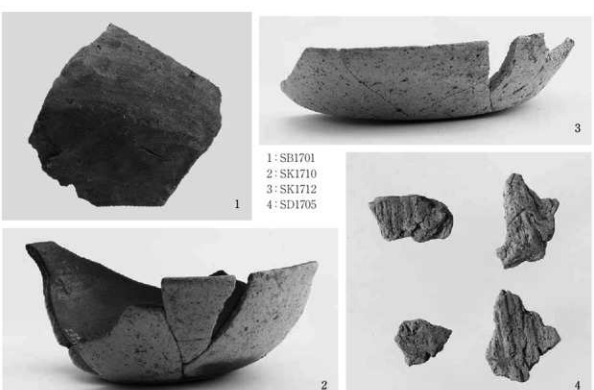
ＳＡ1703材木塀跡

調査区東端部で発見した南北方向の塀跡である。本来の検出面はⅣ層上面と推定される。確認できた長さは約5.45ｍで、方向や位置関係から第101次調査区で検出した塀跡と同一とみられる。ＳＤ1705、柱穴と重複しており、前者よりも新しく、後者よりも古い。方向は北で約3度東に偏している。掘方の規模は、上幅0.2 ～ 0.35ｍ、下幅0.05 ～ 0.15ｍ、深さ30㎝である。断面形はＵ字形を呈する。柱痕跡は径10 ～ 20㎝の円形もしくは楕円形で、柱間隔は密着しているところもあるが、20㎝と幅広のところもある。埋土はＶ層ブロックを含む黄灰色土で、柱痕跡は黒褐色粘質土である。

遺物は土師器杯（ＢⅠ・ＢⅤ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅴ類）の破片が出土している。

Ⅳ層出土遺物

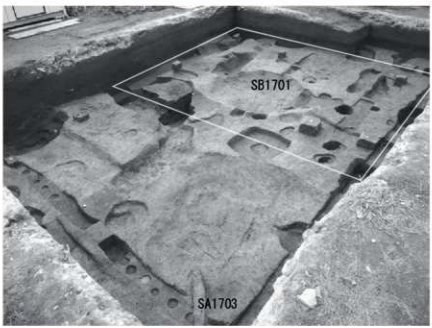
遺物は土師器杯（Ａ・ＢⅤ類）高台付杯・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅰ・Ⅱｂ・Ⅲ・Ⅴ類）・高台付杯・蓋・甕、灰釉陶器、丸瓦（Ⅱ類）、平瓦の破片が出土している。



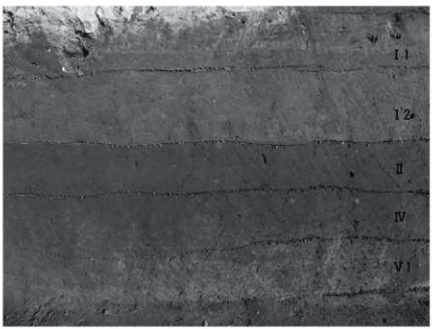
写真図版1

※本章の考察については、山王遺跡第100次・111次調査と合わせて、「山王遺跡第118次調査」でまとめて行った。

調査区全景（南東より）



調査区全景（北東より）



調査区北壁層序

写真図版2

SA1703材木塀検出状況（南より）

SA1703材木塀北半部半截状況（南西より）

SA1703材木塀南半部半截状況（南西より）

XVI　山王遺跡第118次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。平成24年8月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画は、基礎工事の際に直径約60cm、長さ5mの柱状改良杭42本を打ち込むものであった。本対象地区は、事前に確認調査を実施しており（第100次調査）、現表土下約80cmで古代の遺構が検出されていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、10月12日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

第1図　調査区位置図

調査は10月19日より開始し、重機を使用して現代の盛土、表土の除去を行ったところ、現地表面から約70 ～ 80cmの深さで遺構検出面（第Ⅲ層）に到達した。その際、調査区北西側と南西側に大規模な攪乱が入っていることも判明した。24日より作業員を動員して検出作業を開始するが、この攪乱埋土の除去に3日ほどかかった（～ 26日）。27日には北半部で北1東西道路跡の南側溝、南半で土壙が発見された。以後、重複関係の新しい順に埋土を掘り下げながら各遺構の平面・断面図作成と写真撮影を行った。これらの作業が終了したのは11月15日で、同日、調査区の全景写真撮影も行った。16日からはⅢ層を除去しⅣ層上面で遺構検出作業を開始した。この面では南北方向の溝跡と土壙を発見した。21日にはこれらの調査が終了し、翌日に器材の撤収、27日に埋め戻しを行って、現地調査の一切を完了した。

2　調査成果

（1）層　序

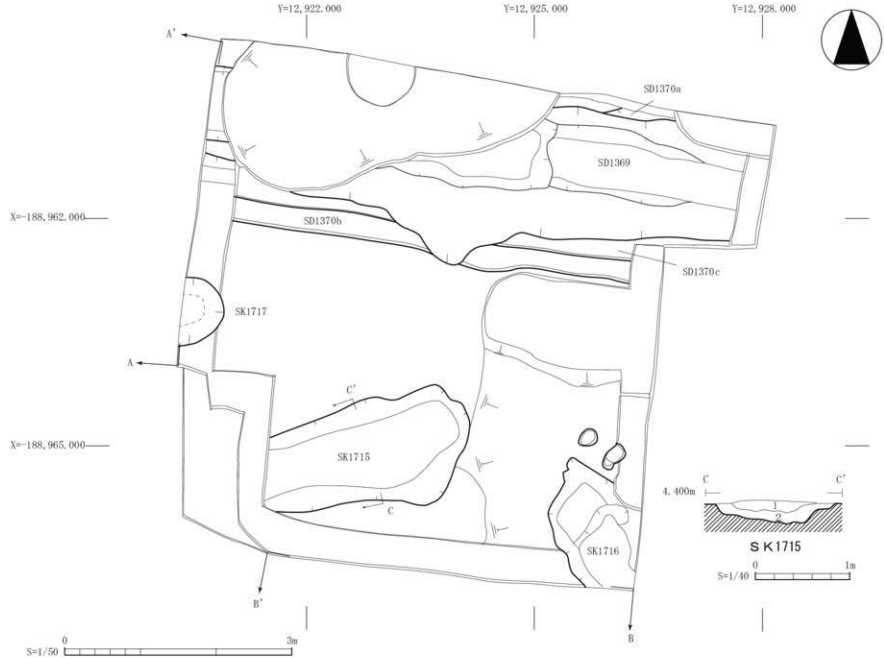
今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

Ⅰ層：現代の表土・盛土層で、厚さは0.6mである。

Ⅱ層：褐色土で、厚さは30cm未満である。北1東西道路跡の南側溝を直接覆う土層である。

Ⅲ層：黄褐色土で、厚さは10 ～ 20cmである。古代の遺構検出面で遺物を包含する。

Ⅳ層：均質な浅黄色土である。本地区周辺での基盤層（地山）であり、古墳時代前期末～中期初頭の河川跡埋土でもある。古代の遺構検出面。



第2図　Ⅲ層上面検出遺構平面・断面図

（2） 発見遺構と遺物

【Ⅲ層上面検出遺構】

ＳＸ1408北1東西道路跡

調査区北半部で発見したＳＸ1408東西道路跡の南側溝（SD1730）である。本遺構は第100次・111次調査でも発見している。ＳＤ1369と重複しておりそれより古い。長さ約6ｍまで検出し、東西とも調査区外に延びている。新旧関係から3時期の変遷（Ａ～Ｃ期）があることを確認した。

Ａ期：南側溝（ＳＤ1370a）を確認した。北壁の一部を確認したのみで、大半がＣ期に壊されているため全体の規模や方向は不明である。深さは21 ～ 30㎝である。埋土はⅣ層ブロック主体の浅黄橙色土である。

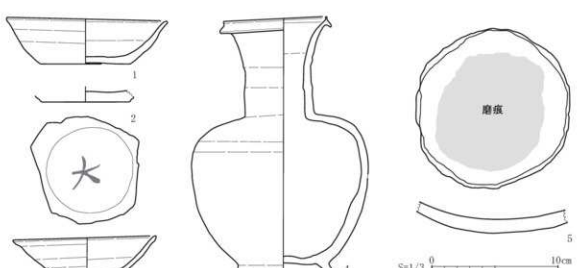
遺物は土師器杯（ＢⅠ類）・甕（Ｂ類）、須恵器甕が出土している。

Ｂ期：南側溝（ＳＤ1370b）の底面と南壁を確認した。北壁はＣ期に壊されている。規模は上幅1ｍ以上、下幅0.2 ～ 0.3ｍ、深さは60㎝である。壁は直線的に開きながら立ち上がるが、中位付近で段が形成されている。埋土は2層に分けられ（西壁断面）、9層が灰白色火山灰粒を含む褐灰色土、10層が黄褐色砂質土である。

遺物は土師器鉢（Ａ類）・杯（Ｂ類）・甕、須恵器甕、丸瓦（Ⅱ類）が出土している。

Ｃ期：南側溝（ＳＤ1370c）の底面と南壁を確認した。北壁は調査区外へと延びている。規模は上幅2ｍ以上、下幅0.7 ～ 1.1ｍ、深さは70㎝である。壁の中位付近には段が付く。埋土は2層に分けられ、7層が褐灰色土、8層がにぶい黄褐色土である。

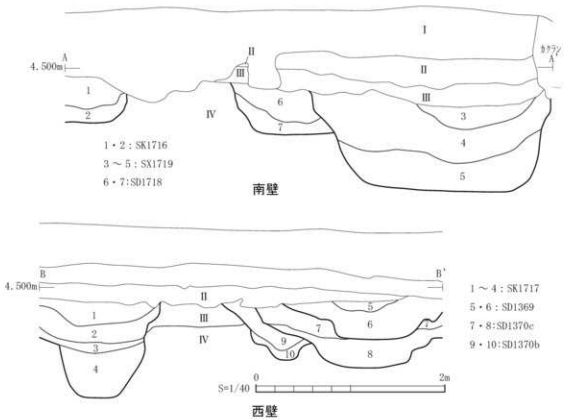
遺物は土師器杯（Ａ・ＢⅤ類）・甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器杯（Ⅲ類）・瓶・甕、須恵系土器小型坏・高台付坏・台付鉢、丸瓦（ⅡＢ類）、平瓦（ⅡＢ・ⅡＣ類）、墨書土器が出土している。



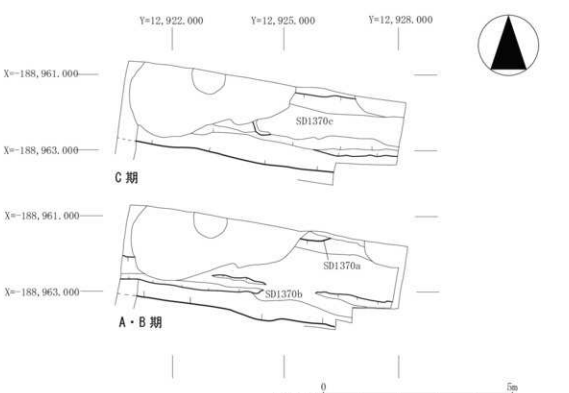
単位（cm）

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	須恵器・杯	SD1370c	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	13.6 20/24	7.0 20/24	3.5	3-1	R2	
2	須恵器・杯	SD1370c	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	–	(6.9) 24/24	–	3-2	R4	底面に墨書有り【大】
3	須恵系土器・杯	SD1370c	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	11.2 14/24	3.9 24/24	3.7	3-3	R8	
4	須恵器 長頸瓶	SD1370c	ロクロナデ	ロクロナデ	(8.1) 24/24	(8.1) 24/24	20.3	3-4	R7	
5	転用硯	SD1369 埋土	タタキ		(8.) 12.7	(幅) 12.1	(厚) 1.1	3-5	R1	須恵器甕破片転用

第3図　ＳＤ1370・1369溝跡出土遺物



第4図　調査区南・西壁断面図



第5図　ＳＸ1408東西道路跡南側溝（SD1370）変遷図

ＳＤ1369溝跡

調査区北端部で発見した東西溝跡である。本遺構は第100次・111次調査でも発見している。ＳＤ1730溝跡と重複しておりそれよりも新しい。方向は道路側溝にほぼ並行する。規模は長さ7.4ｍ以上、上幅1.7ｍ以上、下幅0.5～0.8ｍ、深さ40㎝である。壁は下位付近に段が認められ緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられ（西壁断面）、5層が灰黄褐色土で、6層が下位に粗砂のブロックを含む黒色粘土である。

遺物は土師器杯（Ｂ類）・高台付杯・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅰ類）・瓶・甕、須恵系土器杯、丸瓦（ⅡＢ類）・平瓦（ⅡＢ類）、転用硯が出土している。

ＳＫ1715土壙

調査区南半部で発見した。平面形は東西方向に長い不整形で、規模は長軸2.8ｍ以上、短軸1～1.5ｍ、深さ15～30㎝である。底面は凹凸があり、断面形は皿状を呈する。埋土は2層に分けられ、1層は灰白色火山灰粒を含むにぶい赤褐色土、2層は黄褐色土ブロックが混じるにぶい赤褐色土である。

遺物は土師器杯（Ａ・Ｂ類）、甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器杯・高台付杯・瓶が出土している。

ＳＫ1716土壙

調査区南東隅で発見した。平面形は北西方向に長い不整形で、規模は長軸1.9ｍ以上、短軸1ｍ、深さ22～50㎝である。底面は北西から南東に傾斜している。底面は平坦で、壁は内湾しながら立ち上がる。埋土は2層に分けられ（西壁断面）、1層はⅣ層小ブロックを少量含むにぶい褐灰色土、2層はⅣ層ブロックを下位に多量に含む灰白色土である。

遺物は土師器杯（Ａ・ＢＶ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅲ類）・瓶・甕、丸瓦（ⅡＢ類）が出土している。

ＳＫ1717土壙

調査区西端部で発見した。平面形は調査区外へと延びるため不明である。規模は東西0.5ｍ以上、南北1.3ｍ以上、深さ1ｍ以上である。壁は急傾斜で立ち上がるが、南側の上位は緩やかである。埋土は4層に分けられ（西壁断面）、1層はにぶい橙色土の小ブロックを少量含むにぶい褐色土、2層は明黄褐色土の小ブロックを少量含む灰黄褐色土、3層は均質な褐灰色粘土、4層はⅣ層の小ブロックを含む青黒色粘土である。

遺物は土師器甕、須恵器杯・瓶が出土している。

【Ⅳ層上面検出遺構】

ＳＤ1718溝跡

調査区中央部で発見した南北溝跡である。ＳＫ1719と重複しておりそれよりも古い。規模は長さ5.2ｍ以上、上幅1.5～1.6ｍ、下幅0.9～1.1ｍ、深さ35～50㎝である。埋土は3層に分けられ（第6図）、1層が褐灰色土と互層になる暗灰黄色砂質土、2層がオリーブ灰色粘土、3層がⅣ層ブロックの隙間に灰色砂が入り込むオリーブ灰色土である。

遺物は土師器杯（Ａ類）・甕（Ａ類）が出土している。

ＳＸ1719

調査区南西隅付近で発見した。ＳＤ1718と重複しておりそれよりも新しい。平面形は調査区外へと延びるため不明である。規模は東西2.25ｍ以上、南北0.8ｍ以上、深さ1ｍである。底面はほぼ平坦で、壁は西側がほぼ垂直に立ち上がるが、東側は開き気味である。埋土は3層に分けられ（西壁断面）、3層が褐灰色砂質土、4・5層がⅣ層ブロックを多量に含む灰色粘質土で、5層には植物遺存体も含む。

遺物は土師器杯・甕（Ａ類）、須恵器瓶が出土している。

第6図　Ⅳ層上面検出遺構平面・断面図

Ⅲ層出土遺物

土師器杯（A・BⅡ類）・蓋、甕（A・B類）　須恵器杯（Ⅰ・Ⅲ類）・甕、丸瓦（ⅡB類）・平瓦（ⅡA類）が出土している。なお、破片のため図示できないが、土師器甕（B類）には、体部上半にロクロ調整前の平行タタキ目が観察されるものがある。

3　考　察

第100・111・117・118次調査区はいずれも近接地であり、かつ層序や発見遺構に共通性があることから、ここでまとめて遺構の年代、性格等について検討する。

基盤層の直上に堆積し古代の遺構検出面となっている黄褐色土や暗褐色土は、［第100次：Ⅳ層］・［第111次：Ⅲ層］・［第117次：Ⅳ層］・［第118次：Ⅲ層］として把握された。この堆積層（以後、A層と呼ぶ）は、検出遺構の上限年代を示すこととなるのではじめに検討しておく。まず、A層上面はＳＸ1408東西道路跡の北側溝（ＳＤ1731）・南側溝（ＳＤ1730）の検出面となっている。この道路跡の構築年代は、第66・68次調査の成果から9世紀後半としている。したがって、A層の堆積した年代はそれ以前とすることができる。

次にA層から出土した土器についてみてみると、土師器杯（A・BⅠ・BⅡ・BⅤ類）、甕（A・B類）、須恵器杯（Ⅰ・Ⅱａ・Ⅲ・Ⅴ類）・双耳杯、丸瓦（ⅡB類）・平瓦（ⅡA類）が出土している。土師器杯と須恵器杯の構成からは、土師器杯（BⅤ類）、須恵器杯（Ⅴ類）が主体となる9世紀第3四半期よりは古い様相を呈する。加えて、土師器甕（B類）には、ロクロ調整前の平行タタキ目が観察されるものがある。この特徴を有する土器は、多賀城周辺では8世紀末～9世紀中葉の時期に盛行するもので、それ以降は激減する。さらに、須恵器双耳杯は、村田晃一氏の集成によれば、宮城県内では8世紀後半～9世紀中頃の時期に集中して確認できるという（村田1996）。また、地山（基盤層）検出のＳＤ1709溝跡からは小破片ではあるがロクロ調整の土師器杯・甕（B類）が出土しているので、A層は8世紀まではさかのぼらないとみられる。これらのことから、A層の堆積年代は9世紀前半頃と考えられ、A層上面検出の遺構は9世紀前半かそれ以降の時期となる。

次に各遺構の年代について考察する。

ＳＤ1369溝跡は、道路廃絶後にほぼ南側溝に沿うように掘られた溝で、第66・68次調査分まで含めると長さ約63ｍにわたり確認した。出土遺物からみても10世紀後葉以降の古代の範疇に収まる。

ＳＤ1695溝跡は、9世紀中葉を下限としたＳＸ1698よりも新しく、土師器杯（B類）、須恵器杯（Ⅴ類）が出土していることから9世紀後半と考えられる。

ＳＤ1696溝跡は、ＳＫ1697よりも新しく、須恵器杯（Ⅲ類）のみで構成されていることから9世紀前半～中葉と考えられる。

ＳＫ1697土壙は、土師器杯（BⅡ類）、須恵器杯（Ⅲ類）で構成されていることから9世紀前半代と考えられる。

ＳＸ1698は、ＳＸ1408北1東西道路跡南側溝（ＳＤ1730）よりも古く、出土土器の中に土師器甕（B類：タタキ痕あり）が含まれているので、9世紀前半～中葉としておく。

ＳＢ1701掘立柱建物跡、ＳＡ1702柱列跡は、直接重複関係はないもののＳＫ1712を介して前者が後者よりも新しいことが判明している。しかし、出土土器が土師器杯（A・B類）、須恵器杯（Ⅱ・Ⅲ類）と類似した構成をとることから9世紀前半代における変遷と考えておく。

ＳＡ1703材木塀跡は、土師器杯（ＢＶ類）、須恵器杯（Ｖ類）が出土していることから9世紀後半代と考えられる。

ＳＤ1673（1706）溝跡は、灰白色火山灰を含むⅢ層におおわれ、ＳＢ1701より古い。土師器杯・甕（Ｂ類）が出土していることも勘案すると、9世紀前半代とみられる。

ＳＤ1709溝跡は、Ａ層におおわれ基盤層（地山）で検出された。細片であるが土師器杯・甕（Ｂ類）が出土していることから8世紀後葉～9世紀前半と考えられる。

ＳＫ1710土壙は、ＳＢ1701よりも新しく、土師器杯がＢＶ類のみで構成され、かつ須恵系土器を含まないことから9世紀後半代と考えられる。

ＳＫ1715土壙は、埋土1層に灰白色火山灰粒を含むことから10世紀前葉前後の時期とみられる。

ＳＫ1716土壙は、土師器杯（Ａ・Ｂ類）、須恵器杯（Ⅲ類）で構成されていることから9世紀前半代と考えられる。

ＳＤ1718溝跡、ＳＸ1719は、Ａ層におおわれ、基盤層（地山）で検出された。いずれからも非ロクロ調整の土師器杯・甕（Ａ類）が出土していることから8世紀代とみられる。

ＳＸ1408北1東西道路跡は、第100次調査区で北側溝（ＳＤ1731）・南側溝（ＳＤ1730）を発見し、第111・118次調査区で南側溝のみを確認した。南側溝は第66・68次調査分まで含めると長さ約63ｍにわたり確認した。方向は東で約8度南に偏しており、東西大路と並行して造られていることが明らかとなった。道路跡の変遷は、第66・68次調査では4時期を確認しているが、今回の各調査区では最古段階のＡ期は検出できなかった。南側溝の時期別対応関係は第1表のとおりである。各段階の年代観は、第66・68次調査での灰白色火山灰の混入の有無、あるいは側溝出土土器の様相と比較して各調査区とも矛盾なく整合していた。

第1表

	第66・68次	第111次	第117次	第118次
9世紀後半	Ａ期	－	－	－
～	Ｂ期	Ａ期	－	Ａ期
10世紀前葉	Ｃ期	Ｂ期	Ａ期	Ｂ期
10世紀後葉	Ｄ期	Ｃ期	Ｂ期	Ｃ期

今回の調査成果で特筆すべき点は、東西方向のＳＡ1720材木塀（註）とそれに接続する南北方向のＳＡ1703材木塀の発見であろう。この区域は北2西8区に位置しており、東西約120～130ｍ、南北約90ｍの広さが想定される区画である。第66・68次調査地はＳＸ1408北1東西道路に面した南東隅にあたり、材木塀で区画される宅地内分割の大きさは、南北約30ｍ、東西約50ｍ（区画Ⅰ）である（第7図）。北2西8区全体では、南北約1/3の敷地を東西にほぼ2分割しており、一町四方の区画の約1/6を占有していることになる（第8図）。ＳＡ1720材木塀の方向は、東で約5度南に偏し、ＳＡ1703材木塀は、北で約3度東に偏している。前者の方位は北2東西道路（東で2～3度南に偏する）と北1東西道路のほぼ中間値であることは示唆的である。後者の方位は南北道路（小路）の方向（北で1～4度東に偏する）とほぼ同じである。

ここで、方格地割内における材木塀による宅地内区画施設が発見されている事例をみてみると、これまでのところ多賀前地区の北1西3区のみである。この区画は東西大路の北に面しており、建物の構成や高

（註）この材木塀跡は、第101次調査で確認されているものであるが、詳細については、別途報告する予定である。

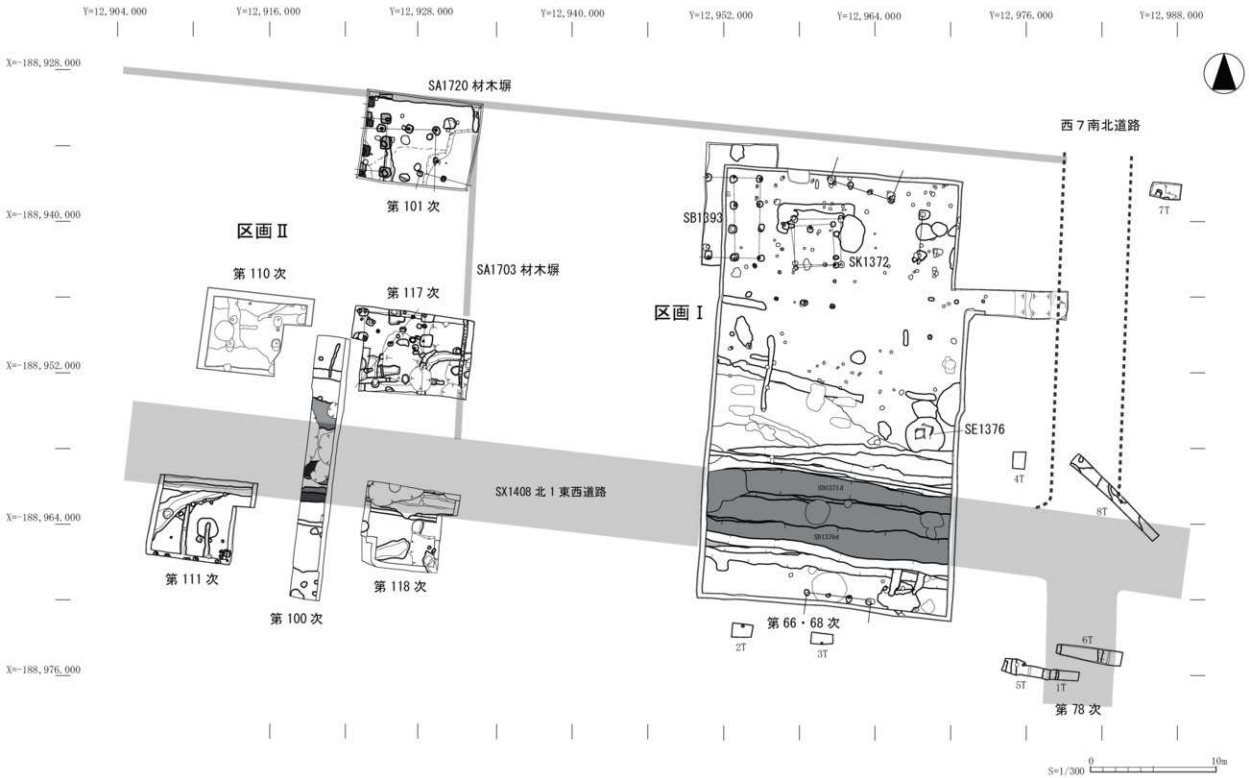
級陶磁器が多数出土していることから国司館と考えられている。この区画は南北124m、東西109mの大きさで、一町四方の区画内は東西方向の2条の材木塀によって東西長い3つの小区画に分けられている。その規模は北から「区画①：南北約30m、東西約110m」、「区画②：南北約30m、東西約110m」、「区画③：南北約50m、東西約110m」となり、東西大路に面した区画③のみがやや面積が大きい。ここでは、区画①・②の南北の距離が約30mと区画Ⅰとほぼ同じ数値を示していることに注目しておきたい。

さて、区画Ⅰでは第66・68次調査区がほぼ敷地の中央に位置していることになる。遺構の配置は、敷地の中央の奥まったところに南北3間、東西3間以上の東に庇が付いた掘立柱建物（ＳＢ1393）が位置し、南半は空閑地となっている。南東隅の道路際には井戸（ＳＥ1376）が造られている。注目されるのは、掘立柱建物の東側に隣接して廃棄土壙（ＳＫ1372）が掘られており、ここから漆紙文書（蓋紙）と漆付着土器が出土している。よって、この区画内には、漆工房やその工人の居宅が存在していたと想定されるのである。方格地割内での調査において、工房や工人の居宅については、それを特色付ける遺物の出土からある程度想定されてきたが、具体的に特定された事例はなかった。今回の調査でその宅地割の規模や街区の特定がなされた意義は大きい。一方、区画ⅡはＡ層が残存していることも勘案する必要もあるが、遺構の密度が高く、建物が重複して建てられているなどの相違が認められる。この場の使われ方の相違はいかなる理由で生じたものなのか、今後の課題としたい。

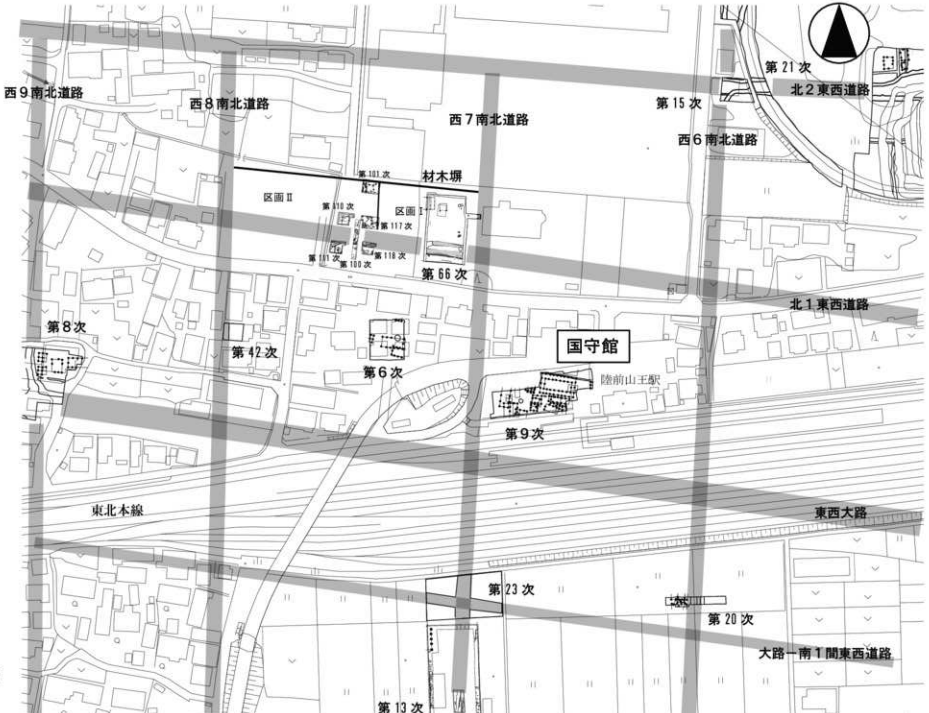
本北2西8区の南東に位置する北1西7区は、国守館に比定されている。ここでの場の使われ方は、「9世紀前半以前が耕作域」、「9世紀後半が居住域として整備される時期」、「10世紀前半が国守館の存続時期」、「10世紀中頃が小規模な建物で構成される時期」と変遷している。9世紀後半期は前述のとおり北1東西道路が構築される時期でもある。

方格地割の変遷は、これまでの調査成果をもとにⅠ～Ⅳ期の4段階に区分する案が提示されている（鈴木2010、武田2010）。Ⅰ期は南北・東西大路が造られる時期で、8世紀後葉頃とされている。Ⅱ期は方格地割が形成されていく時期で、小路はこの時期からⅢ期にかけて段階的に整備されていく。9世紀初頭～9世紀中葉までの時期。Ⅲ期は方格地割が最も拡大した時期である。9世紀中葉～10世紀前葉（灰白色火山灰降下［907年～934年］）の時期。Ⅳ期はほぼ前段階の地割を踏襲するが、地割の縁辺部には維持されず廃絶しているところもある。10世紀前葉～10世紀後葉までの時期。

この時期区分において画期となるのは、道路網の再編（拡大）事業が行われたⅢ期である。この時期には、Ⅱ期に形成された方格地割の南北への拡大にともない階層による宅地割が行なわれたとされている。Ⅲ期の開始は、多賀城政庁第Ⅳ期との対応関係が示されており（鈴木2010、武田2010）、陸奥国大震災後の復興事業が多賀城とその城下においても進められたと考えられる。そして、おそらくこの段階において、少なくとも西7南北道路以西の地区に方格地割が施工されたものとみられる。



第7図　第118次調査区と周辺調査区の位置関係図



第8図　国守館の位置と周辺の方格地割

引用・参考文献

多賀城市教育委員会『山王遺跡－第9次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第26集　1990
多賀城市教育委員会『山王千刈田遺跡―関連調査報告書－』　多賀城市文化財調査報告書第34集
多賀城市教育委員会『山王遺跡Ⅰ－仙塩道路建設に係る発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第45集　1997
多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅰ－』多賀城市文化財調査報告書第60集
多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』多賀城市文化財調査報告書第67集　2003
多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅲ－』多賀城市文化財調査報告書第75集　2004
多賀城市教育委員会『山王遺跡－第66・68次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第100集　2010
宮城県教育委員会『山王遺跡八幡地区の調査－県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅰ－』宮城県文化財調査報告書第162集　1994
宮城県教育委員会『山王遺跡Ⅴ－第一分冊〈八幡地区〉－』『山王遺跡Ⅴ－第2分冊〈伏石地区・考察〉－』宮城県文化財調査報告書第174集　宮城県教育委員会　1997
宮城県教育委員会『山王遺跡Ⅱ－多賀前地区遺構編－』宮城県文化財調査報告書第167集　1995
宮城県教育委員会『山王遺跡Ⅲ－多賀前地区遺物編－』宮城県文化財調査報告書第170集　1996a
宮城県教育委員会『山王遺跡Ⅳ－多賀前地区考察編－』宮城県文化財調査報告書第171集　1996b
宮城県教育委員会『山王遺跡町地区の調査－県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅱ－』宮城県文化財調査報告書第175集　1998
宮城県教育委員会『市川橋遺跡の調査　県道「泉～塩釜線」関連調査報告書Ⅶ』宮城県文化財調査報告書第218集　2009
宮城県多賀城跡調査研究所「Ⅲ．現状変更に伴う調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1994　多賀城跡』　1995
宮城県多賀城跡調査研究所『第60・61次調査』『宮城県多情跡調査研究所年報1991多賀城跡』　1992
宮城県多賀城跡調査研究所『第62・63次調査』『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992　多賀城跡』　1993
宮城県多賀城跡調査研究所『第68次調査』『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997　多賀城跡』　1998
吾妻俊典「多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及開始年代」『宮城考古学』第6号　宮城県考古学会　2004
鈴木孝行「多賀城外の方格地割」第32回古代城柵官衙遺跡検討会資料集　2004
鈴木孝行「多賀城方格地割の調査」『特集　多賀城発掘50年』考古学ジャーナル　No.604　2010
武田健市「多賀城と城下の木簡出土遺構」『古代東北の城柵と木簡』木簡学会多賀城特別研究集会資料集　2010
村田晃一「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』　1994
村田晃一「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号　1995
村田晃一「宮城県における双耳杯の分布」『窯研通信』第7号　1996
村田晃一「東北・北海道における6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係－宮城県中部から南部－」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部　2007

調査区全景（南東より）

調査区全景（北東より）

ＳＤ 1369・1370 溝跡土層断面
（東より）

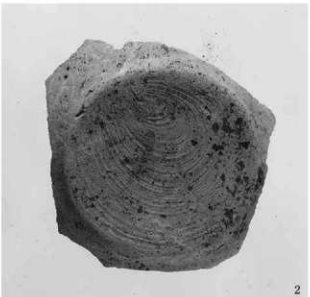
SD1369溝跡完掘状況（東より）

SD1370a・b溝跡完掘状況（東より）

SD1370c溝跡完掘状況（東より）

SD1718溝跡完掘状況（南より）

写真図版2



1～4：SD1370c　5：SD1369

写真図版3

ⅩⅦ　山王遺跡第120次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅新築工事に伴う発掘調査である。平成24年9月26日に地権者より当該地における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、対象地に20㎝の盛土を行い、住宅部の基礎工事では一辺20㎝、長さ7.5ｍのH型コンクリートパイルを34本打ち込み、給排水工事では盛土面から深さ40㎝、排水管布設工事では盛土面から深さ45～65㎝の掘削を行うものであった。本調査区の宅地造成に伴う第94次調査（本書「Ⅳ　山王遺跡第94次調査」に収録）の成果から、遺構面までは現地表から約40㎝の深さと考えられたことから、本計画による埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、遺跡保存の協議を行ったものの、基礎工法の変更は不可能であるとの結論に達したことから、本発掘調査を行うこととなった。平成24年11月7日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、現地調査を開始した。

第1図　調査区位置図

第2図　調査区配置図

11月15日に重機による掘削を開始し、表土（Ⅰ層）を除去したところ、約60㎝の深さで北半に暗褐色土層（Ⅱ層）と南半に黒褐色粘質土層（Ⅲ層）を確認し、それぞれの上面から掘り込む遺構を検出したため、これらの層の上面から遺構精査を始めた。11月22日にⅡ層とⅢ層上面検出遺構の全景写真撮影を行い、遺構の掘り下げと平面・断面図の作成を行った。その後、Ⅱ層を掘り下げ、その下層にⅢ層検出遺構がないことを確認し、12月7日にⅢ層上面検出遺構の完掘状況写真撮影を行った。同日、Ⅲ層を掘り

下げ、約10～15cmの深さで黄褐色粘質土層（Ⅳ層）を確認し、その上面から掘り込む遺構を検出した。12月14日にⅣ層上面検出遺構の全景写真撮影を行い、遺構の掘り下げと平面・断面図の作成を行った。12月22日にⅣ層上面検出遺構の完掘状況写真撮影を行い、同日Ⅳ層を掘り下げ、約10cmの深さでにぶい黄褐色粘質土層（Ⅴ層）を確認した。Ⅴ層上面では遺構が検出されなかったのでさらに掘り下げ、Ⅸ層上面にて水田の畦畔を検出した。12月27日に全景写真撮影を行った後、平面図を作成した。平成25年1月9日からは調査区壁面の断面図を作成し、1月12日に全ての機材を撤収して調査を終了した。

2　調査成果

（1）層　序

今回の調査で確認した層序は以下のとおりである。

Ⅰ1層：宅地造成時の盛土で、厚さは45cmである。

Ⅰ2層：現代の旧耕作土で、厚さは5～32cmである。

Ⅱ層：調査区の北東側と北西側に堆積する暗褐色土で、厚さは3～17cmである。褐色土をブロック状に含む。中世の遺構検出面と考えられる。

Ⅲ層：調査区全体に堆積する黒褐色粘質土で、厚さは3～15cmである。黄褐色・赤褐色・褐色・黒色土をブロック状に多く含む。古代～中世の遺構検出面と考えられる。

Ⅳ層：調査区全体に堆積する黄褐色粘質土で、厚さは4～12cmである。黄褐色・赤褐色・暗褐色土をブロック状に多量に混入する。古代の遺構検出面であり、本調査区における基盤層である。

Ⅴ層：明褐色・暗褐色土をブロック状に少量含むにぶい黄褐色粘質土で、厚さは5～17cmである。

Ⅵ層：褐色砂質土で、厚さは5～24cmである。この層の下部は、上部に比べて白みが強い。

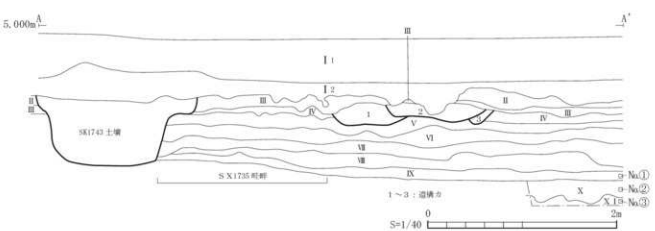
Ⅶ層：褐色砂質土で、厚さは8～29cmである。

Ⅷ層：にぶい黄褐色砂質土で、厚さは5～20cmである。

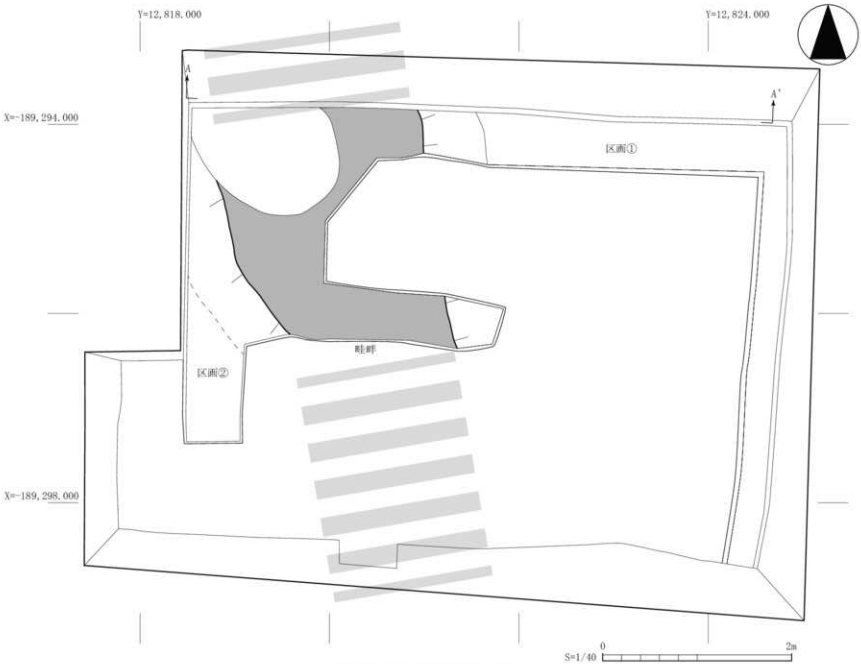
Ⅸ層：明黄褐色粘質土で、厚さは5～13cmである。

Ⅹ層：調査区全体に堆積する黒褐色粘質土で、厚さは25cm程である。ⅩⅠ層との層境には凹凸がある。古墳時代の水田層である。

ⅩⅠ層：深掘り地点のみで確認したにぶい褐色砂質土層である。



第3図　調査区北壁断面図



第4図　ＳＸ1735水田跡平面図

（2） 発見遺構と遺物

今回の調査では、X層で古墳時代の水田跡、Ⅳ層上面で古代の掘立柱建物跡・柱穴・溝跡、Ⅲ層上面で古代～中世の柱穴・土壙、Ⅱ層上面で中世の土壙を発見した。

【X層検出遺構】

ＳＸ1735水田跡（第4図）

X層が耕作土であり、畦畔1条とこれによって区画される水田2区画（区画①、②）を確認した。調査区の制限により、一区画全体の規模が明らかなものはない。畦畔は、上幅2.2ｍ、下幅は不明であるが区画①の上端と下端の幅が50㎝である。水田面から比高差は20㎝であり、ゆるやかな高まりとなっている。方向は北で約8度西に偏している。

遺物は、区画①の耕作土（X層）中から非ロクロの土師器甕の口縁部の破片が1点出土している。

なお、X層のプラント・オパール密度は3600個／ｇである（附章参照）。

【Ⅳ層上面検出遺構】

ＳＢ1736掘立柱建物跡（第5・6図）

調査区中央で発見した東西2間、南北2間以上の建物跡である。調査区外に延びているため、全容は不明である。6基の柱穴を検出しており、全てで柱痕跡を確認した。また、東側柱列と北側柱列の4基の柱穴では、柱抜取り穴を確認した。ＳＤ1737・1739溝跡と重複し、ＳＤ1739よりも古く、ＳＤ1737よりも新しい。方向は、西側柱列で測ると北で5度31分東に偏している。規模は、西側柱列で総長約4.9ｍ以上、北側柱列で総長3.60ｍである。柱間は、東側柱列で1.76ｍ、北側柱列で東より1.73ｍ、1.87ｍ、西側柱列で北より1.83ｍ、1.72ｍである。柱穴は隅丸方形であり、規模は一辺50 ～ 65㎝、深さは10 ～ 60㎝である。埋土は、褐色もしくは暗褐色土である。柱痕跡は直径15 ～ 22㎝の円形であり、埋土はⅣ層由来の黄褐色土をブロック状に多く含む暗褐色土である。

遺物は、掘方から須恵器甕、柱痕跡から土師器甕、柱抜取り穴から土師器杯（Ｂ類）・甕、須恵器杯（Ⅰ類）・甕・瓶、平瓦の破片が出土している。

ＳＤ1737溝跡（第5・6図）

調査区北側で発見した東西溝跡である。東西とも調査区外に延びているため、全容は不明である。ＳＢ1736掘立柱建物跡、ＳＤ1739溝跡と重複し、いずれよりも古い。方向は東で約34度南に偏している。規模は長さ4.2ｍ以上、幅0.9 ～ 1.1ｍ、深さ14㎝である。底面は平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がっている。埋土は1層がにぶい黄褐色砂質土、2層が褐色砂質土である。遺物は出土していない。

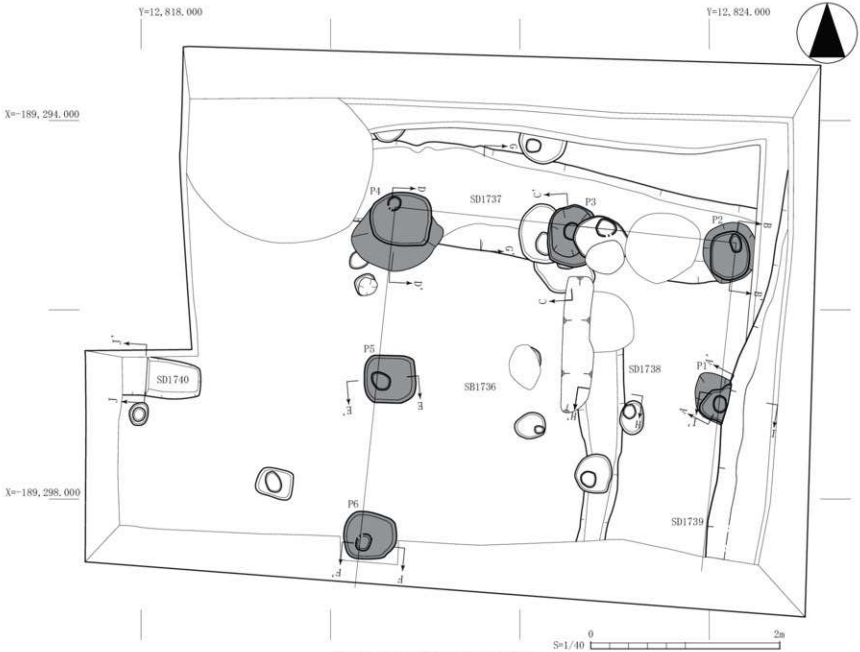
ＳＤ1738溝跡（第5・6・7図）

調査区南東側で発見した南北溝跡である。南側は調査区外に延びているため、全容は不明である。2基の柱穴と重複し、いずれよりも古い。方向は、南側では北で約10度東に偏しているが、北側ではやや西に傾く。規模は長さ約2.1ｍ以上、幅30 ～ 50㎝、深さ16㎝である。底面は平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がっている。埋土は1層が暗褐色粘質土、2層が褐色土である。

遺物は1層から第7図1に示した須恵器杯（Ⅰ類）のほか、土師器甕（Ｂ類）、須恵器甕の破片が出土している。

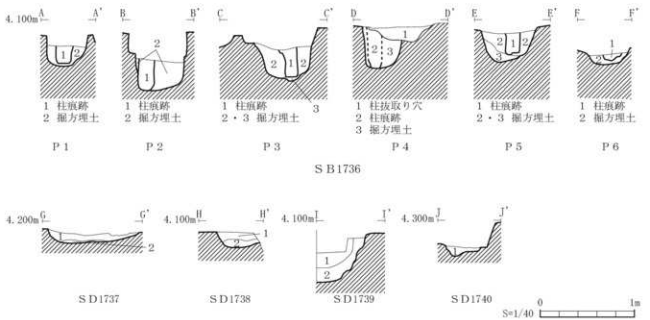
ＳＤ1739溝跡（第5・6・7図）

調査区東端で発見したゆるやかに蛇行する南北溝跡である。西辺を確認したのみであり、全容は不明である。ＳＢ1736掘立柱建物跡、ＳＤ1737溝跡と重複し、いずれよりも新しい。方向は、北で約12度東に偏

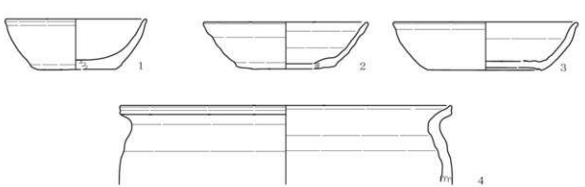


第5図　Ⅳ層上面検出遺構平面図

している。規模は、長さ4.2m以上、幅70cm以上、深さ54cm以上である。底面は平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がっている。埋土は、1層は黒褐色粘質土とにぶい黄褐色砂質土のブロックがほぼ同割合で混入している。2層は黒褐色粘質土と灰オリーブ粘質土が互層に堆積しており、自然堆積と考えられる。



第6図　SB1736掘立柱建物跡、SD1737～1740溝跡断面図



単位(cm)

番号	遺構層位	種類	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	SD1738 埋土	須恵器 杯	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(11.0) 2/24	(6.0) 7/24	4.0		R2	I類
2	SD1739 埋土1層	須恵器 杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.0) 5/24	(7.8) 5/24	5.0		R1	II類
3	SD1739 埋土2層	須恵器 杯	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(14.4) 2/24	(9.2) 3/24	3.8		R8	I類
4	SD1740 埋土	須恵器 甕	ロクロナデ	ロクロナデ	(29.2) 3/24	－	－		R9	

第7図　SD1738・1739・1740溝跡出土遺物

遺物は、1層からは第7図2に示した須恵器杯（Ⅲ類）のほか、土師器杯・甕、須恵器杯（Ⅰ・Ⅴ類）・高台付杯・甕・瓶、2層からは第7図3に示した須恵器杯（Ⅰ類）のほか、土師器杯・甕、須恵器杯（Ⅱ・Ⅲ類）・甕・瓶、平瓦の破片が出土している。

ＳＤ1740溝跡（第5・6・7図）

調査区西端で発見した東西溝跡である。西側は調査区外に延びているため、全容は不明である。方向は東で約39度南に偏している。規模は長さ80cm以上、幅41cm、深さ10cmである。壁はゆるやかに立ち上がっている。埋土は黄褐色土をブロック状に少量含む暗褐色粘質土である。

遺物は、第7図4に示した須恵器甕のほか、土師器杯・甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器杯・甕・瓶の破片が出土している。

【Ⅲ層上面検出遺構】

ＳＫ1741土壙（第8・9図）

調査区南隅で発見した。南側が調査区外に延びているため全容は不明であるが、確認できる限りでは不整円形もしくは不整楕円形と考えられる。規模は、東西78cm、南北56cm以上、深さ6cmである。底面には凹凸があり、壁面は外傾して立ちあがる。埋土は黒色粘質土である。

遺物は、第8図に示した須恵器杯（Ⅲ類）・蓋のほか、土師器杯・甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器杯・甕・瓶の破片が出土している。

ＳＫ1742土壙（第9図）

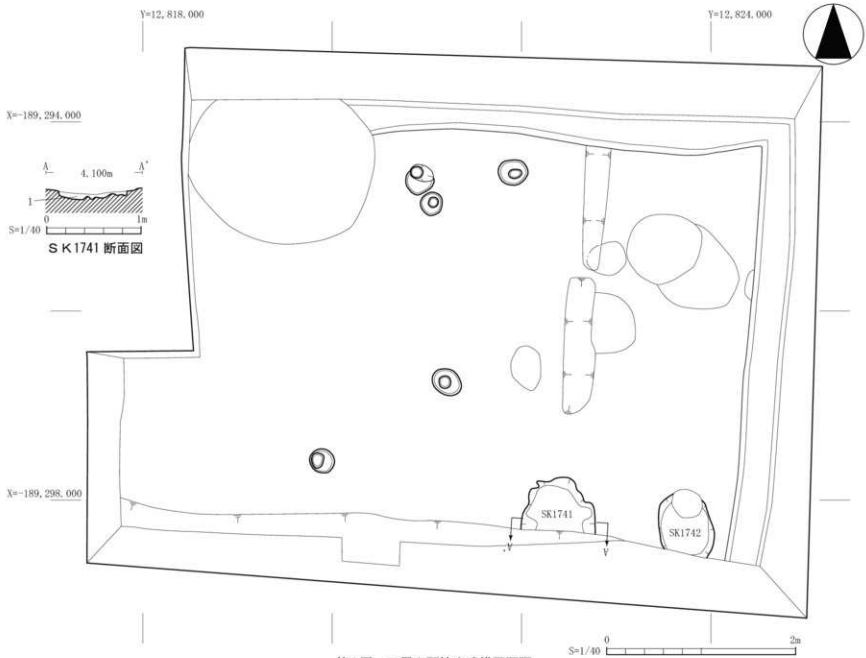
調査区南西隅で発見した。南側が調査区外に延びているため全容は不明であるが、確認できる限りでは楕円形と考えられる。底面は平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がっている。規模は、東西56cm、南北56cm以上である。

遺物は、土師器甕と須恵器杯の破片が出土している。

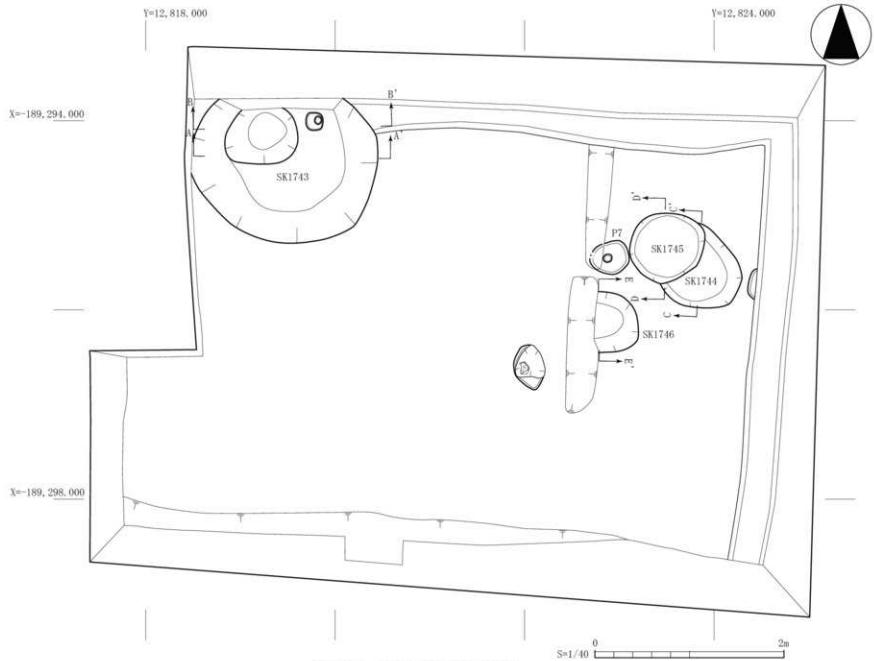
単位（cm）

番号	遺構層位	種類	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	ＳＤ1741 埋土	須恵器 杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(12.8) 4/24	(7.2) 11/24	4.0		R4	Ⅲ類
2	ＳＤ1741 埋土	須恵器 甕	ロクロナデ	ロクロナデ	16.0 16/24	－	4.7	3-1	R10	

第8図　ＳＫ1741土壙出土遺物



第9図　Ⅲ層上面検出遺構平面図



第10図　Ⅱ層上面検出遺構平面図

【Ⅱ層上面検出遺構】

ＳＫ1743土壙（第10・11・12図）

調査区北西側で発見した。北側は調査区外に延びているため、全容は不明である。平面形はやや東西に長い楕円形と推定され、規模は長径2ｍ以上、短径1.5ｍ以上、深さは87cmである。底面は北西隅が楕円形状に一段窪んでおり、壁は内弯ぎみに立ち上がる。埋土は5層に分けられ、1層は黒褐色土、2層はⅣ層由来の黄褐色土と黒褐色土をブロック状に多量に含む暗褐色砂質土、3層は黒色粘質土、4層はにぶい黄褐色土、5層は褐色粗砂である。

遺物は、1層から土師器杯（ＢⅡ類）・甕、須恵器杯（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類）・甕・瓶、須恵系土器、2層からは、第12図1に示した手捏ね土器のほか、土師器杯（ＢⅤ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅰ類）・甕・甌、須恵系土器、平瓦、砥石、3～5層から土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶、須恵系土器、平瓦の破片が出土している。

ＳＫ1744土壙（第10・11図）

調査区東側で発見した。ＳＫ1745土壙と重複し、それよりも古い。平面形は楕円形であり、規模は長軸80cm以上、深さ14cmである。底面は平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がっている。埋土は黒褐色土である。

遺物は、土師器杯・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅰ・Ⅱａ類）・甕の破片が出土している。

ＳＫ1745土壙（第10・11図）

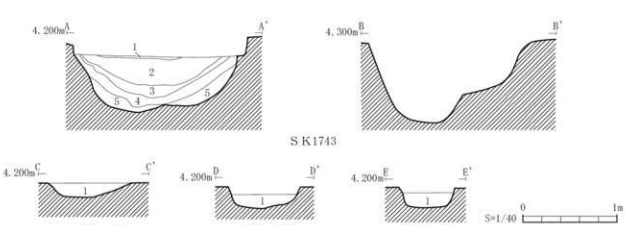
調査区東側で発見した。ＳＫ1744土壙と重複し、それよりも新しい。平面形はおおよそ円形であり、規模は直径約80cm、深さ20cmである。底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がる。埋土はⅣ層由来の黄褐色土をブロック状にやや多く含む黒褐色粘質土である。

遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、須恵系土器、平瓦の破片が出土している。

ＳＫ1746土壙（第10・11図）

調査区東側で発見した土壙である。西側は撹乱によって損壊しているが、円形であったと考えられる。規模は、直径約60cm、深さ22cmである。底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がる。埋土は灰黄褐色粘質土である。

遺物は、土師器甕の破片が出土している。



第11図　ＳＫ1743～1746土壙断面図

単位（cm）

番号	遺構層位	種類	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	ＳＫ1743 検出面	土師器 手捏ね土器	ナデ	ナデ	3.1 24/24	1.1 24/24	3.0	3-2	R7	
2	Ⅱ層	須恵器 杯	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(12.4) 5/24	(7.0) 11/24	4.0		R3	Ⅰ類
3	Ｐ7 柱痕跡	須恵器 杯	ロクロナデ 底部：ヘラケズリ	ロクロナデ	–	(8.4) 4/24	–		R6	Ⅰ or Ⅱ類
4	Ⅱ層	須恵器 杯	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	–	(8.1) 4/24	–		R11	Ⅲ類

第12図　ＳＫ1743土壙、その他遺構及び堆積層出土遺物

堆積層出土遺物（第12図）

Ⅱ層からは土師器杯（ＢⅡ類）・甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器杯（Ⅰａ・Ⅱ・Ⅴ類）・高台付杯・甕・瓶・双耳杯・蓋、平瓦の破片が、Ⅲ層からは土師器杯（Ａ・ＢⅠ・ＢⅤ類）・甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器杯（Ⅰａ・Ⅰｃ・Ⅱ・Ⅲ類）・甕・瓶・双耳杯・蓋、丸瓦・平瓦の破片が出土している。

3　まとめ

ここでは、隣接する山王遺跡第94次と第120次の調査結果をあわせてまとめる。

（1）　層序の対応関係について

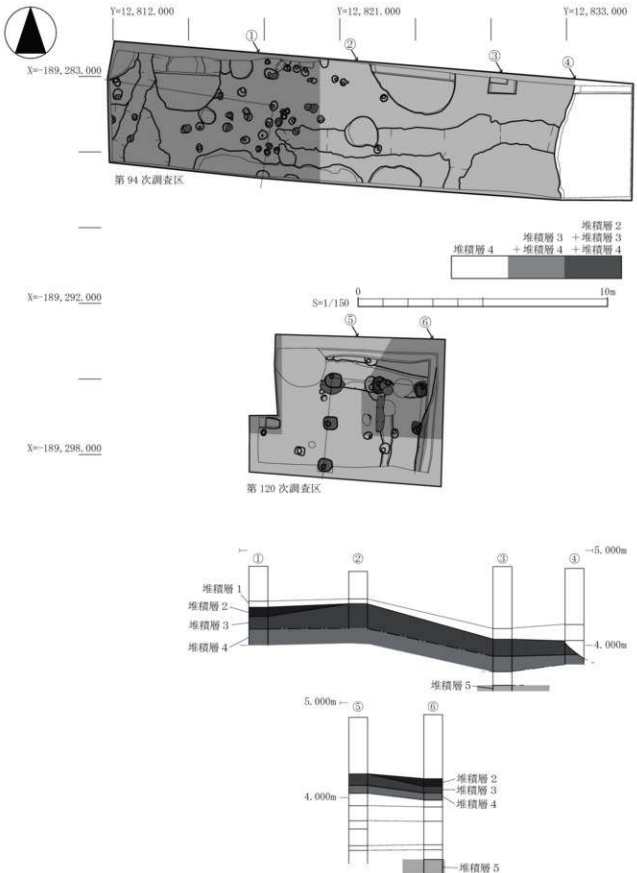
①第94次調査と第120次調査の堆積層の対応関係

第94次調査と第120次調査の両調査で確認された堆積層のうち、遺物が出土した層の対応関係について、以下にまとめる（第13・14図）。

堆積層1：第94次調査のⅡ層であり、第120次調査では発見されていない。暗褐色砂質土層である。陶磁器や土人形が出土していることから、近世から近代にかけての堆積層と考えられる。

堆積層2：第94次調査のⅢ層（黒褐色粘質土層）、第120次調査のⅡ層（暗褐色土層）である。褐色土をブロック状に含む点が共通している。10世紀前葉以降の層であることは明らかである。

第13図　第94・120次調査における層の対応関係



第14図　山王遺跡第94・120次調査における層序の対応関係

堆積層3：第94次調査のⅣ層（黒褐色土層）、第120次調査のⅢ層（黒褐色粘質土層）である。褐色・黄褐色・赤褐色・灰褐色土をブロック状に混入している点が共通している。埋土に灰白色火山灰をブロック状に含むＳＤ1723溝跡（第94次調査）を覆う層であることから、10世紀前葉以降の堆積層と考えられる。

堆積層4：第94次調査のⅤ層（褐色砂質土層）、第120次調査のⅣ層（黄褐色粘質土層）である。暗褐色や黄褐色土をブロック状に多量に含む点が共通している。第94・120次調査の基盤層で、古代の遺構検出面である。

堆積層5：第94次調査のⅦ層（黒褐色粘質土）、第120次調査のⅩ層（黒褐色粘質土）である。第120次調査の成果により、水田層と考えられる。

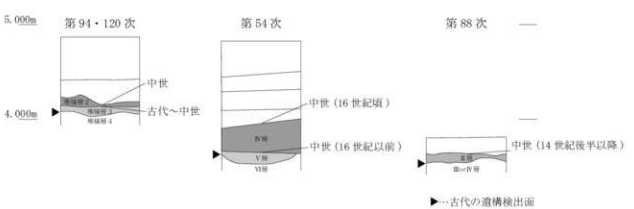
②周辺の調査における堆積層の年代

これまでの周辺の調査では、古代の最終遺構検出面（本調査における堆積層4に該当）の上層に複数の堆積層が確認されている。その中でも、今回の調査と同様に、埋土に灰白色火山灰を含む遺構を覆う堆積層がある（第15図）。

第54次調査では、古代の遺構検出面（Ⅵ層：にぶい黄橙色砂質土）の上面でＳＸ1150西7南北道路跡が発見され、Ｂ期側溝の埋土上層で灰白色火山灰の二次堆積が確認されている。その遺構を覆い、Ⅳ層（黒褐色粘質土）とⅤ層（にぶい黄橙色砂質土が小ブロック状に混入する黒褐色粘質土）が堆積し、それぞれ上面から16世紀以前の中世、16世紀頃の遺構が発見されている（多賀城市教育委員会2006）。

第88次調査では、古代の遺構検出面であるⅢ層（にぶい黄褐色砂質土）から古代の遺構が発見されており、小溝Ｃ群は埋土に灰白色火山灰が混入している。その上面にはⅡ層（褐灰色砂質土）が堆積し、Ⅱ層上面は、14世紀後半以降の区画溝などの中世の遺構検出面となっている（多賀城市教育委員会2012）。

第94・120次調査の堆積層2・3は、いずれも10世紀前葉以降の時期のものであり、2枚の堆積層を確認できている点は、第54次調査における層序の状況と類似する。こうした類似点から、堆積層3と第54次調査のⅤ層、堆積層2と第54次調査のⅣ層が対応する可能性が考えられる（註）。



第15図　層序と上面検出遺構の関係

註：堆積層の比高差に関しては、仙台市教育委員会(2010)における表層の微地形分類により、第94・120次調査区が自然堤防、第52・54・88次調査区が後背湿地に位置しているという立地環境が要因と想定する。

上記のことを踏まえ、堆積層3上面検出遺構に関しては時期幅をもたせて10世紀前葉以降の古代～中世、堆積層2上面検出遺構に関しては中世と推測する。

（2） 出土遺物からみた遺構の時期について

堆積層の上面で検出された遺構について、出土遺物から堆積層1・4・5上面検出遺構について検討する。

・堆積層5について

第120次調査で発見されたＳＸ1735水田跡にともなう畦畔は、幅2ｍを超すことから大畦と考えられる。これまで山王遺跡や西隣の新田遺跡では、今回と同様の状況で古墳時代中期以降の検出面下層から水田跡が発見されている。出土遺物から古墳時代前期頃と推測され、本調査区から南に約200ｍ離れた第88次調査では、放射性炭素年代測定法による分析結果との整合性も確認されている（多賀城市教育委員会2012）。よって、今回の調査で発見された水田跡も古墳時代前期頃のものと考えられる。

・堆積層4上面検出遺構

第94次調査で発見されたＳＤ1723溝跡は、埋土に灰白色火山灰をブロック状に含むことから、10世紀前葉以降のものと考えられる。

第120次調査では、この層上面で古い順からＳＤ1737溝跡→ＳＢ1736掘立柱建物跡→ＳＤ1739溝跡という重複関係を確認した。ＳＢ1736の柱抜取り穴から土師器杯Ｂ類の破片が出土していることから、この建物跡の解体時期は8世紀後葉を遡らないと考えられる。このことから、ＳＤ1739溝跡も8世紀後葉以降の年代が想定できる。

・堆積層1と同時期の遺構

近世の陶磁器や土人形が出土していることから、近世以降の堆積層と考えられる。この層を直接掘り込む遺構は発見されなかったが、ＳＸ1734の検出面から同時期の遺物が出土している。よって、ＳＸ1734は近世以降の時期と考えられる。

参考文献

多賀城市教育委員会「Ⅲ．第54次調査」『山王遺跡－第51・54・57次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第81集　2006
多賀城市教育委員会「Ⅱ　山王遺跡第88次調査」『山王遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第109集　2012
仙台市教育委員会『宮城県仙台港後背地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ　沼向遺跡第4次～34次調査』仙台市文化財調査報告書第360集　2010

SX1735水田跡畦畔検出状況（北西より）

Ⅳ層上面遺構完掘状況（北西より）

写真図版1

Ⅱ・Ⅲ層上面遺構検出状況（北西より）

Ⅱ・Ⅲ層上面遺構完掘状況（北西より）

写真図版2

SK1743断面（南より）

須恵器蓋（SK1741）

手捏ね土器（SK1743）

写真図版3

附章　山王遺跡第120次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

山王遺跡第120次調査では、中世の土壙、古代の建物跡と溝などとともに、古墳時代前期の堆積層からは畦畔が検出され、当時の水田層の可能性が考えられた。ここでは、当該層における稲作の可能性を検討する目的で、プラント・オパール分析を行った。

2．試料

分析試料は、Ⅸ層（サンプル№①）、X層（サンプル№②）、XⅠ層（サンプル№③）の3点である。このうち、X層が古墳時代前期の水田層と考えられた土層である。なお、試料はいずれも調査担当者によって採取され、当社に送付されたものである。

3．分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約1gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μm以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重, 単位：10－5g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。

各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山, 2000）。

4．結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。また、プラント・オパール以外に海綿骨針も検出された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

イネはX層のみで検出されている。密度は比較的高い値である。キビ族型もX層のみで検出されているが、低い密度である。ヨシ属はⅨ層、X層、XⅠ層の各層で検出されている。このうち、Ⅸ層とX層では比較的高い密度である。ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型も各層で検出されているが、いずれも低い密度である。海綿骨針はすべての試料で検出されているが、いずれも低い密度である。

表1　多賀城市山王遺跡第120次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）＼層位		Ⅸ層	X層	XⅠ層
イネ科	Gramineae（Grasses）			
イネ	*Oryza sativa*		*36*	
キビ族型	Paniceae type		*6*	
ヨシ属	*Phragmites*	*30*	*24*	*6*
ススキ属型	*Miscanthus* type	*24*	*18*	*18*
タケ亜科	Bambusoideae（Bamboo）			
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	*30*	*6*	*6*
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	*54*	*36*	*12*
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	*42*	*12*	*12*
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	*6*	*6*	*6*
その他	Others	*12*	*6*	
未分類等	Unknown	*144*	*144*	*73*
（海綿骨針）	Sponge	*6*	*6*	*6*
プラント・オパール総数	Total	*342*	*294*	*133*

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa*		*1.06*	
ヨシ属	*Phragmites*	*1.89*	*1.52*	*0.38*
ススキ属型	*Miscanthus* type	*0.30*	*0.22*	*0.22*
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	*0.35*	*0.07*	*0.07*
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	*0.26*	*0.17*	*0.06*
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	*0.31*	*0.09*	*0.09*
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	*0.02*	*0.02*	*0.02*

5．考察

（1） 山王遺跡第120次調査における稲作

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、通常、イネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。ただし、仙台平野（仙台市域、多賀城市域）におけるこれまでの調査例では、密度が3,000個/g程度あるいはそれ以下でも水田遺構が検出された例が多く報告されていることから、ここでは3,000個/gを目安として検討する。

イネが検出されたのはX層のみである。プラント・オパール密度は3,600個/gと比較的高い値であり、稲作跡の判断基準である3,000個/gを超過している。また、直上のⅨ層および直下のⅩⅠ層からはイネが検出されておらず、上層あるいは他所からプラント・オパールが混入した危険性は考えにくい。さらに、発掘調査において畦畔が確認されていることなどから、X層が水田耕作層である可能性は極めて高いと考えられる。

（2） プラント・オパール分析から推定される周辺植生と環境

イネ以外の分類群では、Ⅸ層とX層でヨシ属が比較的高い密度である。おもな分類群の推定生産量（図1の右側）をみると、ヨシ属はXで優勢となっており、X層では卓越している。このことから、調査地ではX層の時期は水田稲作が営まれていたが、次第に湿地化しⅨ層の時期には湿地の環境であったと推定される。また、各層とも調査地周辺の乾いたところにはススキ属やササ属（チマキザサ節やミヤコザサ節）、メダケ属（メダケ節、ネザサ節）などの竹笹類が生育していたと考えられる。

6．まとめ

山王遺跡第120次調査においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討を行った。その結果、X層においてイネのプラント・オパールが比較的高い密度で検出され、調査地で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、Ⅸ層の時期の調査地周辺は湿った環境であり、各層とも周辺の比較的乾いたところにはススキ属、ササ属やメダケ属などの竹笹類が生育していたと推定された。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，31，p.70-83.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－．考古学と自然科学，20，p.81-92.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志（1998）稲作の起源を探る．岩波新書．

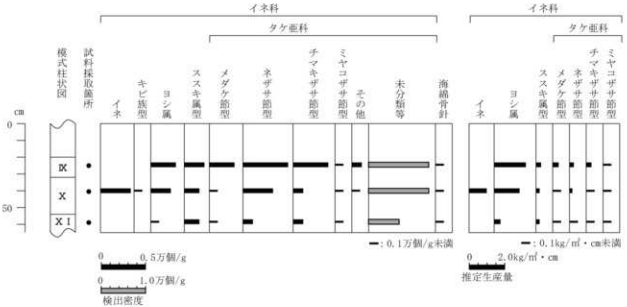
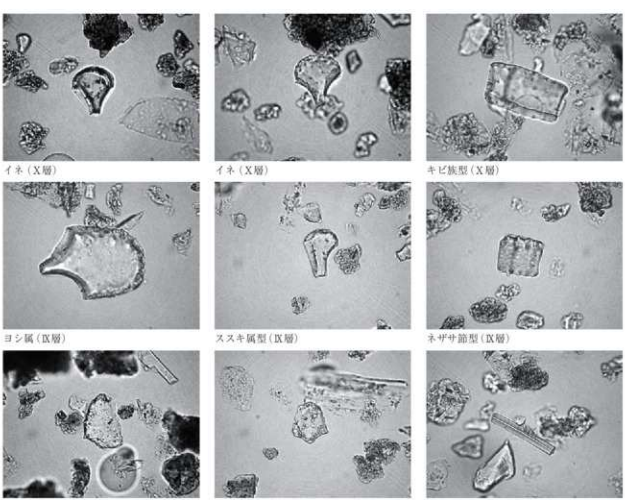


図1　山王遺跡第120次調査のプラント・オパール分析結果

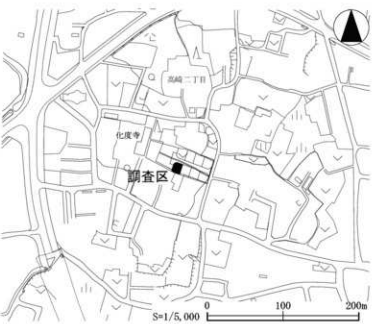


写真図版　山王遺跡第120次調査のプラント・オパール

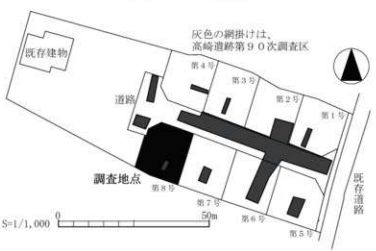
XVIII　高崎遺跡第93次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、平成23年度に高崎遺跡第90次として発掘調査した宅地造成区画のうち、南西側1区画における建売住宅新築に伴うものである。平成24年8月8日に地権者より当該地における建売住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、8区画に建売住宅を新築し、建物の基礎工事として、5・7号棟では直径600㎜、長さ2～5mの柱状改良杭をそれぞれ42本と36本打ち込み、1～4・6号棟では現地表から深さ45cmの掘削を行い、部分補強のための転圧工事の際に3.8～11.6m×1.5mの範囲で深さ1.5mの掘り込みを行うこととなっていた。8号棟では、建物の基礎工事として、深さ45cmの掘削と、建物北西部において部分補強のための転圧工事を行う際に6.4m×1.5mの範囲で深さ1.0mの掘り込みを行うこととなっていた。



第1図　調査区位置図



第2図　調査区位置模式図

宅地造成の際に行った高崎遺跡第90次調査では、各宅地部分の確認調査を行い、1～7号棟部分からは調査対象となるような遺構は発見されず、8号棟の部分からは古代までさかのぼる可能性のある柱穴が発見されていることから、8号棟の建築部分のみ遺跡への影響が懸念された。このため、発掘調査が必要である旨を地権者に対し説明し、実施についての了解を得た。その後、平成24年8月31日に依頼書と承諾書の提出を受けて確認調査を実施するに至った。

調査は9月6日から開始し、重機で現代の耕作土のⅠ層を除去した。Ⅰ層除去後、遺構検出面であるⅡ層、Ⅲ層を確認し、柱穴を検出した。また、高崎遺跡第90次調査の8区の一部も検出し、前回の調査と重複する部分があることを確認した。9月7日から精査を開始し、9月11日に遺構検出状況の写真撮影を行い、その後図面の作成と記録を行い、9月14日に埋め戻しと機材の撤収を行って全ての調査を終了した。

2　調査成果

（1）　層　序

今回の調査で確認した層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：現代の耕作土である。

Ⅱ層：明褐色粘質土であり、部分的にⅢ層由来と考えられる黄褐色土がブロック状に混入する。柱穴の検出面である。

Ⅲ層：浅黄橙色土がブロック状に多量に混入する黄褐色の岩盤であり、掘立柱建物跡や柱穴の検出面である。

（2）発見遺構

今回の調査では、掘立柱建物跡2棟、柱穴6基を検出した。

SB1765掘立柱建物跡（第3図）

調査区南東側で発見した東西、南北ともに1間以上の建物跡である。調査区外に延びているため、全容は不明である。3基の柱穴を検出しており、東側柱列の2基で柱痕跡、南側柱列東より1間目柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、東側柱列で測ると北で19度19分西に偏している、柱間は、東側柱列が1.93m、南側柱列が約1.6m である。掘方は円形または不整円形であり、直径は25㎝～ 40㎝である。埋土は黒色粒が混入する明黄褐色砂質土である。柱痕跡は直径10㎝～ 15㎝の円形であり、埋土はにぶい黄橙色や灰黄褐色土をブロック状に含む黄褐色砂質土である。

遺物は、P1の柱痕跡から磁器の破片が出土している。

SB1766掘立柱建物跡（第3図）

調査区南東側で発見した東西、南北ともに1間以上の建物跡である。調査区外に延びているため、全容は不明である。3基の柱穴を検出しており、全ての柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は、西側柱列で測ると北で約19度西に偏している。柱間は、北側柱列が約1.4m、西側柱列が約1.1m である。掘方は円形または不整円形であり、直径は20㎝～ 30㎝である。埋土は黒色粒が混入する明黄褐色砂質土である。柱抜取り穴の埋土はにぶい黄橙色や灰黄褐色土をブロック状に含む黄褐色砂質土である。遺物は出土していない。

（3）出土遺物

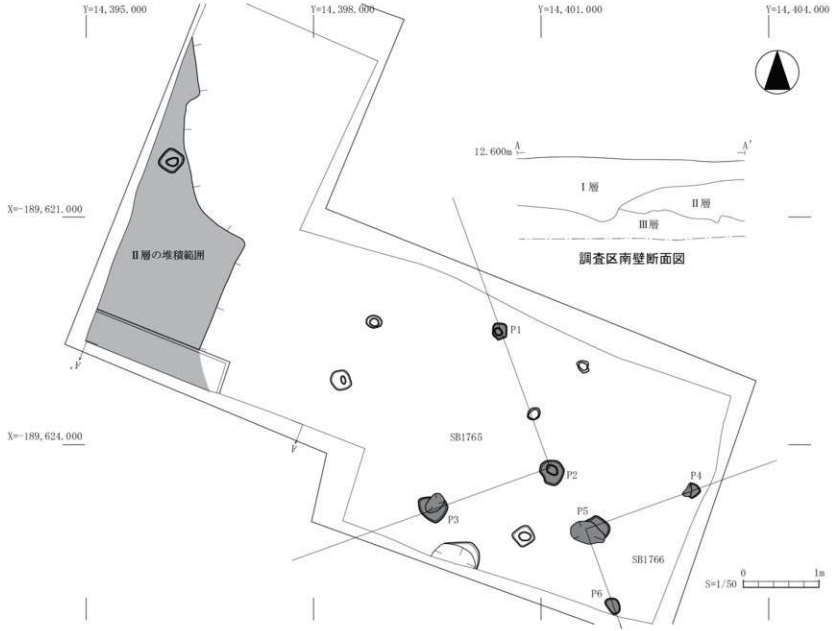
Ⅰ層から須恵器甕の破片が1点、磁器の破片が6点出土した。

3　まとめ

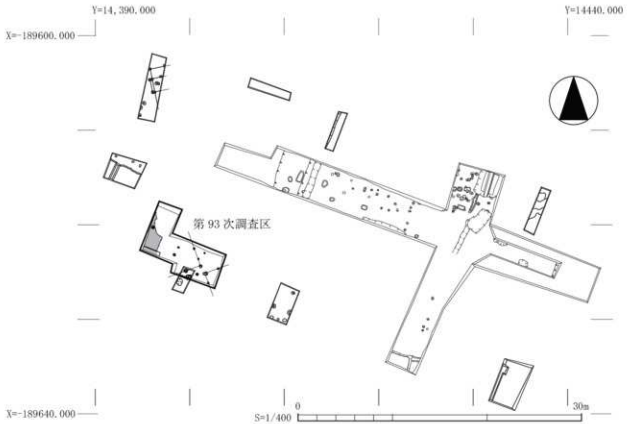
建物跡の時期については、SB1765掘立柱建物跡はP1の柱痕跡から磁器の破片が出土しているので、近世以降のものと考えられる。SB1766掘立柱建物跡はSB1765とほぼ同じ方向に展開する建物跡であることから、近似する時期のものと推定する。

参考文献

多賀城市教育委員会「Ⅳ　高崎遺跡第90次調査」「山王遺跡ほか」多賀城市文化財調査報告書第109集　2012


Y=14,395.000
Y=14,398.000
Y=14,401.000
Y=14,404.000
X=-189,621.000
X=-189,624.000
Ⅱ層の堆積範囲
12.600m
A
A'
Ⅰ層
Ⅱ層
Ⅲ層
調査区南壁断面図
P1
P2
P3
P4
P5
P6
SB1765
SB1766
S=1/50
0
1m

第3図　検出遺構平面図



第4図　本調査区の位置と第90次調査区

遺構検出状況（南西より）

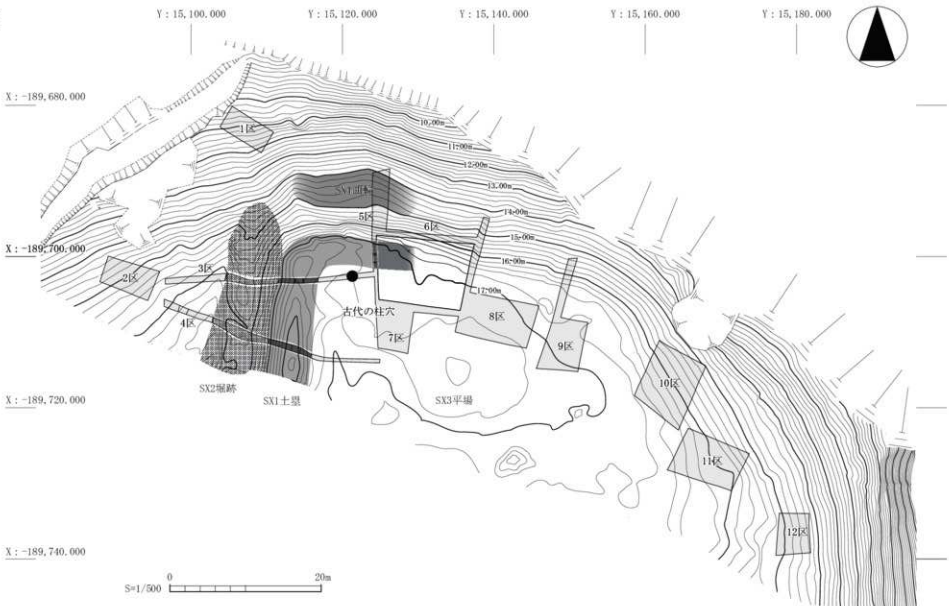
XIX　桜井館跡第2次調査

1　地理的・歴史的環境

桜井館跡は高崎丘陵の東端部あたり、東側に張り出した標高19ｍの舌状台地上に立地する。現在の住居表示では中央一丁目地内であり、多賀城市役所の西側に位置している。現況は雑木林となっている。本館跡については、安永3年(1774)の『風土記御用書出』留ケ谷村の項に「　一　当郡田中村御境桜井館　竪三十間横十五間　右二館　共謹御居館と申儀並年月共相不申候事」という記載があり、誰の居館であるかは不明だとされている。また、昭和41年に行った東北学院大学の館跡の調査では、遺跡はすでに破壊され、記録のみが残っているものであり、所在は不明としている（加藤・野崎1973）。多賀城町誌では、「山崎の丘陵地帯の上部に土塁の跡が残っている。黒川某の居館とも言われている」と記載している（多賀城町誌編纂委員会1967）。

本館跡についてはこれまでに、水道工事配管整備事業に伴い館跡北端部の丘陵裾部の調査を実施しているが、遺構・遺物ともに発見できなかった（多賀城市教育委員会2006）。館跡本体に係る本格的な発掘調査は実施されていないため、年代や構造については不明である。

第1図　調査区位置図


Y：15,100.000
Y：15,120.000
Y：15,140.000
Y：15,160.000
Y：15,180.000
X：-189,680.000
X：-189,700.000
X：-189,720.000
X：-189,740.000
1区
2区
3区
4区
5区
6区
7区
8区
9区
10区
11区
12区
SX1土塁
SX2掘跡
SX3平場
古代の柱穴
10.00m
11.00m
12.00m
13.00m
14.00m
15.00m
16.00m
17.00m
0
20m
S=1/500

第2図　調査区配置図

2　調査に至る経緯と経過

本調査は、宅地造成に伴うものである。平成24年6月15日に開発業者より当該地における宅地造成計画と埋蔵文化財とのかかわりについての協議書が提出された。計画では、対象地全域を最大10mの切土をして宅地を造成するものであった。本館跡では、踏査により丘陵西側で南北方向に延びる土塁状の高まりや堀跡・平場と見られる遺構が確認されていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、工法変更により遺構等の保存が計れないか協議を行ったが、申請どおりの工法で着手することに決定した。なお、開発面積が約4,600㎡と広範囲に及んでいることから、事前に遺跡の状況を把握する必要があると判断し確認調査を実施することとなった。その後、6月28日開発業者より発掘調査の依頼・承諾書の提出を受けて、調査の実施に至ったものである。

調査は11月2日より館跡全体の地形の平面測量から開始した。測量が終了した20日より作業員を動員して、現況で確認できる土塁、堀、平場を中心に館跡全域に12箇所（1 ～ 12区）の調査区を設定した。その結果、3・4区では南北方向に延びるＳＸ1土塁とこれに伴うＳＸ2堀跡が、良好な状態で残存していることを確認した。また、5区でも残存状況は悪いものの、ＳＸ1の延長部を確認し、本遺構が東西方向に屈曲していることが明らかになった。一方、丘陵頂部の平場（ＳＸ3）や北側及び両側についても複数の調査区（1・2・6 ～ 12区）を設定したが、館跡に伴う遺構は発見できなかった。なお、3 ～ 5区ではＳＸ1を一部掘り下げ積土の状況を確認したところ、黒褐色土（旧表土）上面に積み上げたことを確認した。また、旧表土から古代の土器片が出土したほか、3区の東側ではその下層で古代の柱穴2基を確認した。

12月12日、ラジコンヘリコプターを使って館跡全体の航空写真撮影を行い、14日には調査毎に写真撮影を行った。1月16 ～ 18日にかけて、各調査区の養生作業を行うとともに、この作業と並行して発掘器材も搬出した。30・31日の2日間で平面図を作成して、確認調査の一切を終了した。

3　調査成果

今回の調査では、調査対象地内の12箇所（1 ～ 12区）に調査区を設定し、ＳＸ1土塁、ＳＸ2堀跡、ＳＸ3平場、ＳＸ4曲輪の状況を確認するとともに、旧表土下で古代の柱穴を発見した。このうち、ＳＸ3平場に設定した7 ～ 9区、調査区北西部に設定した1区、ＳＸ1土塁の北側に設定した6区、東側の緩斜面に設定した10 ～ 12区では遺構・遺物は発見できなかった。調査区西端部に設定した2区については遺構は発見できなかったが、堆積層から古代の土器片が出土した。

（1）　発見遺構と遺物

ＳＸ1土塁（第2図）

南北方向と東西方向の土塁が、ＳＸ3平場北西隅でおおよそ直角に接続している。各調査区で確認した土塁と地形測量から、残存する土塁の規模は南北方向で約19m、東西方向で約17mである。規模は最も残りの良い4区で見ると上幅1.2m前後、基底部の幅は5.8 ～ 5.9mで、高さは約1mである。積土は旧表土（黒褐色土）上面に構築されている。

ＳＸ2堀跡（第2図）

ＳＸ1土塁の西側に沿って確認される南北方向の堀跡であり、残存する長さは約20mである。最も残りの良い4区では、上幅7.7 ～ 7.9m、下幅は1m前後であり、ＳＸ1上端から堀底面までの比高はおよそ2.8mである。断面形は船底形で、壁は底面より緩やかに立ち上がっている。

ＳＸ３平場（第２図）

館跡頂部の東西約45ｍ、南北約20ｍの平坦面が相当するが、館跡に伴う遺構・遺物は発見できなかった。なお、3区東側の旧表土（黒褐色土）下から柱穴2基を発見した。内1基は柱痕跡の検出面から須恵器の細片が出土した。

ＳＸ４曲輪（第２図）

館跡北斜面西寄りのおよそ東西約15ｍ、南北５ｍの平坦面が相当する。

４　まとめ

（１）　今回の調査では、館跡に伴う土塁や堀跡、平場・曲輪の現状を確認したほか、古代の柱穴や須恵器を発見した。

（２）　館跡の年代については、遺物が出土していないため不明である。

（３）　桜井館跡は城館として機能していた時期はもとより、古代まで遡る複合遺跡であることが明らかとなった。

【参考文献】

多賀城市史編纂委員会『多賀城市史　第1巻　原始・古代・中世』多賀城市　1997
多賀城町誌編纂委員会『多賀城町誌』　1967
加藤孝・野崎準「多賀城跡内の館跡」『東北学院大学東北文化研究所紀要』5　1973
多賀城市教育委員会「Ⅷ．桜井館跡第１次調査」『多賀城市内の遺跡1―平成16年度発掘調査報告書―』多賀城市文化財調査報告書第84集　2006

桜井館跡全景（南東より）

桜井館跡全景（南より）

3区西端部（西より）

写真図版1

3・4区 SX1・2検出状況
（西より）

3区 SX1積土状況
（東より）

4区 SX1積土状況
（西より）

写真図版2

4区 SX1積土状況
（北東より）

5区 SX1積土状況

7区 SX3平場
（南東より）

写真図版3

9区 SX3平場
（南西より）

11区全景
（北東より）

2区全景
（東より）

写真図版4

XX　大日南遺跡第11次調査

1　調査に至る経緯と経過

本調査は、店舗新築計画に伴うものである。平成24年3月16日に地権者より当該地における店舗新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、建物基礎で23cm、外構基礎で25cm、駐車場基礎で65cm、給排水布設で1mの掘削を施すとのことであった。これまでの周辺の調査成果では、現地表から遺構検出面までは1.2mであることから、工事による掘削は遺構面まで及ばないが、計画面積が863.12㎡と広大であることから、確認調査を実施することとした。平成24年4月26日に依頼書と承諾書の提出を受けて、調査を実施することとなった。

第1図　調査区位置図

調査は5月15日から開始し、重機により掘削を行った。現代の盛土（Ⅰ層）と区画整理前の水田層（Ⅱ・Ⅲ層）を掘り下げ、褐色の荒い砂層（Ⅳ層）とにぶい黄褐色と黒色の植物遺存体層（Ⅴ層）を確認した。Ⅳ層とⅤ層の上面で遺構検出作業をおこなったが、遺構・遺物ともに発見されなかった。調査区南西隅にトレンチを設定して層序を確認したところ、現地表下2mの深さでもⅤ層が堆積していることを確認したため、遺構がないと判断して5月23日に調査を終了した。

2　層　序

今回の調査で確認した層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：暗褐色砂質土の現代の盛土である。

Ⅱ層：黒褐色粘質土の現代の水田層である。

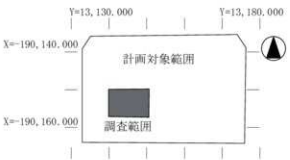
Ⅲ層：暗赤褐色粘質土の現代の水田層である。

Ⅳ層：褐色の粒子の粗い砂質土である。調査区西側に部分的に堆積していた。

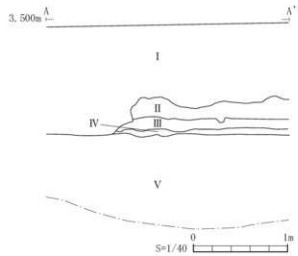
Ⅴ層：にぶい黄褐色粘質土の植物遺存体層を主体とし、黒色の植物遺存体層と互層に堆積している。

3　まとめ

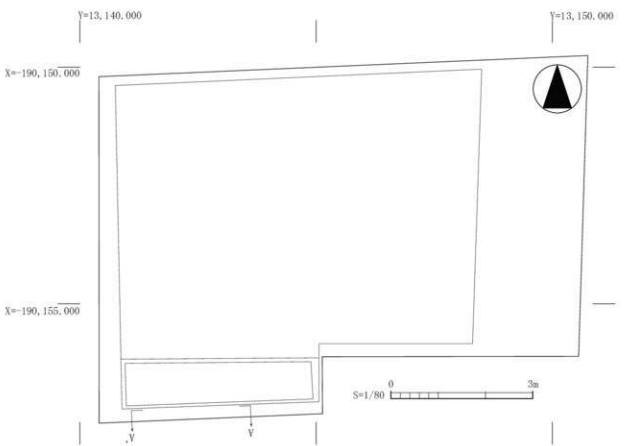
本調査区には、植物遺存体層であるⅤ層が厚く堆積していることから、谷地や湿地のような環境であっ



第2図　計画範囲と調査範囲



第3図　調査区南壁断面図

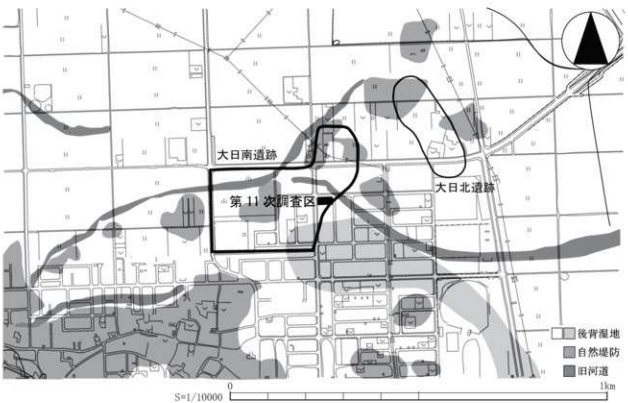


第4図　調査区平面図

たと考えられる。出土遺物がないため、時期は不明である。本調査区周辺は、表層の微地形分類により、旧河道と後背湿地が広がっていたと考えられている（仙台市教育委員会2010）（第5図）。本調査の成果は、周辺から想定できるような低湿な環境を裏付けるものと考えられる。

参考文献

仙台市教育委員会　『宮城県仙台港後背地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ　沼向遺跡第4次～34次調査』仙台市文化財調査報告書第360集　2010



第5図　調査区の位置と周辺の微地形分類（仙台市教育委員会2010より作成）

調査区全景

層　序

写真図版

報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき2
書名	多賀城市内の遺跡2
副書名	平成24年度ほか発掘調査報告書 新田遺跡　市川橋遺跡　山王遺跡　高崎遺跡　桜井館跡　安楽寺遺跡 大日南遺跡
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第111集
編著者名	石川俊英、島田敬、相澤清利、小原一成、四家礼乃
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873　宮城県多賀城市中央二丁目27-1　℡：022-368-0134
発行年月日	西暦2013年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新田遺跡 （第82次）	宮城県多賀城市 新田字後93-6	042099	18012	38度 17分 45秒	140度 57分 43秒	20120112	30㎡	個人住宅 建設
新田遺跡 （第83次）	宮城県多賀城市 新田字新後2-2	042099	18012	38度 17分 43秒	140度 57分 56秒	20120208	12㎡	個人住宅 建設
山王遺跡 （第94次）	宮城県多賀城市 山王字中山王 42-7、42-8、42-1の一部	042099	18013	38度 17分 39秒	140度 58分 47秒	20120119 ～ 20120209	95㎡	宅地造成
山王遺跡 （第95次）	宮城県多賀城市 南宮字町70	042099	18013	38度 17分 54秒	140度 58分 37秒	20120117 ～ 20120201	51㎡	個人住宅 建設
山王遺跡 （第96次）	宮城県多賀城市 南宮字西町浦34-15	042099	18013	38度 17分 49秒	140度 58分 20秒	20120203 ～ 20120204	37㎡	個人住宅 建設
高崎遺跡 （第91次）	宮城県多賀城市 留ヶ谷1丁目22-18	042099	18018	38度 17分 43秒	141度 00分 30秒	20120125	20㎡	個人住宅 建設
安楽寺遺跡 （第1次）	宮城県多賀城市 新田字上43-1、44-1、45-1	042099	18033	38度 17分 25秒	140度 58分 07秒	20120113	14㎡	個人住宅 建設
新田遺跡 （第88次）	宮城県多賀城市 新田字新後3-1	042099	18012	38度 17分 43秒	140度 57分 56秒	20120711 ～ 20120721	72㎡	専用住宅 建設
市川橋遺跡 （第84次）	宮城県多賀城市 城南1丁目10-6の一部	042099	18008	38度 17分 42秒	140度 59分 42秒	20120411 ～ 20120427	100㎡	診療所 建設

市川橋遺跡（第86次）	宮城県多賀城市城南1丁目2-12	042099	18008	38度17分46秒	140度59分22秒	20120530～20120702	90㎡	個人住宅建設
山王遺跡（第100次）	宮城県多賀城市南宮字町41-1	042099	18013	38度17分49秒	140度58分52秒	20120417～20120428	60㎡	宅地造成
山王遺跡（第104次）	宮城県多賀城市山王字山王四区6、7	042099	18013	38度17分40秒	140度58分50秒	20120530～20120615	98㎡	農地整備
山王遺跡（第111次）	宮城県多賀城市南宮字町41-6の一部	042099	18013	38度17分49秒	140度58分52秒	20120904～20121006	49㎡	個人住宅建設
山王遺跡（第117次）	宮城県多賀城市南宮字町41-6の一部	042099	18013	38度17分49秒	140度58分52秒	20121018～20121212	61㎡	個人住宅建設
山王遺跡（第118次）	宮城県多賀城市南宮字町41-9	042099	18013	38度17分49秒	140度58分52秒	20121019～20121127	43㎡	個人住宅建設
山王遺跡（第120次）	宮城県多賀城市山王字中山王42-16	042099	18013	38度17分39秒	140度58分47秒	20121115～20130112	42㎡	個人住宅建設
高崎遺跡（第93次）	宮城県多賀城市高崎二丁目125-1の一部	042099	18018	38度17分28秒	140度59分52秒	20120906～120120914	36㎡	建売住宅建設
桜井館跡（第2次）	宮城県多賀城市中央1丁目104-1	042099	18028	38度17分25秒	141度00分22秒	20121102～20130131	440㎡	宅地造成
大日南遺跡（第11次）	宮城県多賀城市高橋4丁目17-1、17-2、17-17、17-29	042099	18048	38度17分13秒	140度59分01秒	20120515～20120519	70㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新田遺跡（第82次）	集落・屋敷				
新田遺跡（第83次）	集落・屋敷				
山王遺跡（第94次）	集落・都市	古代・中世・近世	掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡		
山王遺跡（第95次）	集落・都市	古代・中世以降	道路側溝・掘立柱建物跡・井戸跡		北2東西道路跡
山王遺跡（第96次）	集落・都市				
高崎遺跡（第91次）	集落・城館				
安楽寺遺跡（第1次）	散布地				
新田遺跡（第88次）	集落・屋敷	中世以降	溝跡・柱穴	須恵器	

市川橋遺跡（第84次）	集落・都市	古代	掘立柱建物跡・溝跡	土師器・須恵器・須恵系土器・軒丸瓦	
市川橋遺跡（第86次）	集落・都市	古代	掘立柱建物跡・溝跡	土師器・須恵器	
山王遺跡（第100次）	集落・都市	古代	道路跡・溝跡・土壙・柱穴	土師器・須恵器・須恵系土器	北1東西道路跡
山王遺跡（第104次）	集落・都市	古代 中世	掘立柱建物跡・溝跡・土壙	土師器・須恵器 土器片製円板	
山王遺跡（第111次）	集落・都市	古代	道路跡・溝跡・土壙・柱穴	土師器・須恵器・刻書土器・土器片製円板	北1東西道路跡
山王遺跡（第117次）	集落・都市	古代	掘立柱建物跡・材木塀跡・柱列・溝跡・土壙	土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦	北1東西道路跡に近接する材木塀跡
山王遺跡（第118次）	集落・都市	古代	道路跡・溝跡・土壙	土師器・須恵器・転用硯	北1東西道路跡
山王遺跡（第120次）	集落・都市	古墳時代・古代・中世	掘立柱建物跡・溝跡・水田跡	土師器・須恵器	古墳時代前期の水田跡
高崎遺跡（第93次）	集落・城館	近世・近代	掘立柱建物跡	磁器	
桜井館跡（第2次）	集落・城館	古代・中世	土塁・堀跡・曲輪・平場	須恵器	
大日南遺跡（第11次）	集落				

要　約	新田遺跡第82次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第83次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第88次調査では、中世以降の溝跡を発見した。
	市川橋遺跡第84次調査では、古代の掘立柱建物跡と溝跡を発見した。
	市川橋遺跡第86次調査では、古代の掘立柱建物跡と小溝群を発見した。
	山王遺跡第94次調査では、中世以降の井戸跡と溝跡、古代の掘立柱建物跡と溝跡を発見した。
	山王遺跡第95次調査では、北2東西道路跡の側溝を発見した。
	山王遺跡第96次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	山王遺跡第100次調査では、北1東西道路跡と溝跡を発見した。
	山王遺跡第104次調査では、古代から中世にかけての溝跡と土壙を発見した。
	山王遺跡第111次調査では、北1東西道路跡と溝跡を発見した。
	山王遺跡第117次調査では、北1東西道路跡に近接する掘立柱建物跡と材木塀を発見した。
	山王遺跡第118次調査では、北1東西道路跡と土壙を発見した。
	山王遺跡第120次調査では、中世以降の井戸跡、古代の掘立柱建物跡と溝跡を発見した。
	高崎遺跡第91次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	高崎遺跡第93次調査では、近世～近代の掘立柱建物跡を発見した。
	桜井館跡第2次調査では、館跡に伴うと考えられる土塁・堀跡・曲輪・平場を発見した。
	安楽寺遺跡第1次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	大日南遺跡第11次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。

多賀城市文化財調査報告書第111集

多賀城市内の遺跡2

―平成24年度ほか発掘調査報告書―

平成25年3月31日発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話（022）368-0134

発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話（022）368-1141

印刷　今野印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町2番10号
電話（022）288-6123

VEGETABLE OIL INK